

81-71

林學士柴田榮吉著

日本山林一斑

附現行森林法規

東京 博文館藏版

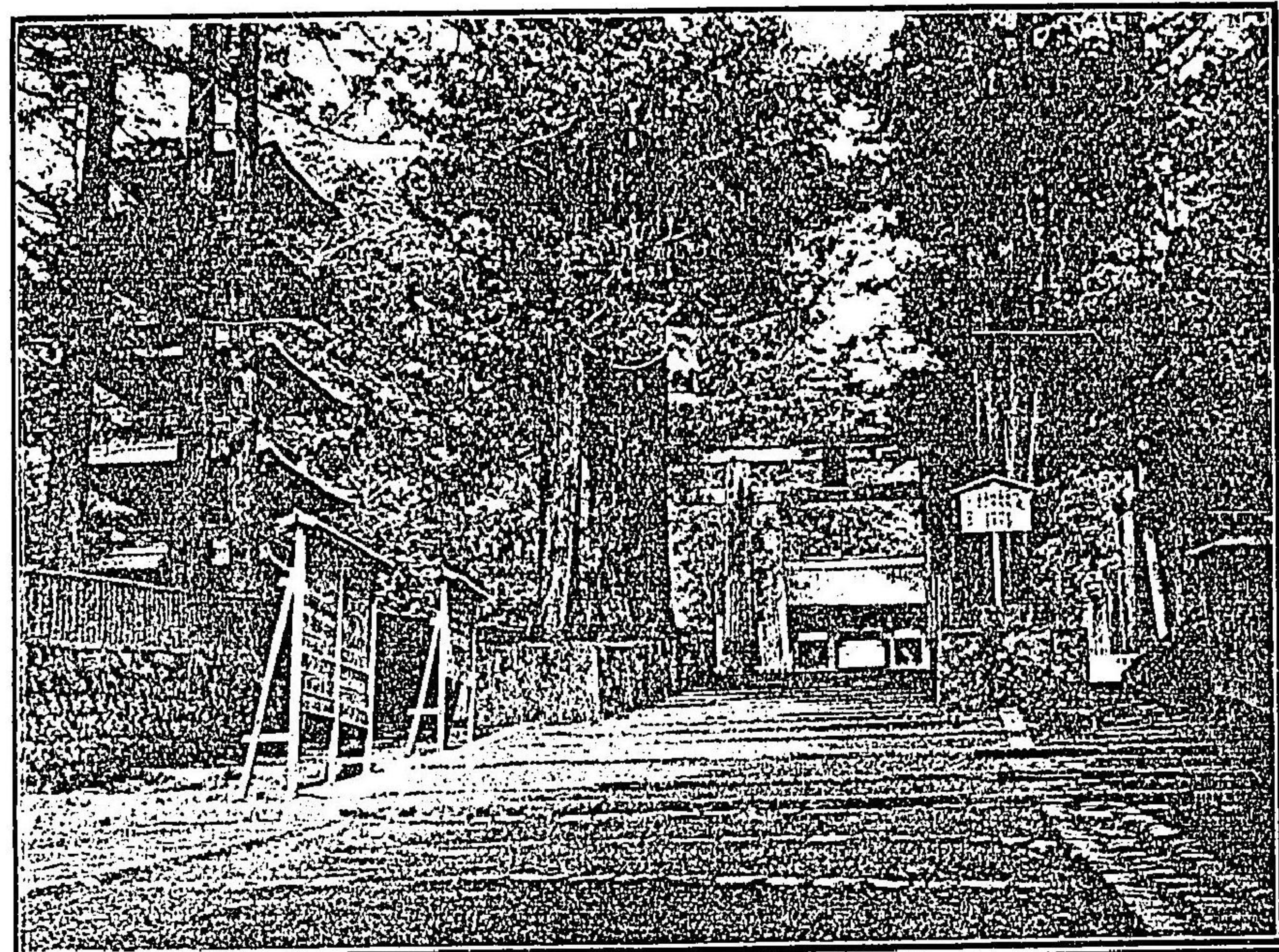




沼津近郊の富士山

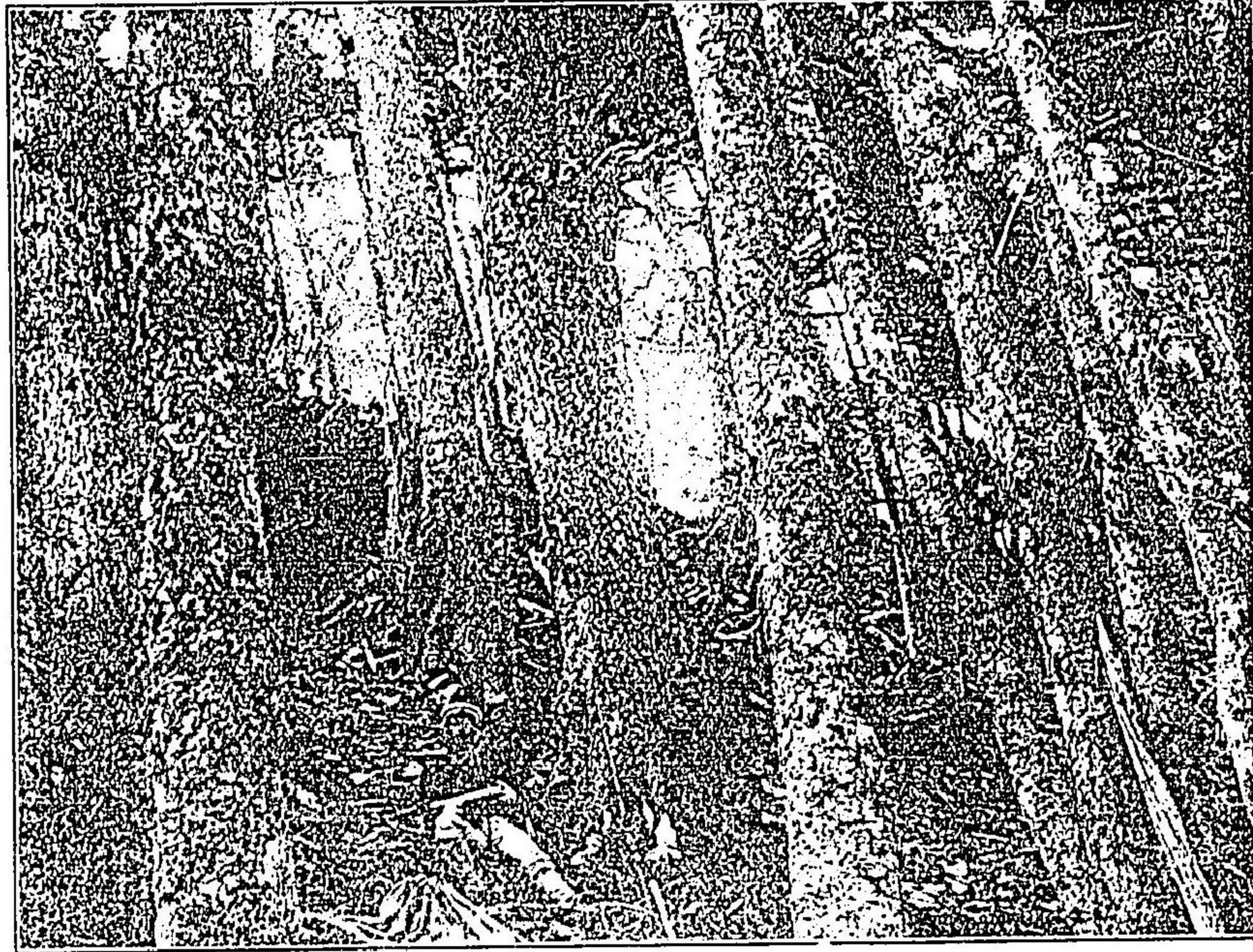
繪興舎印行

日 光 東 照 宮 の 表 門

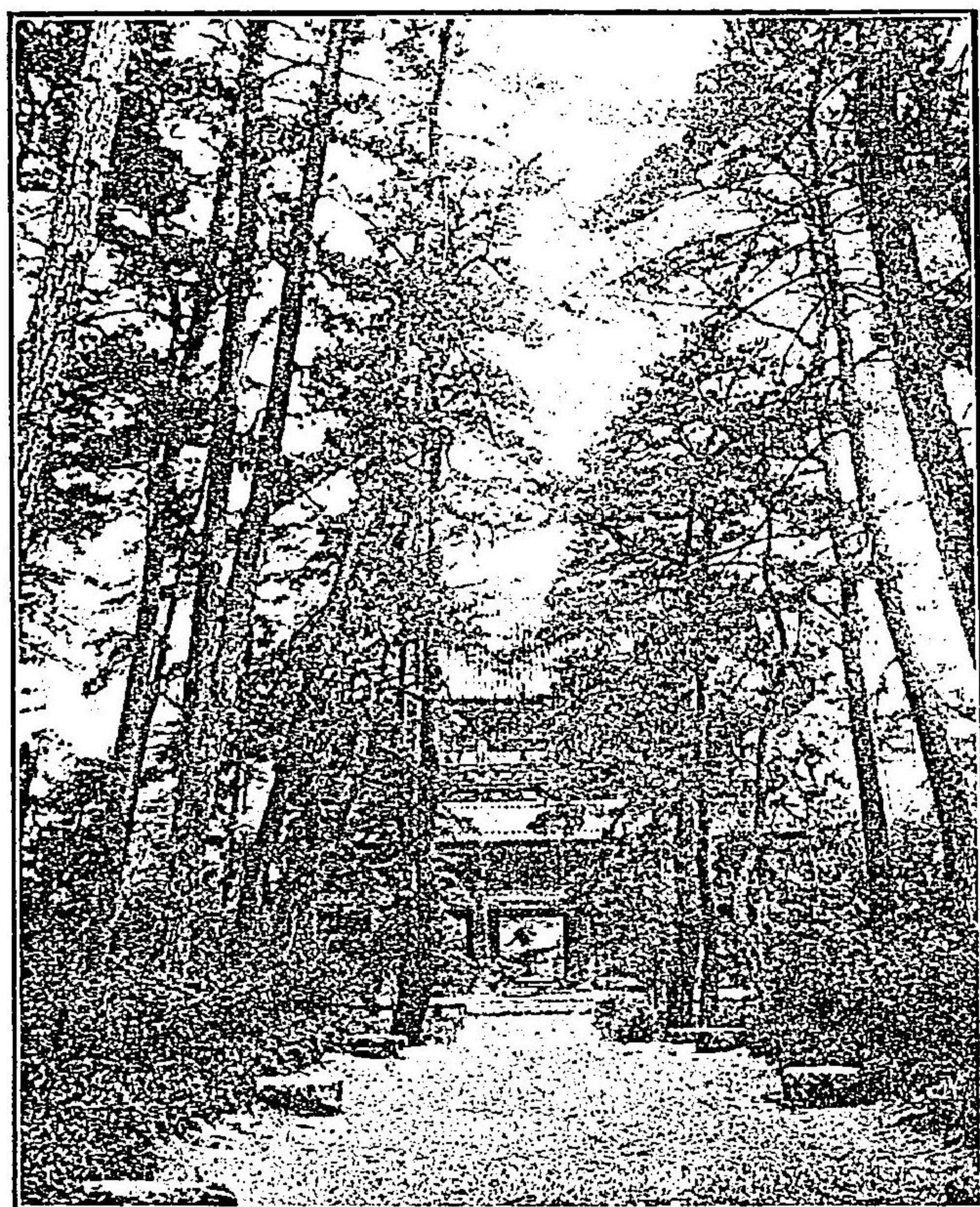


日 光 今 市 の 杉 林

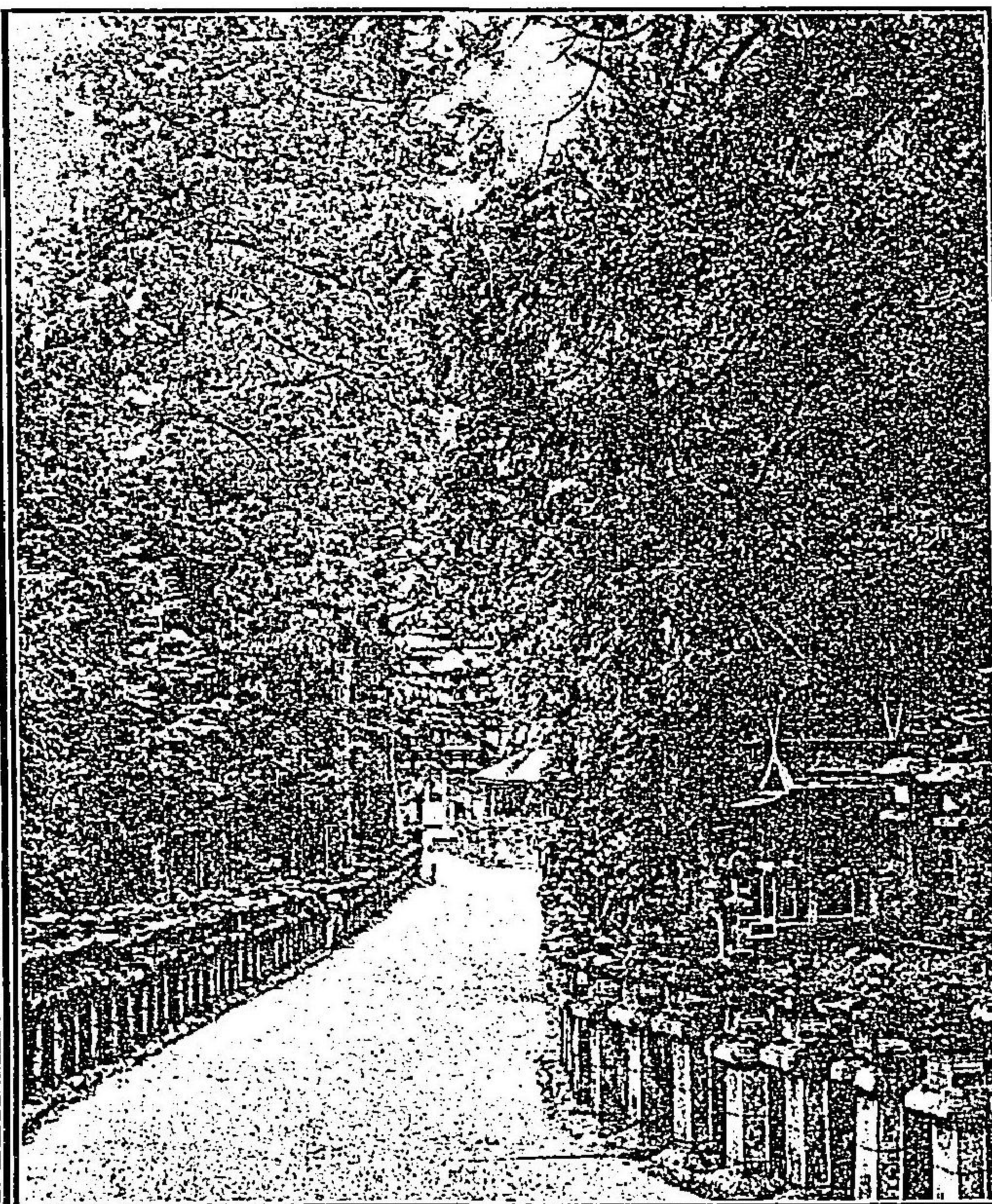
林然天ツマロトリモチア尺百五千一萬一腹東の山高新海峯



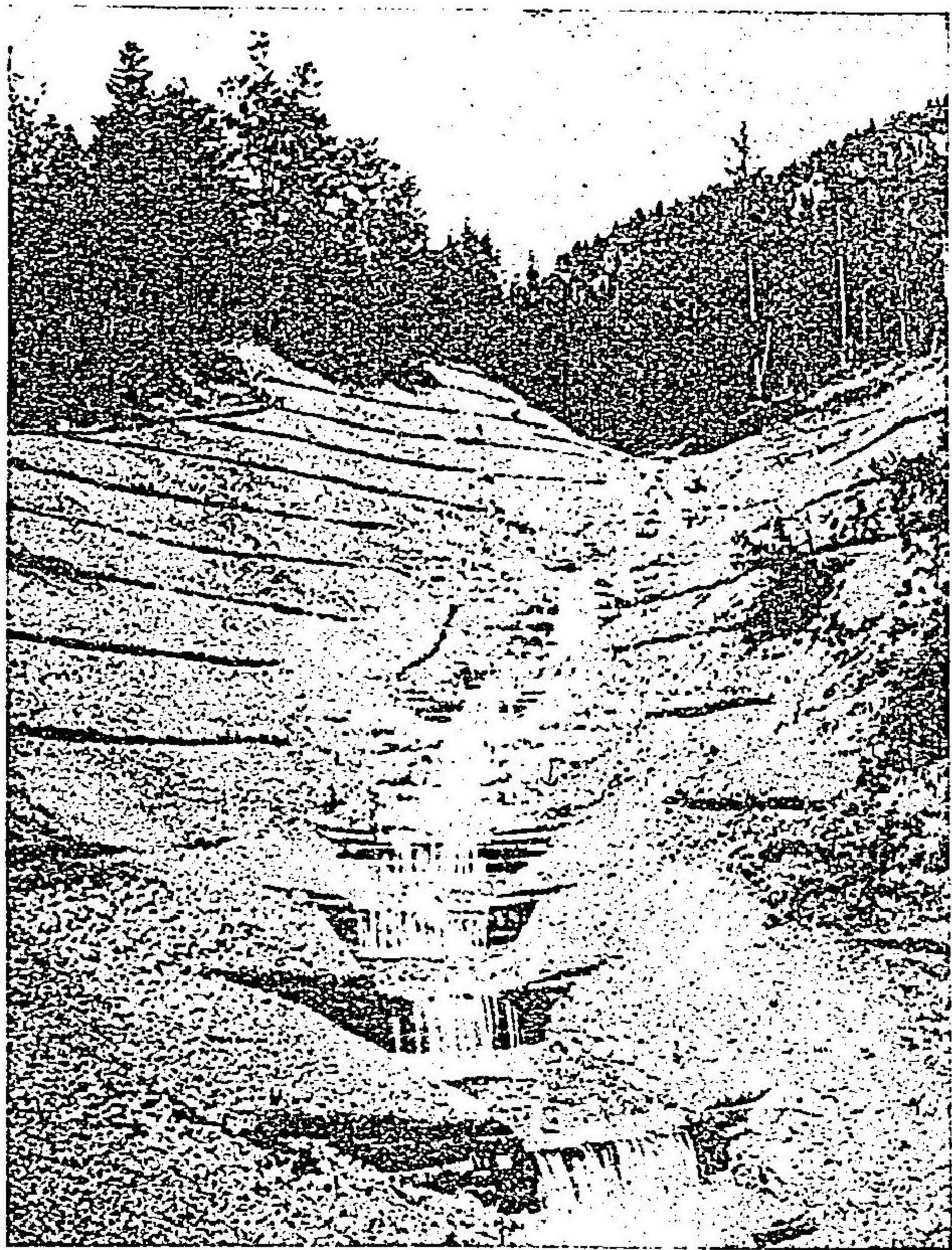
林然天ツマツエび及ツマロト道山里斜郡里斜道海北



寺 禪 南 都 京



社 神 日 春 長 奈

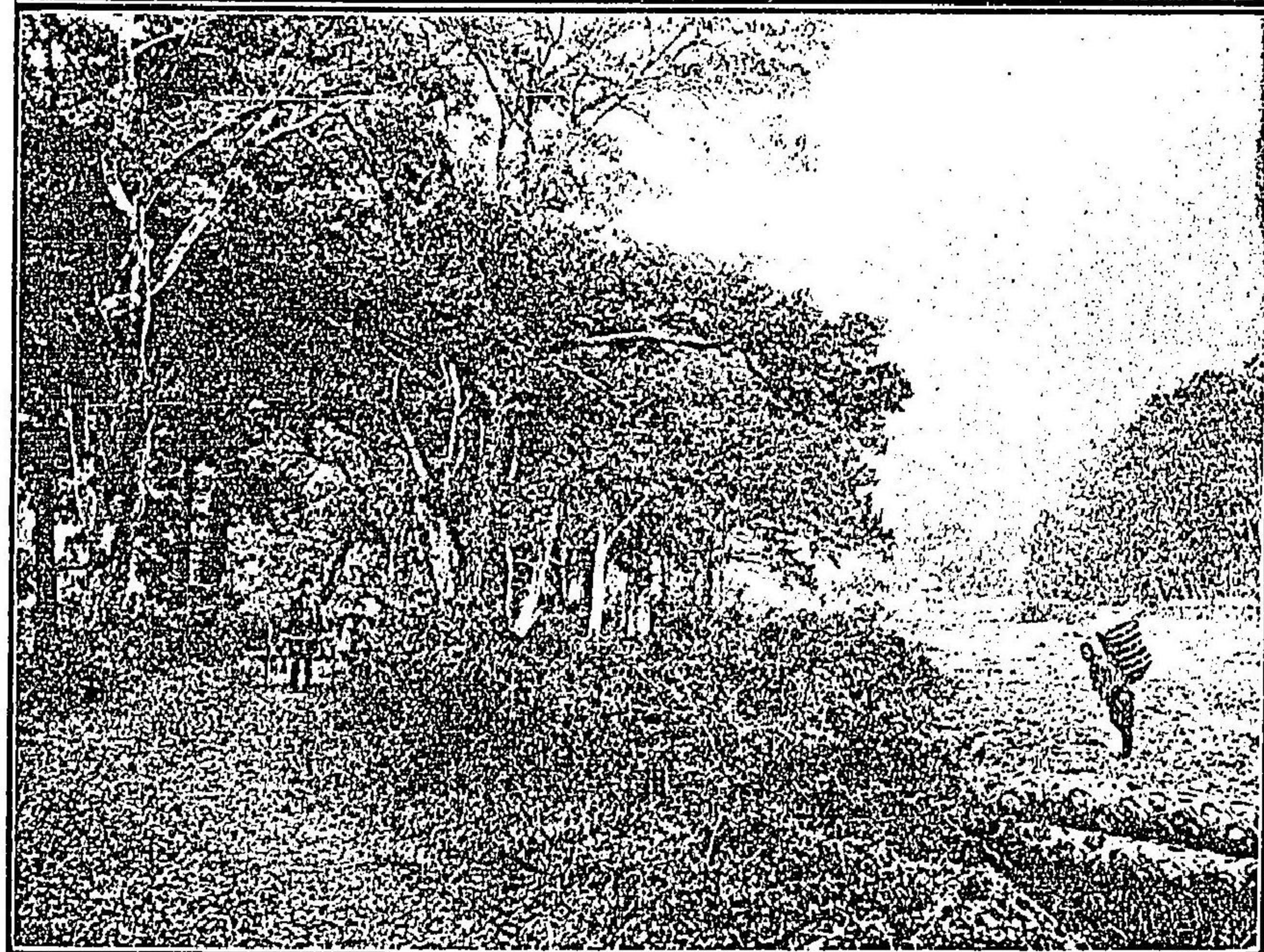
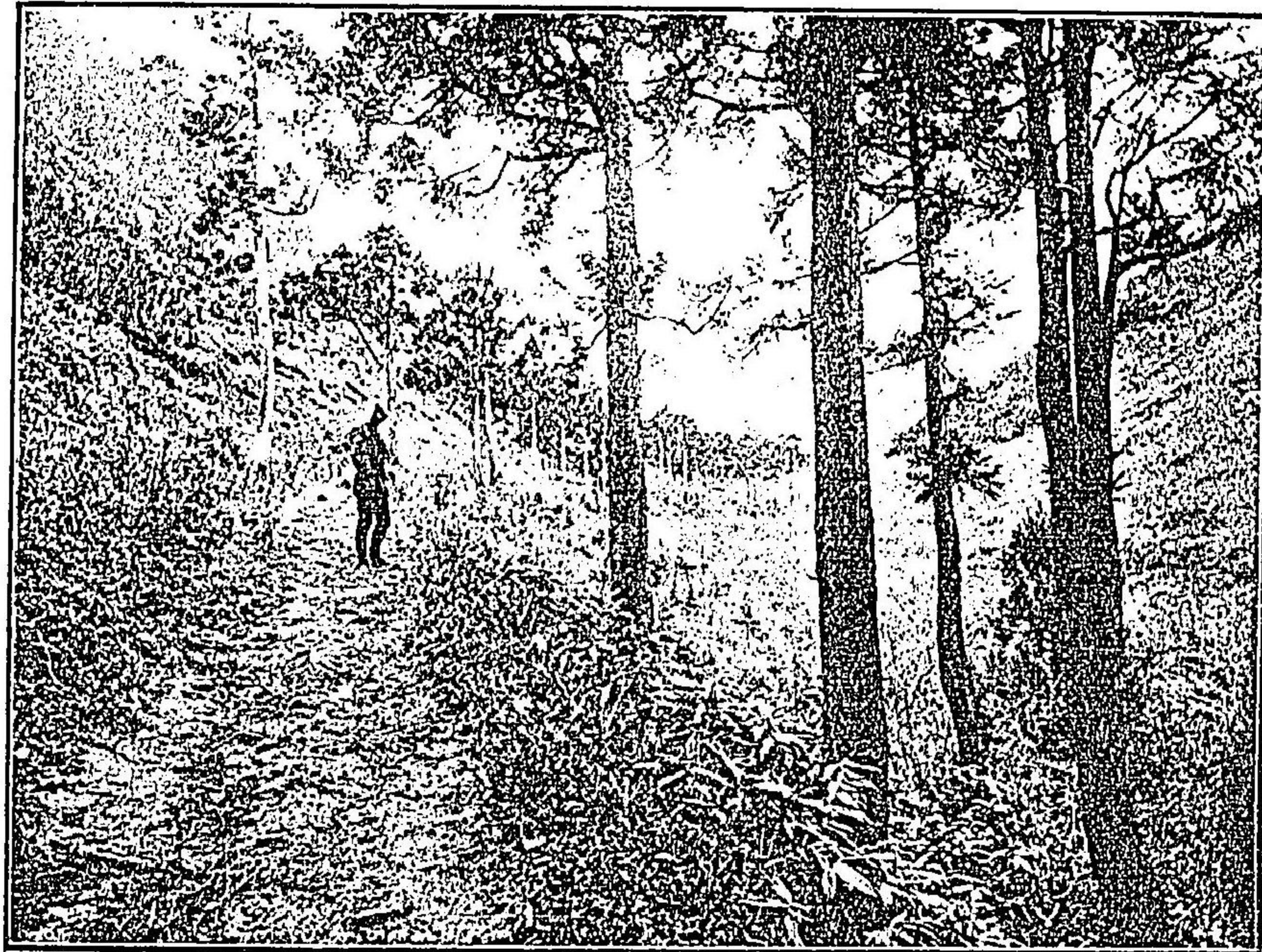


事工防砂流溪ルーニミの國澳部上



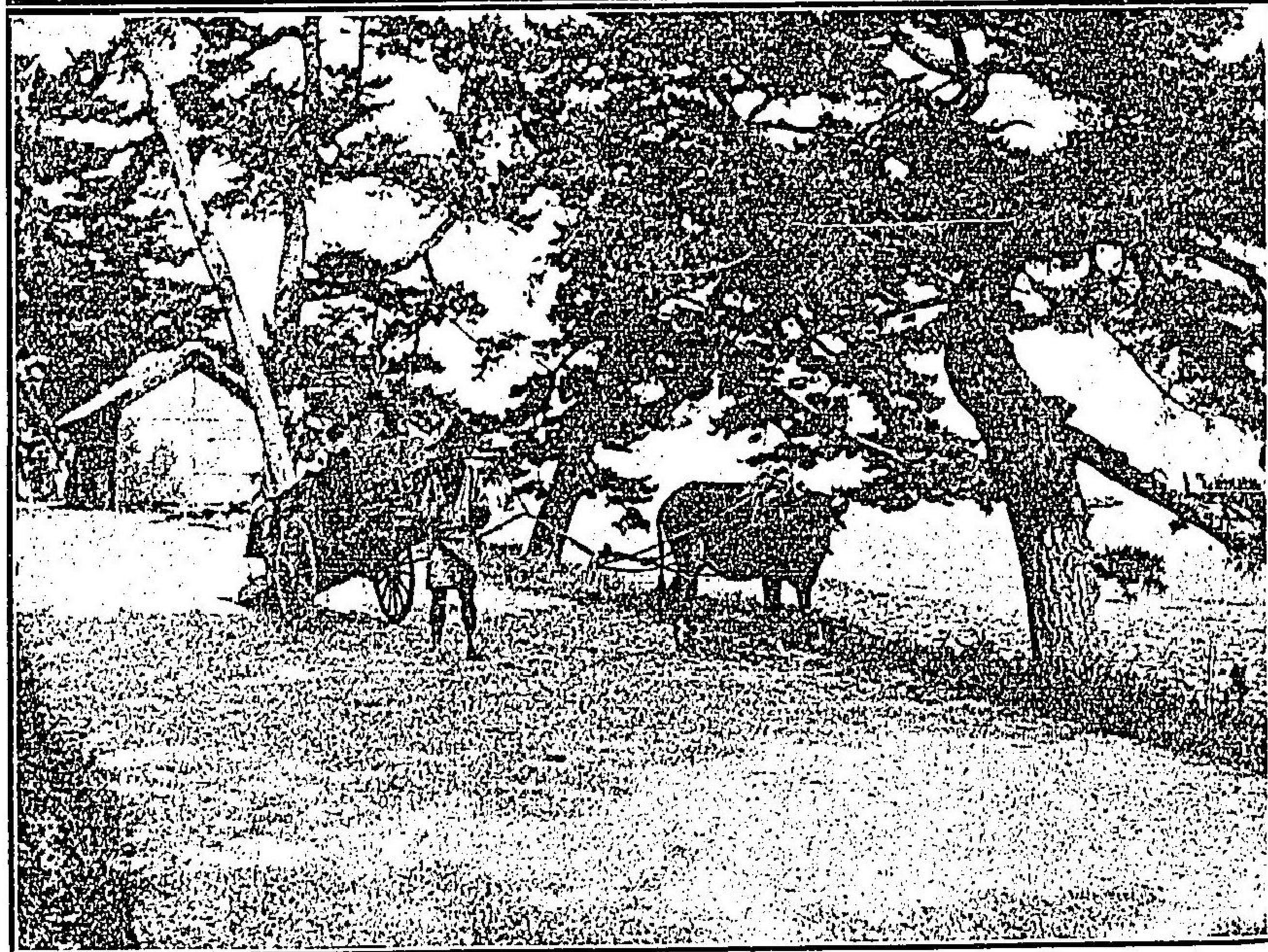
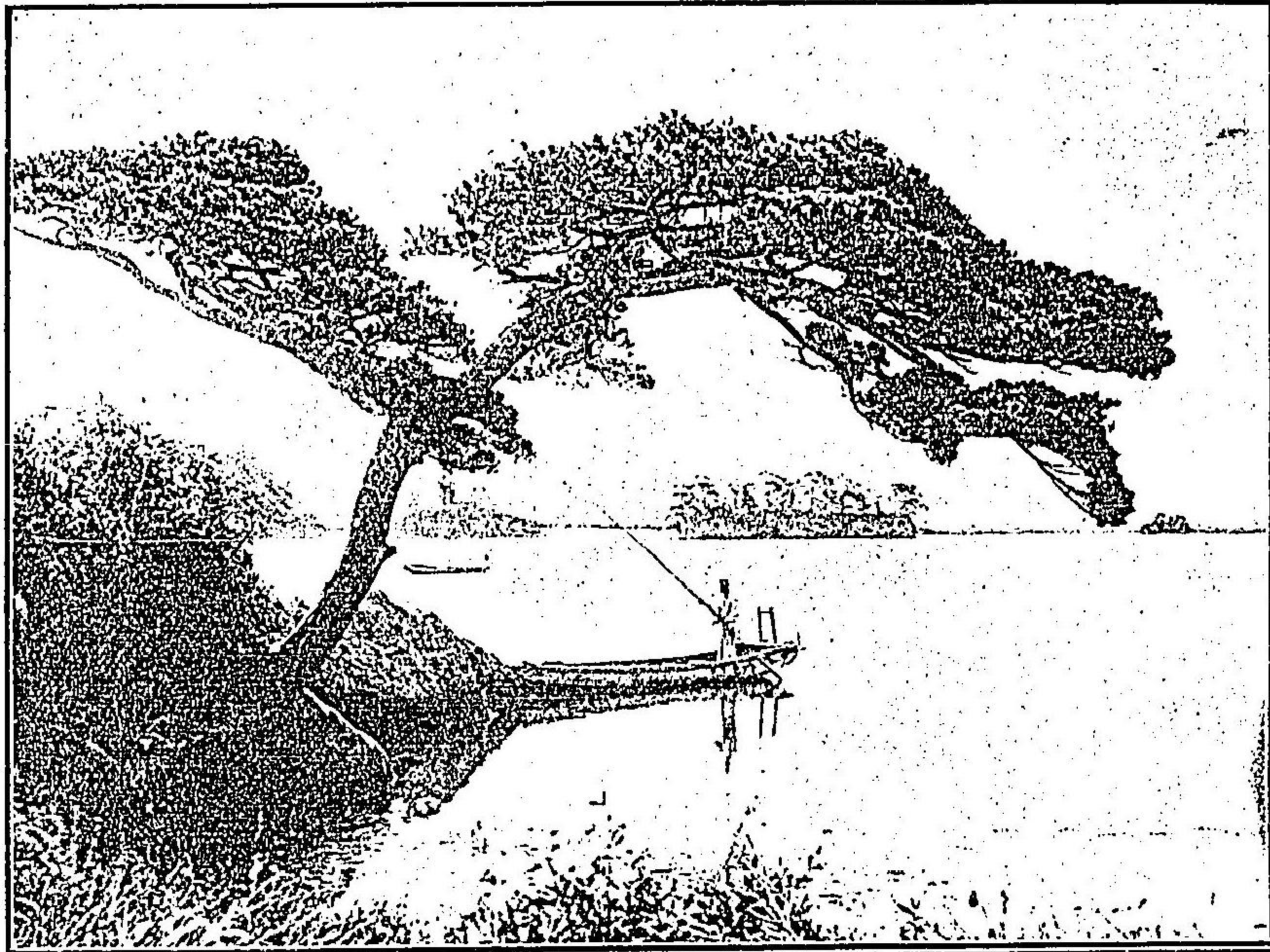
事工防砂流溪スメトヒリ州クルマルエイタス

函館鹿牛山



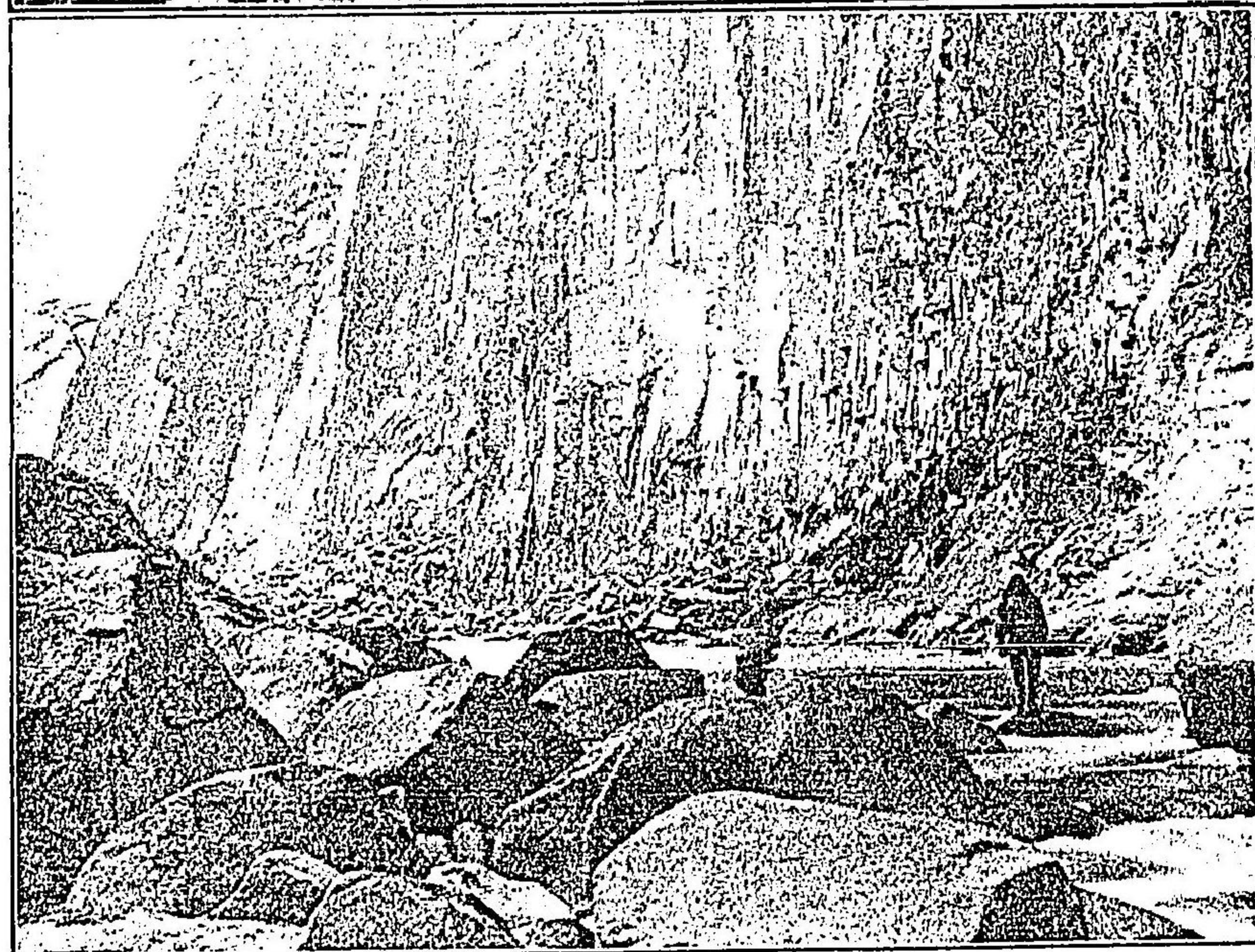
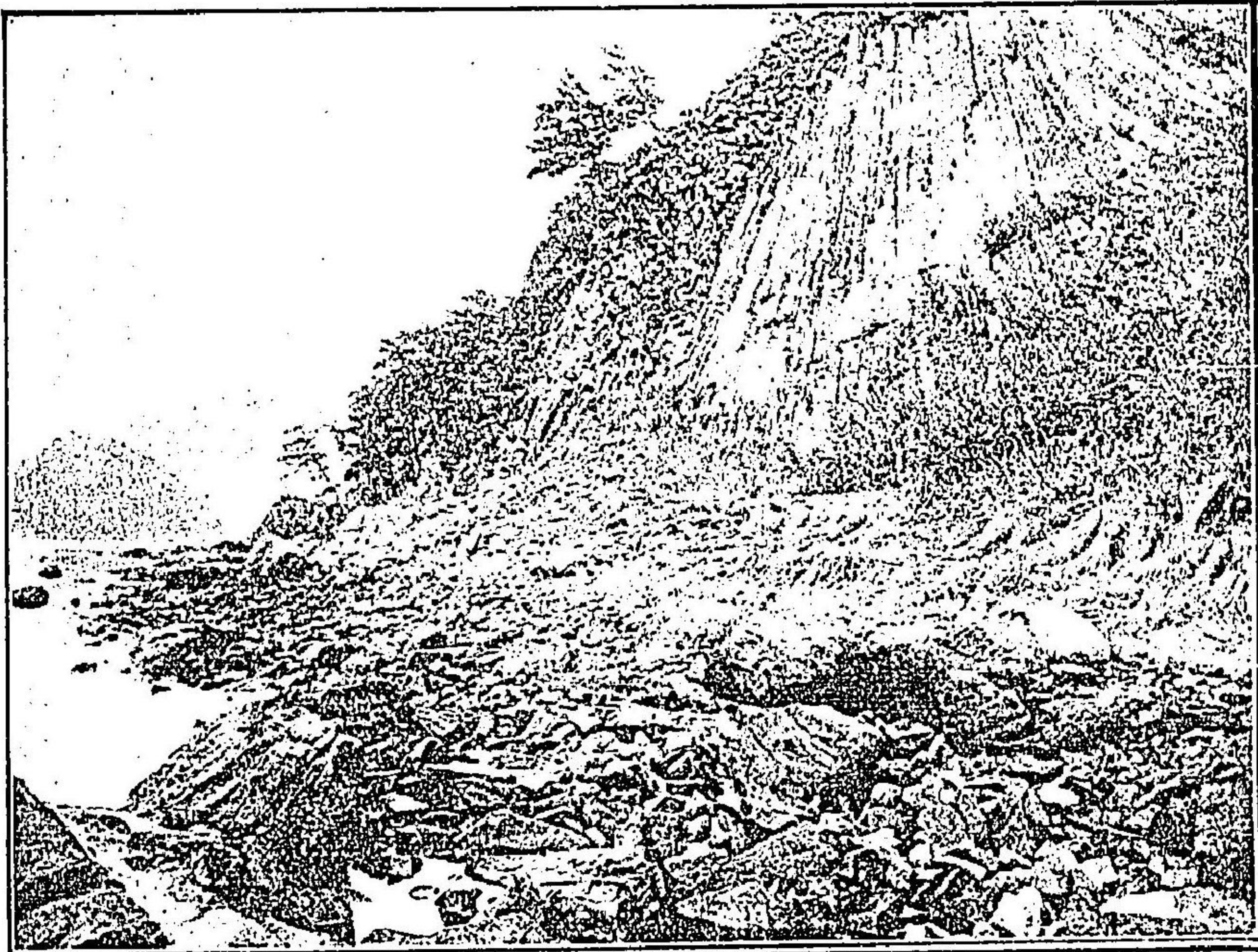
甲州河鹿澤村の森林

奥州松島の景



播州舞子の子の池

淡島層の岩



磐城波瀬の木材岩

自叙

我日本ハ天賦ノ森林國ニシテ、國民ハ營林ノ天職ヲ有ス、故ニ國民舉テ山林ノ思想ナカルベカラズ、然ルニ森林教育未ダ洽カラズ、一般ニ山林ノ何モノタルヲ知ル者、蓋シ希ナリトス、豈本邦ノ爲メ慨セザルヲ得ンヤ、故ニ山林觀念ノ普及ヲ謀ルハ、實ニ目下ノ急務ナリトス、況ンヤ森林法實施ノ今日ニ於テオヤ、故ニ予ハ各地ヨリノ需ニ應シ、山林講話ヲ爲ス毎ニ、常ニ先ツ日本ノ森林國タル所以、國民ノ營林ノ職ヲ有スル所以ヲ畧説シテ、以テ山林思想ヲ喚起スルヲ力

メタリ、然レモ世未ダ此等ニ關スル書ナク、人以テ遺憾トス、予不肖ヲ顧ミズ、各地ニ講演シタル草稿ヲ斟酌シ、以テ本著ヲ成シタルモノハ、聊世ニ山林ノ觀念ヲ起シ、森林法ノ實施ヲシテ易カラシメントスル微衷ニ過ギズ、敢テ有識ノ士ニ顧讀ヲ煩ハサントスルモノニ非ザルナリ、

明治三十一年七月

著 者 識

日本山林一斑目次

目	次
第一章 緒言	一頁
第二章 氣候ノ適順	四
空氣ノ溫度	四
空中ノ濕氣	九
雨量	一三
第三章 地勢ノ峻嶮	一七
第四章 樹種ノ豊富	二四
第五章 國民ノ天性	三二
第六章 木材ノ需用	三四
第七章 水源ノ涵養	四三
第八章 土砂ノ扞止	四九
第九章 洪水ノ防禦	五五

第十章 漁業ノ保護…………… 六〇

第十一章 風致ノ粧飾…………… 六二

第十二章 砂潮ノ防備…………… 六六

第十三章 其他森林ノ必要…………… 六九

 氣候調和…………… 六九

 衛生補助…………… 七四

 積雪防止…………… 七八

 廻船目標…………… 七八

第十四章 林業ノ利益…………… 七九

第十五章 結論…………… 八六

附錄 現行森林法規

森林法…………… 八九

森林法施行細則…………… 一〇一

保安林取扱心得…………… 一〇五

地方森林會規則…………… 一一二

官林箇所反別表…………… 一一六

官有山林原野箇所反別表…………… 一一九

民有山林原野箇所反別表…………… 一二一

御料林野箇所反別表…………… 一二四

日本山林一斑目次終

日本山林一斑

林學士 柴田榮吉著

第一章 緒言

第 一 章 緒 言

森林ハ社會ノ利源ニシテ國土ノ大本ナリ。試ミニ木材需用ノ途ヲ見ヨ、家屋ハ之ニ據テ建築セラレ、橋梁ハ之ヲ以テ架設セラル、或ハ船舶車輛ノ材料トナリ、器具器械ノ要素トナル、建テ、電線ノ杭柱トナリ、布キテ鐵道ノ枕木トナスベシ、割キテ燐寸トナシ、製シテ紙トナスベシ、樟腦モ之ヨリ採收スベク、松香油モ之ヨリ製出スベシ、若シ夫レ薪炭ナケレバ米ヲ炊ク能ハズ、温ヲ取ル能ハザルニ非ズヤ、其用千種萬類、素ヨリ筆紙ノ能ク盡ス所ニ非ズ、凡ソ業トシテ林産ニ據ラザルナク、家トシテ木材ヲ仰カザルナク、竈トシテ薪炭ヲ用ヒザルナシ、故ニ森林ノ保護其當ヲ得、經營其宜シキニ適シ、樹陰翳鬱トシテ晝尙暗ク、植伐序アリテ産材餘アルルハ、百業其用材ニ足リ、戸々其薪炭ニ飽クヲ得ベシ、加之營業ニハ土地廣シト雖モ資本勞力ヲ要スル

コト少ク、利用ニハ産額多ク販路汎キモ課税薄ク、是ニ由テ直接ニハ生産日ニ蕃殖シ、收利年ニ増加シ、間接ニハ税源ヲ富饒ニシ、以テ歳入ヲ豊ニス、豈永世無限ノ財源ニ非ズヤ、

且夫レ森林ハ大氣ノ寒暖ヲ調ヘテ穀菜爲ニ發育シ、氣候ヲ和シテ人民タメニ安住ス、林地ハ水源ヲ養フテ河水量足り、田圃ハ灌漑ノ利ヲ受ケ、舟筏ハ往來ノ便ヲ得、樹根ノ網張ハ土壤ノ崩壞ヲ遏メ、枝葉ハ繁茂シテ洪水ノ溢出ヲ防キ、樹幹ハ強長シテ暴風ノ強力ヲ減シ、或ハ風致ヲ粧飾シテ吾人ヲ喜バシメ、空氣ヲ清淨ニシテ衛生ヲ助ケ、其他飛砂ヲ防ギ、怒潮ヲ遮リ、或ハ墜石ヲ支ヘ、積雪ヲ扞グ等、國家ニ無量ノ福祉ヲ與ヘ、人民ニ無限ノ鴻益ヲ授クルト、他ニ其比ヲ見サルナリ、然レモ一旦經林其法ヲ誤リ、保護其制ヲ失ヒ、暴探濫伐止マラザルハ、林質ハ瘠變シテ收穫減少シ、良材滅盡シテ惡木疎立シ、禿山裸峯相連ルニ至レハ、生産收利ハ年ヲ逐フテ愈減シ、財源頓ニ涸レテ國庫不足ヲ告ゲ、工材缺乏シテ、製造起ラズ、原料不給シテ土木整ハズ、寒暑度ヲ超ヘ氣候順ナラズ、水源ハ乾涸シテ稻田ノ旱魃トナリ、又舟筏往來ノ梗塞トナル山岳ハ崩壞シテ流砂河底ヲ埋メ、爲ニ堤防ノ缺潰トナリ、洪水ノ汎濫トナル、

其他飛砂ヲ止メ難ク、怒潮ヲ遮ル能ハズ、風致ヲ裝飾スルト難ク、衛生ヲ助クルナシ、人畜逐ニ其生ヲ聊ンゼザルニ至ルベシ、嗚呼、經世ノ財源タル森林モ、一朝荒廢セバ無限ノ禍根トナルト、夫レ此ノ如シ、森林豈貴重ナラズヤ、故ニ洋ノ東西ヲ問ハス、時ノ古今ヲ論ゼズ、森林ヲ要セザル邦國ナク、木材ヲ用ヒザル人民無シ、然レトモ土地氣候ノ異同ハ樹木ノ生長ニ適不適ノ別ヲ來シ、人類ノ習慣、人口ノ多少、及ヒ木材代用品ノ有無等ハ、木材需要ノ度ニ多少ノ差ヲ生セシメサルベカラズ、從テ國ニ由リ森林ニ適スルアリ、否ヲサルアリ、比較的多少ノ森林地積ヲ要スルアリ、小面積ニテ尙可ナルアリ、然ラバ日本ノ風土ハ果シテ營林ニ適スルヤ否ヤ、廣キ森林地積ヲ要スルヤ否ヤ、是レ吾國林政上吾人ノ研究セサルベカラサル問題ニシテ、林政ノ方針又全ク茲ニ胚胎スト謂ツベシ、試ミニ予ヲシテ一言此問題ニ答ヘシメバ、予ハ云ハ

我國ハ天賦ノ森林國ニシテ、頗ル林業ニ好適シ、森林地積ヲ要スルノ大ナルト、殆ンド他ニ其比ヲ見サルナリ、

ト乞フ次ノ各章ニ於テ逐次其理由ヲ詳述スル所アラシメヨ、

第二章 氣候ノ適順

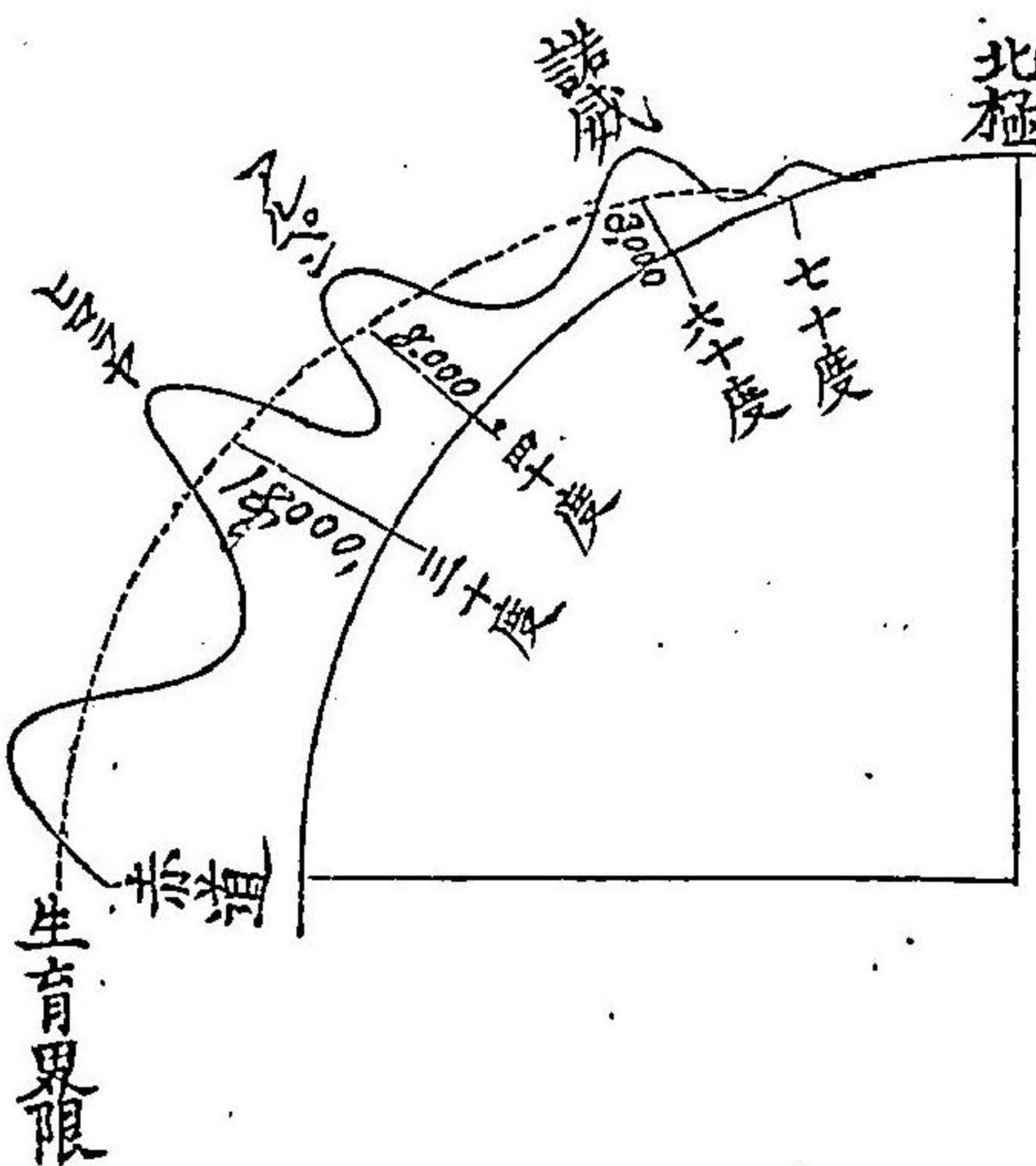
夫レ樹木ハ地中ニ蟠生シタル根ニヨリ其養料ヲ吸收シ、空中ニ繁茂シタル葉ニヨリ不用物質ヲ放泄ス、故ニ樹木ノ生長ニ至大ノ關係ヲ有スルモノ、是ヲ土地ノ性狀及ビ空中ノ氣候トス、就中土地ノ性狀ハ之ヲ改變スルニ敢テ難カラザルモ、氣候ハ能ク人力ノ左右シ得ベキモノニ非ズ、故ニ樹木ヲ養育セシムルニ欲セバ、先ツ氣候ノ如何ニ注目セサルベカラズ、殊ニ空氣ノ溫度、空中ノ濕氣、及ビ雨量ハ樹木生育上缺クベカラザル三要素ナレバ、乞フ先ツ各關係ヲ説明シ、次ニ本邦ニ於ケル氣候ノ適否ヲ研究セン、

空氣ノ溫度 空氣ノ温ハ植物ノ同化作用ヲ營ムニ當リ、主ニ諸物質ヲ溶解スル作用アルモノナレバ、樹木生育上實ニ缺クベカラザル一要素トス、然ラバ我森林樹木ハ如何ナル高温ノ處ニ於テモ生長シ得ルヤ、然リ空氣中ニ含有スル濕氣充分ナレハ、幾何高温ノ地ト雖、凡樹木自然ニ繁生セサルハナシ、彼ノ巴西、錫蘭、爪哇等ノ熱帶地方ニ森林ノ繁茂セルハ、蓋シ之ガ爲ノミ、故ニ森林成立上溫度ニ最高限ナシト云

日本山林一斑

第二章 氣候ノ適順

フベシ、之ニ反シ植物生育上溫度ニ最低限アルモノニシテ、此限界以低ニアリテハ、已ニ同化作用ヲ營ムコト能ハサルニヨリ生育スルコト難シ、尤モ植物ノ種類異ナルニ從ヒ、其限界一様ナラズ、彼ノ水藻ノ如キ下等植物ニアリテハ、水ノ融解點ニ等シキ溫度以下ニ至ルモ、尙能ク同化作用ヲ營ムト雖モ、樺ノ如キ高等植物ニアリテハ、溫度低減シテ攝氏ノ七度半ニ至レバ、已ニ同化作用ヲ停ムルガ如シ、凡ソ我森林樹木ノ生育界限ハ、實ニ一年平均溫度攝氏零度ノ地ニアルモノハ、如シ、故ニ北緯七十七度以上極北ノ地ニアリテハ、勿論熱帶地方ト雖モ、高山ニ至レバ此界限ヲ越ユルニヨリ、樹木ノ生存ヲ見ザルモノトス、今線ヲ以テ地球上ニ於ケル此界限ヲ示スルハ、上圖ノ如ク其位置北極ニ至ルニ從ヒ益々下降スルモノニシテ、熱帶ノ山岳ニ於テハ一萬八千呎ノ高ニアルモ、北緯三十度ニ聳ユル比馬刺亞山ニ於テハ一萬六千呎トナリ、四



斑 一 林 山 本 日

佐賀	熊本	京都	大阪	岡山	味野	多度津	松山	吳島	廣島	山口	大分	和歌山	徳島	高知
二三五	二三八	二二三	二三〇	二三〇	二三六	二三一	二二六	二三六	二二七	二二〇	二二四	二三一	二二九	二二八
一五五	一五八	一三七	一四八	一四五	一五三	一五四	一四九	一五五	一四六	一四〇	一五三	一五二	一五二	一五六
銚子	宇都宮	東京	横須賀	沼津	甲府	濱松	岐阜	名古屋	津	彦根	堺	濱田	赤間關	嚴原
二二六	二〇七	二二八	二二五	二二〇	二二六	二二三	二二七	二三一	二二四	二二七	二一九	二二五	二二二	二二三
一五二	一三三	一三八	一四四	一五〇	一三一	一五〇	一四三	一四六	一四五	一三五	一四一	一四三	一五〇	一四八
小笠原	十勝	釧路	根室	宗谷	上川	札幌	函館	青森	宮古	石巻	福島	秋田	山形	新潟
二六六	一五六	一四二	一二四	一三一	一六一	一六五	一六二	一七八	一七五	一九三	二〇四	一九二	二〇一	二〇九
二三一	五三	五一	五九	五六	五一	七〇	八四	九一	九九	一一二	一一八	一〇三	一〇七	一二六

我日本空氣溫度ノ樹木ノ生長ニ好適セルコト實ニ此ハ如シ樹木ノ能ク生育シ森林ノ能ク豐茂スルヤ素ヨリ其所ナリ況ンヤ南ハ極熱ノ地ヨリ起リ北ハ極寒ノ域

順 適 ノ 候 氣 章 二 第

ニ達スルヲ以テ世界ニ生存スル無數ノ樹木ハ盡ク聚テ我一帝國ニ生育セルオヤ實ニ帝國ハ獨特無比ノ森林國ナリトス、
 空中ノ濕氣 樹木ノ生長ハ温氣ノミニ因ルニ非ズシテ空中ノ濕氣亦是ト同様ノ必要アルモノトス夫レ樹木ノ生育スルヤ根ヨリ地中ノ水分ヲ吸收シ葉ヨリ之ヲ氣中ニ蒸散スルモノナレバ其吸收ノ水分ト蒸散ノ水分トハ常ニ權衡ヲ保タサルベカラズ故ニ若シ空中ノ濕氣缺乏ナルハ蒸散ノ量大ニ増加シ吸收ノ量之ニ適シ難ク生葉凋衰シ樹木遂ニ枯死スルニ至ルト雖モ濕氣豐富ナルハ葉ヨリ蒸散スル水量些少ナルニヨリ根ヨリ吸收スル水分亦僅少ニシテ足レリトス尤モ樹種ノ異ナルニ從ヒ濕氣ヲ要スル量ニ多少アリトハ云ヘ一般ニ樹木ノ生長ニ對シ濕氣ノ饒多ニ過キルヲ殆ンド無シ尙一步ヲ進メテ之ヲ云ヘハ空中ノ濕氣多キニ從ヒ植物ノ生長愈盛ニ濕氣少キニ從ヒ生育益々衰フトクトルマイル氏ノ研究ニヨレバ植物生長時期(即五六七八ノ四ヶ月)ニ於ケル濕氣ノ量百分ノ五十(飽和點ニ於ルモノ)ニシテ普通之ヲ對スル割合ト云フタ)以下ナルハダトヒ地味良好ナルモ樹木生立スル能ハズシテ只雜草ノ原野ヲナスノミ濕氣尙一層減少スレバ片草ダモ

日本山林一斑

見ル能ハサル沙漠ヲ現ハスニ至ル。尤モ此ノ如キ現象ハ、本邦ノ如キ島國ニ於テハ絶テナキ所ナレバ、大陸地方ニ於テハ往々見ル所ノ現象ナリトス、蓋シ海風ハ海上ニ昇騰シタル濕氣ヲ含包シ來リ、陸地ニ入ルニ從ヒ漸次上騰シ、温度及ビ濕氣ヲ失フモノナレバ、彼ノ大陸地方ニ於テ海岸ヨリ遠キ内地ニ至レバ、濕氣甚シク缺乏シ、遂ニ前記ノ如キ現象ヲ示スニ至ル、一例ヲ舉レバ、北米ノ如キハ、其中央部西經九五度ノ邊ニ至レバ、兩洋ヨリ侵入スル濕氣、全ク其痕ヲ絶ツヲ以テ、又森林ヲ生立スル能ハズ、一望漫々タル草野ヲ生スルヲ見ル、又印度ノ如キハ、ベンガル灣ヨリ濕氣ヲ收納シ來リタル風ハ、ヒマラヤ山ニ衝突シ、進ンデ山脊ニ至ル間、高天寒氣ノ爲メニ冷却セラレ、濕氣ハ凝テ雨トナリ、又雪トナリテ下降シ盡シ、遂ニ其缺乏ヲ訴フルニヨリ、越ヘテ其北面ニ至レバ、一木一草ナク、延ヒテ西藏ノ高原トナリ、進ンデ戈壁ノ沙漠トナリ、一天渺茫植物ノ片影ヲ止メザルニ至ル、凡ソ森林ノ成立、上空濕氣ノ必要ナル夫レ此ノ如シ、然ラバ我日本ニ於ケル濕氣ハ富乎將タ貧乎、我日本ハ濕氣ノ淵源タル大洋中ニ、而モ細長ク、蜿蜒セル島國ナルヲ以テ、濕氣ハ多量ナル知ルベシ、況ンヤ温暖ナル潮流ノ蒸發ヲ促スオヤ、東南風ハ常ニ多濕ナル印

第二章 氣候ノ適順

度、洋ヨリ濕氣ヲ輸シテ來リ、西北風ハ多ク、日本海ノ水蒸氣ヲ拉シテ至リ、以テ内地ハ空氣ヲ濕潤ナラシム、タトヒ高山峻嶺ニ衝突シ、一部凝結シテ雨雪トナリ、下降スルモ、輸送頻々トシテ常ニ堪ヘサルニヨリ、濕氣ハ滿地何レノ處ニモ洽ク浸入シ、且瀰漫シ、毫モ其缺乏ヲ訴フル處ナシ、故ニ本邦ニ於ケル濕氣ハ、豐富ナル歐米諸洲殆ンド其比ヲ見サルナリ、試ミニ各測候所ニ於ケル最近十ヶ年ノ觀測ニ基キ、夏時平均濕度及ヒ全年平均濕度ヲ算出セバ、次ノ如シ、

地名	均夏時度平	均全年度平	地名	均夏時度平	均全年度平	地名	均夏時度平	均全年度平
那覇	八三	七七	長崎	八一	七六	金澤	七九	七九
鹿兒島	七九	七六	佐世保	七九	七四	伏木	八四	八五
宮崎	八二	七九	福岡	八一	七八	長野	七四	八一
高知	八二	七五	嚴原	八一	七七	新潟	七九	八〇
徳島	七八	七三	赤間關	八二	七六	山形	七七	八五
和歌山	七五	七二	濱田	七九	七五	秋田	七三	八〇
大分	八三	七九	境	七八	七六	福島	七七	七四
山口	七八	七七	彦根	七八	七八	石卷	八四	七七

斑 一 林 山 本 日

佐賀	熊本	京都	大阪	岡山	味野	多度津	松山	吳	廣島
七九	七六	七五	七五	七五	七六	七九	七四	七八	七六
七六	七八	七七	七五	七三	七一	七四	七七	七〇	七六
銚子	宇都宮	東京	横須賀	沼津	甲府	濱松	岐阜	名古屋	津
八五	八一	八一	八二	七九	七六	七九	七七	七六	八二
六八	七〇	六六	六一	七四	七四	七六	七五	七七	七七
十勝	釧路	根室	宗谷	上川	札幌	函館	青森	宮古	
八一	八三	八八	八七	七七	七九	八四	七九	八三	
六九	八二	七二	八四	九〇	七九	八〇	八〇	七〇	

前表ノ示ス所ニ由テ之ヲ見レバ、本邦ニ於ケル夏期ノ湿度ハ各地概シテ實ニ百分ノ八十二至レルヲ知ル、豈亦多量ナラズヤ、歐米諸國ヲ以テ之ニ比較センカ、西米及ビ歐洲ノ海岸ノミ稍相近似セルモ、未ダ本邦ノ如ク多濕ナル能ハズ、其他東米及ビ歐洲ノ内地ニ至テハ百分ノ七十以下ニ下ルモノ、如シ、故ニ我國ハ植物ノ生長尤迅速ニシテ且最高ノ樹木ヲ生スル、世界中殆ンド見サル所是レ吾森林ノ世界ニ冠絶スル所以ナル乎、

順 適 ノ 候 氣 章 二 第

雨量 前述シタルニ要素ノ外、尙樹木ノ生長ニ缺クベカラザル一要素アリ、何ゾヤ雨量是ナリ、凡ソ樹木ノ生活スルヤ、其根端ヨリ溶解シタル地中ノ養料ヲ吸收シ、幹ヲ經テ枝ニ傳ヘ、葉ニ輸リテ不要物質ヲ放泄シ、以テ植物質ヲ化成ス、故ニ雨量ナキハ土地濕潤ナル能ハズ、土地濕潤ナル能ハザルハ、タトヒ地中ニ養料アルモ、豈能ク之ヲ溶解センヤ、養料溶解セザルハ、樹根豈能ク之ヲ吸收スルヲ得ンヤ、況ンヤ亦之ヲ葉ニ送リテ植物質ヲ化成スルオヤ、植物遂ニ其生ヲ全フセサルニ至ルベシ、是レ樹木ノ生育ニ雨量ノ必要ナル所以ニシテ、雨量多キニ從ヒ樹木愈ニ生長シ易キモノナリトス、故ニ濕氣タトヒ充分ナルモ、雨量不足ナルハ樹木生育スル能ハズ、彼ノ南カリフォルニア海岸ノ如キ、湿度百分ノ七十二ナ有スルモ森林ノ生立セサルハ、雨量僅ニ十二ミリメートルニ過キザレバナリ、夙ニ歐人ノ研究シタル所ニ因レバ、植物生長時期間五六七八ノ四ヶ月ニ五十五ミリメートル即チ一寸六分五厘余ノ雨量ナクンバ、樹木生育スル能ハサルナリト云フ、幸ナルカナ、我日本ハ四面海ヲ環ラシ、爲ニ濕氣ノ豐富ナルト、温暖ナル潮流南ヨリ來ルト、及ビ内地ハ高崇タル山岳ハ聳立セルトニ基キ、雨量亦實ニ多シ、則チ夏時ニ

斑 一 林 山 本 日

十四
 ア、ツ、テ、ハ、印、度、洋、上、ヨ、リ、氣、候、風、ノ、北、進、ス、ル、ヤ、太、平、洋、海、岸、ニ、向、テ、吹、ク、所、ノ、西、南、風、ト、
 ナ、リ、此、風、本、來、温、暖、ナ、ル、ガ、故、ニ、太、平、洋、上、多、量、ノ、水、蒸、氣、ヲ、拉、シ、テ、來、リ、中、央、山、系、ニ、衝、
 突、シ、テ、凝、結、シ、爲、メ、ニ、濕、潤、多、雨、ナ、リ、ト、ス、又、冬、季、ニ、ア、リ、テ、ハ、會、太、平、洋、上、ノ、温、暖、海、流、
 所、在、ノ、蒸、發、ヲ、促、シ、空、氣、正、ニ、稀、薄、ト、ナ、ル、ヤ、亞、細、亞、大、陸、ナ、ル、重、厚、ノ、空、氣、ハ、之、ニ、乘、シ、
 テ、衝、キ、至、リ、日、本、海、岸、ニ、向、テ、吹、ク、所、ノ、西、北、風、ト、ナ、リ、此、風、元、來、甚、タ、乾、燥、セ、ル、モ、日、本、
 海、上、ヲ、經、過、ス、ル、間、其、發、上、シ、タル、水、蒸、氣、ヲ、收、メ、來、リ、中、帶、山、脈、ニ、撞、撃、シ、テ、氷、雪、又、糢、
 糊、タ、ラ、シ、ム、本、邦、雨、量、ノ、豐、潤、ナ、ル、固、ヨ、リ、然、リ、試、ミ、ニ、各、測、候、所、ニ、於、テ、觀、測、シ、タル、最、
 近、十、ヶ、年、間、ノ、夏、時、ノ、雨、量、及、ヒ、全、年、ノ、雨、量、ヲ、見、ヨ、

地名	夏時雨量	全年雨量	地名	夏時雨量	全年雨量	地名	夏時雨量	全年雨量
那覇	一、〇二	二、一九三	長崎	九八九	一九六四	金澤	六四三	二、四七九
鹿兒島	九六七	一、九四四	佐世保	五八五	一、三二八	伏木	五六五	二、〇七八
宮崎	一、〇六九	二、五四〇	福岡	六五一	一、四三三	長野	四二六	九〇六
高知	一、二一五	二、六七六	嚴原	一、〇六四	二、二四一	新潟	四五四	一、六九七
徳島	八一九	一、七四六	赤間關	七六七	一、五六八	山形	四七八	一、一七三
和歌山	五四〇	一、三六一	濱田	五五八	一、四六二	秋田	五六六	一、六八四

順 適 ノ 候 氣 章 二 第

大分	六八七	一、五八五	境	五七五	一九〇三	福島	五二〇	一、一八六
山口	八六五	一、八七八	彦根	五九一	一、四六一	石卷	四七七	一、〇八五
廣島	六九五	一、八四一	津	七四〇	一、六五五	宮古	五一〇	一、三三三
吳	五三五	一、二六九	名古屋	八八八	一、五六一	青森	三九〇	一、二五一
松山	四四六	一、一五八	岐阜	八八六	一、九二〇	函館	四二二	一、一〇四
多度津	四〇四	九六四	濱松	七三九	一、七六七	札幌	二七九	九六八
味野	四二八	八九四	甲府	四六九	一、〇六八	上川	三五二	一、〇八五
岡山	四九三	九八八	沼津	七三八	一、七七八	宗谷	二七八	八六九
大坂	五二八	一、二八四	横須賀	五七三	一、四六一	根室	四〇七	九八七
京都	六九二	一、五一六	東京	五六六	一、四六八	釧路	四五五	一、〇二四
熊本	六九三	一、四七八	宇都宮	八三八	一、五七二	十勝	三八四	九二四
佐賀	七三一	一、四六一	銚子	五一五	一、五六二			

前表ノ示ス處ニ由テ之ヲ見レバ、全國ヲ通シテ、夏時ノ雨量ノミ、ニテモ、五、六、百、ミ、リ、
 メ、一、テ、ル、以、上、ノ、地、多、ク、全、年、ノ、雨、量、ニ、至、テ、ハ、八、九、百、ミ、リ、メ、一、テ、ル、以、下、ノ、地、ナ、ク、概、
 シ、テ、一、千、乃、至、二、千、ミ、リ、メ、一、テ、ル、ノ、處、多、シ、高、知、及、ヒ、宮、崎、ノ、如、キ、ハ、二、千、五、百、ミ、リ、メ、
 一、テ、ル、ヲ、超、過、セ、リ、豈、又、多、雨、ナ、ラ、ズ、ヤ、今、之、ヲ、他、邦、ト、比、較、セ、ヨ、歐、洲、ノ、如、キ、ハ、全、年、ノ、

雨量ダモ尙本邦ニ於ケル夏間ノ雨量ニ及バサル所アリ、乞フ左表ヲ一覽セヨ、

斑 一 林 山 本 日

地名	全年雨量	地名	全年雨量	地名	全年雨量
米國 ワシントン	一三〇一	白耳義 プラツセル	九二二	支那 北 京	六五二
米國 ニュヨーク	一三四七	瓊馬 ベイコッペン	四六四	支那 上 海	一二五二
米國 シカゴ	八八三	魯國 モスコイ	六〇四	支那 香 港	二、一四八
米國 サンフランシスコ	六三六	魯國 セントピエタ	五一八	支那 廣 東	一七九五
米國 チャッタワ	七八六	魯國 ナデツサ	五三六	暹羅 バンコック	一五五六
英國 ダブリン	六八四	以太利 ローマ	八二五	暹羅 サイゴン	一、四八四
獨逸國 ベルリン	五七五	獨逸國 ビンナ	六四三	緬甸 ラングーン	二、五二二
獨逸國 ハムブルグ	七六四	西比利亞 コロニス	三三一	印度 カルカッタ	一、五七二
葡萄牙 リスボン	八二五	西比利亞 ストラジラ	三四九	印度 ボンベイ	二、〇八九
西班牙 マドリッド	四〇七	朝鮮 元 山 津	七八九	濠州 マニラ	二、一三三
佛國 パリ	五六五	朝鮮 京 城	九一五		

本邦ニ於ケル雨量ノ豐潤ナル、歐米諸國ノ遠ク及バサル、夫レ此ノ如シ、植物ノ生長迅速ニシテ、暢茂シ易キ、豈怪ムニ足ランヤ、
 本邦ノ氣候タルヤ、温和ニシテ、濕氣ニ富ミ、且雨量ニ富ミ、樹木ノ生育ニ適スル、前述

嶮 峻 ノ 勢 地 章 三 第

ノ如クソレ切ナルヲ見レバ、全土悉ク鬱々タル樹林ヲ以テ覆ハルベキ道理ナルニ拘ハラズ、處々秃兀タル嶮山、茫々タル草野ヲ見ルハ何ゾヤ、蓋シ其罪決シテ氣候ノ所爲ニ非ズシテ、地質ノ不利ト人爲ノ結果トニ由ラズンハ非サルナリ、試ミニ見ヨ、我邦天然ノ草原ハ多ク、新火山ノ麓ニアリ、元ト新火山土ハ疎鬆ニシテ、水氣ヲ保ツノ力至テ弱シ、故ニ無雨ノ候ニ當リ烈シク乾燥シテ、樹木ヲ渴殺スルニ由リ、遂ニ草原ヲ現ハスニ至ル、然レ此ノ如キ不利ノ地質モ、天然の化學ノ作用ニ由リ、或ハ人工ヲ施シテ大ニ其性質ヲ改變スル、難カラズ、故ニ氣候上ノ原因ニシテ、樹木ヲ生スルニ適當ナレバ、若干年後ハ森林ヲナス難カラズ、且此等ノ原野ハ未ダ以テ多シトスルニ足ラズト雖モ、數百年來人爲ノ結果ニヨリ、或ハ野火ノ爲メニ燒棄セラレ、或ハ斧斤ニ依テ濫伐セラレ、好ンデ草原ヲ作り、誤テ嶮山ヲ爲スモノ比々皆然リ、是ニ由テ之ヲ見レバ、我國森林ノ荒廢シタルハ、天ノ罪ニ非ズシテ、人ノ自ラ招キシ禍ニ外ナラス、

第三章 地勢ノ峻嶮

日本山林一斑

夫レ禾穀ハ平坦膏腴ナル地ニ非ザレバ之ヲ耕作スル難シ稀ニ傾斜急峻ナル山地ニ稗麥等ヲ播種スルアルモ其收穫實ニ勞力ヲ償フニ足ラズ然ルニ樹木ハ地勢ノ峻易ヲ問ハズ地味ノ肥瘠ヲ論ゼズ生育セサルナシ故ニ林業ハ農業ト異ナリ山岳平地ヲ問ハズ經營シ得ベキ事業ナリトス然レモ地面平坦ナル場所及ビ地味肥沃ノ土壤ハ農業其他ニ利用スルノ途アルノミナラズ之ヲ林業ニ用フルモ其利益比較的大ナラズ林業ハ地力微弱傾斜急峻ニシテ他ニ利用スルヲ得サル地及ビ利用スルモ利益少キ地ニ於テモ尙能ク之ヲ施スヲ得ベク殊ニ傾斜適當ナル山岳木ノ生長却テ平地ニ優ルハ學理及ビ實際ノ證明スル所加之産材ヲ運搬スルニモ又手修羅糧等ヲ用フルニ便ニシテ賃租等ノ費用モ亦僅少ナルニヨリ此ノ如キ地ニ於テ却テ利アリトスタトヒ其利ナシトスルモ急斜ノ地ニ農耕ヲ施スガ如キハ國土保安上許スベキニ非ス聞ク獨逸ニアリテハ農耕地ハ傾斜十五度迄草場ハ十八度マデ牧場ハ三十度迄森林ハ三十五度乃至四十度或ハ四十五度迄ニ定メラレタリト高山峻嶺ノ多キ本邦ニ於テハ直ニ此例ニ據ルヲ得ズト雖モ耕作地ハ二十度以下ニ制限スルノ必要アルベシト信ス何トナレハ已ニ二十度ニ傾ケバ土砂ノ

第三章 地勢ノ峻峻

流下スルハ到底免ルベカラズシテ國土保安上不問ニ付スベカラザレバナリ然ルニ往々三十度以上ノ山地ニ燒畑ヲ作り數年收穫シテ復タ用フベカラザルニ至レバ之ヲ放擲シテ顧ミズ其極ヤ土砂ノ流下トナリ崩壞ノ原因トナルモ恬トシテ顧ミサルモノ、如シ森林法ノ施行豈忽諸ニスベケンヤ、之ヲ約言スレバ傾斜ノ山地ハ樹木ヲ養生スルニ尤適當ニシテ實ニ林業ノ郷土ト謂ツベク又天然の林地ト稱スベシ我國ノ地勢タルヤ内地ハ一面ニ山脈ヲ以テ組織セラレ其中帶山脈一ハ源ヲ支那ニ發シ西ヨリ東ニ走り一ハ樺太ヨリ起リ北東ヨリ南西ニ延ビ兩山系ハ本州ノ中央ニ於テ相會合シ以テ本邦ノ大脊髓ヲ形成セリ無數ノ支系山脈ハ之ヨリ分派シテ縱横ニ走ル、恰モ脈管ノ身體ニ於ケルガ如シ大小ノ河川此間ヨリ出テ海ニ注グ其下流ノ地稍平潤ノ野ヲ現出スルノミニシテ其他ハ悉ク山岳ナリトス故ニ平地ハ僅々全地面積ノ殆ンド九分ノ一ニ過キズ本邦ハ實ニ山岳國ナリト云フベシ且其地幅甚狹キニ拘ハラズ峰岳著シク高キニヨリ山トシテ峻ナラザルナク岳トシテ峻ナラザルナシ夫レ本邦ハ山岳多クシテ而モ傾斜急峻ナル此ノ如シ所謂天然の林地面積ノ廣大ナル地球上殆ンド他ニ

國名	森林面積	森林面積ノ全地面積 一〇〇ニ對スル割合
奧地利	九、七七七、四一四	三二、六
匈牙利	九、一八三、五九一	二八、八
瑞士	七、八一、九八四	一九、三
佛蘭西	八、三九七、一三一	一五、九
伊太利	五、七六〇、七二〇	二二、〇
西班牙	八、六三七、七一五	一六、九
希臘	四、七一〇、三〇	五、一
希臘	八、二〇〇、〇〇	一五、八
土耳其	八、三〇〇、九二三	二二、二
ルメニヤ	一、九七六、〇〇〇	二二、二
セルビヤ	二、〇九〇、五九二	四八、〇
英吉利	一、二六一、八七二	四、一
白耳義	二、〇二九、九七	六、九
和蘭	二、二四、三八四	七、〇
噠馬	一、八五、七四四	三、四
瑞典	一、七、三五八、一七二	三四、一
那威	七、七六二、一〇〇	三一、五
歐洲各領	一九三、一九五、五一五	三八、三
ヒンランド	二〇、七三二、八八〇	五六、〇

其比ヲ見サルナリ、試ミニ最近統計(農商務省山林局發行三)ノ報スル所ニ由リ全國山林ノ面積ヲ見ヨ實ニ左ノ如シ

官林(大區署ノ管理)	七、三八一、三三三(廿九年三月)
官有山林(地方廳ノ管理ニ)	六、〇五七、一〇〇(廿九年三月)
御料林(御料局ノ管理ニ)	二、〇九三、〇〇六(廿八年十二月)
民林	七、三一五、三六八(廿八年十二月)

總計

二二、八四六、八〇六

我國山林ノ地積ハ總テ二、千、二、百、八、十、四、萬、餘、町、アルヲ知ル、今此山林地積ヲ全國面積ニ萬四千七百九十四方里即チ凡ソ三千八百五十五萬餘町ニ比スレバ實ニ百分八、五、十、九、強、ニ、當、レ、ル、ヲ、見、ル、其、割、合、ハ、大、ナル、歐、米、諸、國、未、ダ、其、比、ヲ、見、サ、ル、ナ、リ、乞、フ、左、表、ヲ、一、瞥、セ、ヨ、

國名	森林面積	森林面積ノ全地面積 一〇〇ニ對スル割合
日本	二二、八四六、八〇六	五九、三
獨逸	一三、九〇〇、六一二	二五、八

(但面積ノ單位ハ日本ハ町ヲ以テ之ヲ示シ其他ハ「ヘクタール」ニシテ之ヲ示ス「ヘクタール」ハ我一町廿五歩ニ當ル)

(前記シタル二千二百八十四萬町ノ面積ハ目下山林ノ地目ヲ付セラレタルモノ、合算ニ過キサレバ)

我國山林面積ノ濶大ナルヲ夫レ此ノ如シ、尤モ此林積中ニハ周圍平野ニ接シタル平林、若クハ淺山丘阜ノ拓ヒテ耕牧地トナシ得ベキ地、即チ天然の林地ニ非サル箇所亦少カラズト雖モ、此等ハ各箇ノ面積狭小ナルニヨリ、之ヲ總計スルモ恐ラクハ全林積ノ廿分ノ一ニモ充タサルベシ、其他ハ悉ク天然の林地ニシテ林業ヲ除キ他ニ利用シ得ベカラザル土地ナリトス且目下原野ト稱セラル、地積

官有原野

五、七四一、二八二、〇〇〇

民有原野

一、〇七四、二七五、〇〇〇

御料原野

一六八、五六六、〇〇〇

合計

六、九八四、一三三、〇〇〇

中ニモ亦天然の林地實ニ少カラズ、森林地何ゾ夫レ廣キヤ、此廣大無邊ナル天然の林地ハ實ニ帝國永世無限ノ財源ニシテ、悉ク之ヲ保護シ之ヲ利用スルニ至ラバ生

第三章 地勢ノ峻險

産、收、利、ノ、増、加、ス、ル、リ、レ、幾、何、ナル、ヤ、得、テ、計、ル、ベ、カ、ラ、ズ、歳、入、ハ、富、豊、シ、タ、メ、ニ、國、庫、ノ、充、實、ス、ル、期、シ、テ、待、ツ、ベ、キ、ナ、リ、我、日、本、林、業、ヲ、以、テ、十、分、國、ヲ、立、ツ、ル、ニ、足、ル、之、ニ、由、テ、之、ヲ、觀、レ、バ、地、勢、ノ、一、點、ヨ、リ、觀、察、ス、ル、モ、我、日、本、ハ、之、ヲ、先、天、的、ノ、森、林、國、ト、稱、ス、ル、モ、敢、テ、誣、言、ニ、非、サ、ル、ナ、リ、
願、ミ、テ、我、國、山、岳、ノ、現、況、ヲ、通、觀、ス、ル、ニ、出、材、極、メ、テ、不、便、ナル、深、山、ノ、天、然、林、ト、收、利、農、地、ト、殆、ン、ド、相、等、シ、キ、作、業、集、約、ナル、人、造、林、ヲ、除、ク、ノ、外、至、ル、所、禿、兀、タル、骨、山、ニ、非、ザ、レ、バ、茫、々、タル、原、野、ニ、シ、テ、空、ク、遊、放、セ、ラ、レ、徒、ニ、騷、客、ノ、詩、料、タ、ル、ニ、過、キ、ザ、ル、ナ、リ、苟、ク、モ、氣、候、地、狀、ノ、造、林、ニ、不、適、當、ナル、ア、ラ、バ、已、ム、ヲ、得、ズ、ト、雖、モ、森、林、ニ、好、適、セ、ル、ト、他、ニ、比、類、ナ、キ、此、邦、ニ、於、テ、徒、ニ、廣、積、ノ、地、ヲ、遊、放、セ、シ、ム、ル、ガ、如、キ、ハ、國、家、ノ、一、大、不、經、濟、ナル、ヤ、喋、々、ヲ、要、セ、サル、ナ、リ、況、ン、ヤ、習、慣、上、木、材、ヲ、需、用、ス、ル、ト、夥、シ、ク、而、モ、文、明、ノ、發、達、ニ、伴、ヒ、愈、々、増、進、ス、ル、ニ、於、テ、オ、ヤ、又、況、ン、ヤ、林、地、ノ、荒、廢、ハ、延、ヒ、テ、水、理、ノ、不、調、ヲ、來、シ、流、砂、ノ、災、ヲ、生、シ、決、河、破、堤、ノ、慘、害、ヲ、演、出、ス、ル、ト、年、ヲ、逐、フ、テ、増、進、セ、ン、ト、ス、ル、ニ、於、テ、オ、ヤ、其、原、因、素、ヨ、リ、維、新、後、監、林、保、護、ノ、制、宜、シ、キ、ヲ、得、ザ、ル、ノ、然、ラ、シ、ム、ル、所、ア、リ、ト、ハ、云、へ、本、邦、地、勢、ノ、急、峻、ナル、モ、亦、此、災、害、ヲ、助、成、セ、ズ、ン、バ、非、サ、ル、ナ、リ、故、ニ、吾、國、ハ、地、

勢上林業ニ適スルハミナラズ又地勢上營林セサルベカラサル必要アルモノトス

第四章 樹種ノ豊多

日本山林一斑

我邦ハ蜿蜒トシテ南方ヨリ北方ニ跨リ氣候宛トシテ熱温寒ノ三帶ヲ包有セリ乃
子新領土臺灣ハ地ヲ熱帶圈内ニ傾シ其地ト雖モ太平洋沿岸ハ地理學上氣候比較
的暖温ナルニヨリ椰樹蒲葵杉櫟等ノ熱帶樹木ハ九州四國ノ南端沖繩小笠原ニマ
デ生育セリ北部モ尙未タ寒帶ノ域ニ達ゼザルモ北極ヨリ來ル所ノ寒潮ノ影響ヨ
リ比較的寒威凜烈ナルノミナラズ内地ハ高山秀峰處々ニ聳フルニ偃松唐檜白檜
ノ寒帶樹木ハ北海道千島ヨリ延ヒテ内地ノ高山ニ蔓延シ來レリ
故ニ日本ハ南端ニハ熱帶樹木ヲ現ハシ北部及ビ高山ニハ寒帶ノ樹木ヲ生シ其間
温帶ノ樹木繁茂セルニヨリ熱温寒何レノ樹種ヲモ見出サハルナシ之ヲ熱帶全ク
シ缺如シ亞熱帶モ亦僅ニ存スル歐洲多ク熱帶ノ地ニ生スル日本ノ定在樹種ハ甚々
非帯ニ微ニシテ地中海中ニ其北端ヲ現ハシ亞非利加ノ内地ニ其南端ヲ示ス故唯
歐洲大陸ノ地中海ニ突出シタル部分ノミ亞熱帶ノ植物ヲ生ズ其南端ニ五屬七
種ニ過ニ比スレバ樹種ノ夥多ナルヤ素ヨリ其所ナリト雖モ同緯度又ハ同温度ハ

第四章 樹種ノ豊多

地ニ於テ互ニ相比較スルモ我邦樹種ノ豊多ナル實ニ驚クベシ是レ一ハ濕氣ノ饒
多ニノ樹木ノ生育シ易キニ因ルトハ云ヘ他ニ地學上ノ一大原因アツテ然ルナリ
請フ之ヲ詳説セシメヨ已ニ述ベタル如ク植物ノ生育ニハ一定ノ温度ヲ要スル
モノニシテ此温ナケレバ植物其生ヲ遂クル能ハザルモノトス地學上ノ説明ニ
ヨレバ第三期ノ頃ニアツテハ地軸ノ方向殆ソト太陽ト直角ヲナシ地球上ノ温
度現時ニ比スレバ一般ニ高ク當時北極ト雖モ尙現時ノ温帶地方ノ温ニ等シク
爲メニ全地面殆ソト森林ヲ以テ覆ハル公孫樹七葉樹等ノ温帶樹種モ尙北極ニ
マデ繁茂セリ然ルニ第三期ノ末造ニ至リ地軸ノ方向變轉シ太陽ニ向ヒタルタ
メ地球ノ氣候一般ニ寒冷ト變シ北緯五十度ノ地ニ至ルマデ積雪結氷ヲ以テ
覆ハルルニ至リ所謂氷積時代來ルニ及ビ北方ニ生長シタル樹種漸次南方ニ逐
ハレ五十度以北又一木一草ヲ止メサルニ至レリ其後第四期ヲ經テ現時代ニ至
リ地軸又漸次ニ廻轉シタルガ爲メ氣候一般ニ稍暖温ニ復シタリ茲ニ於テ一旦
南移シタル樹種再ビ北方ニ歸行セリ此ノ如ク時代ノ變遷ニヨリ地球上ノ温度
ニ變化ヲ來シタメニ地球上ヲ往復セシ植物ハ其途次山脈ノ之ヲ遮ルアラバ之
ヲ越フルノ際寒氣ニ凍殺セラルモノヲ生スルモ山岳ノ障礙ナクシバ能ク生

存シテ旅行ヲ遂ゲ得タルモノトス、是レ洋ノ東西ニヨリ現存樹種ニ多少ノ別アル所以ナリ、今東洋ノ地勢ヲ以テ之ヲ西歐ト比較スルニ、我中央山脈「ヒマラヤ」ロツキー」ノ如キ大山脈ハ海岸ニ沿ヒ南北ニ横走セリ、之ニ反シ「アルペン」ビリニース」等ノ如キ西歐ノ大山脈ハ東西ニ延亘セリ、此ク山脈連綿ノ方向異ナルニヨリ、氷積時代ノ來ルニ當リ、東洋ニ於テハ北ヨリ驅逐セラレタル植物ハ、途次安全ニ山脈ニ沿ヒ南行スルヲ得、再温度回復シ植物ノ北歸スル際ニ於テモ之ヲ遮ルモノナキヲ以テ無異其郷土ニ復歸シタリ、然レモ西歐ニ於テハ植物南行ノ際先ツ山脈ニ遮ラレ、高山氷雪ノタメニ苦メラレ、其一部ハ茲ニ凍死シ爲メニ亡族セリ、又北行ノ時ニ當テモ再ビ山脈ニ妨ゲラレ、之ヲ越フル能ハズ、僅ニ山南ニ其位置ヲ占メザルベカラザルニ至レリ、且歐洲ハ東亞北米ニ比スレバ一層北ニ偏スルヲ以テ、氷雪ノ來ルヤ早ク其去ルヤ遅キニヨリ植物ノ死滅ヲシテ一層多カラシメタリ、是レ現今森林樹種ノ東洋ニ豊ニシテ歐洲ニ拮タル所以ナリ、

現今北米、日本及支那ニ産スル公孫樹、浮蘭羅勤、七葉樹、白茨、合歡花、槐、樟、いぬぐす、ねずこ、扁柏、花柏、杉等ノ類モ、其昔ニアツテハ歐洲全土ニ散布シタルモノナルヤハ、地中ヨリ掘出シタル植物ノ化石及ビ石ニ印シタル木葉ノ模型ヲ觀テ昭々タルモ、今

ヤ東洋ノ特産ニ歸シタリ、東洋何ゾ夫レ多幸ナルカ、プロ、フ、エ、ツ、ソ、ノ、ド、ク、ト、ル、マ、イ、ル、氏、ノ、研究ニヨレバ、日本ニ在ル潤葉樹ハ其屬百ニシテ其種二百ニ至リ、針葉樹ハ十七屬ニシテ三十餘種ニ及ブ、其他竹ノ類亦少カラズ、樹種ノ豊多ナルト之ヲ亞米利加ニ比スレバ一步ヲ讓ラザルニ非ズト雖モ、歐洲各國未ダ此右ニ出ツル地ナシ、故ニ歐人ノ始メテ本邦ニ遊ブモノ、樹種ノ豊多ナルニ驚カザル者殆ンド稀ナリト云フ、

今有用ニシテ主ナルモノ、ミチ掲グルモ左ノ如シ、

針葉樹

- ひのき さわら ひば ねすこ ねずみとし いぶきびやくしん すぎ
- いぬがや あらうぎ かや いてう まき かうやまき あかまつ くる
- まつ てうせんまつ ひめこまつ たうひ ねぞまつ はりとみ つが
- もみ たらべ からまつ

潤葉樹

- やきぐるま かつら ぼのき てぶし もつこく さかき さるた つ

竹類

ばき あをざり 志なのき きわだ にかき ちやんちん せんだん ぞ
よこ もちのき いぬつげ けんぼなし ぞち むくろじ いたやかへで
もみぢ うりかへで ぬるで はせ うるし ゑんじゆ いぬゑんじゆ
さいかち ねむ さくら いぬさくら すみ いす はりざり こんせ
つ あせび 志やくなぎ りようぶ はくうんぼく 志ほじ ぞねりて
ひいらぎ もくせい きり きさゞげ くす やぶにくけい いぬぐす
こがのき 志ろだも つげ あぶらざり あかめがしわ はるにれ あき
にれ をひよう けやき ゑのき むくのき くは おにぐるみ さはぐ
るみ のぶかき 志らかば たけかば うだいかば みづめ おのをれ
はんのき やまはんのき いぬしで そろのき くましで さはしば か
しは おほなら ことなら くぬぎ あべまき うばめがし まてばがし
あかゞし 志らがし いちいがし 志ひのき くり ぶな いぬぶな か
はやなぎ はこやなぎ ぞろやなぎ ゑで たらよう 志きみ くらもじ

まだけ はちく むうそう めだけ すゝだけ はんちく かんちく く
ろだけ

樹種此ノ如ク多シ、從テ其性質相同シカラズ、或ハ樟ノ如ク暖地ヲ好ムアリ、唐檜ノ
如ク寒地ニ適スルアリ、松ノ如ク乾燥ノ砂地ニ堪フルアリ、杉ノ如ク濕潤ノ粘土地
ヲ喜ブアリ、落葉松ハ火山質ニ適シ、扁柏ハ花剛質ヲ好ムガ如シ、斜地ニ宜シキアリ、
平地ニ生シ易キアリ、松ノ如ク天然ニ成林スルモノアリ、杉ノ如ク人工ヲ以テ造林
セザルベカラザルアリ、故ニ土地氣候ニ應シ、隨意ニ其樹種ヲ選擇スルノ便アル未
ダ吾國ノ如キモノアラサルナリ
又材質ノ如キモ堅硬軟區々ニシテ、一様ナラズ、負擔力ノ強キ樟、扁柏ノ如キモノ
アリ、彈力ノ強キ竹、水松、落葉松、櫛ノ如キアリ、割裂シ易キコ樺、志ほじノ如キアリ、殆
ンド割裂スベカラザル公孫樹、たぶ、むくのきノ如キアリ、尤モ硬固ナル、おのをれ、
「うせめかし」「あかゞし」ノ如キアリ、尤モ輕軟ナル、きり、やなぎ、志なのきノ如キアリ、又燃
力ノ多キ、ことなら、くぬぎノ如キアリ、能ク高度ノ熱ヲ生ズル松ノ如キアリ、鈍削シテ
其面ニ美麗ナル紋理ノアルアリ、(とち「けやき」「けんぼ」等)光澤ノ愛スベキモノアリ、

（「たもと」は「たもと」の類）其他天然ニ有スル着色ノ如キ香氣ノ如キハ千様萬種殆ン
ド枚擧ニ遑アラズ、從テ社會百般ノ需要ニ應ジ、或ハ建築ニ、或ハ造船ニ、或ハ器具ニ
或ハ燃料ニ自由ニ之ヲ利用スルヲ得ベシ、彼ノ僅々三十餘種ノ樹木ヲ以テ、社會
萬般ノ需要ニ充タス所ノ歐洲ニ比スレバ、應用ノ便ナル同日ノ論ニ非サルナリ、
本邦ハ苗ニ樹木ノ種類多キハ、ミナラズ、殊ニ良質ノ樹種又多シ、扁柏、樟、等ノ如キ
ハ即チ屈指ノモノタリ

扁柏ハ其材白色ニシテ帶黃紅色、一種ノ香芬ヲ有シ、木理通直ニシテ甚美密、其
質韌ニシテ而モ重カラズ、軟ニシテ而モ脆ナラズ、故ニ工作ヲ施シ易ク、且水濕
ニ堪ヘ、寒熱乾濕ノ變ニ逢フモ伸縮若クハ反振スルヲ少ク、又割裂ノ患ナシ、故
ニ家屋船艦橋梁器具等何レノ製作ヲ用フルモ適宜ナラザルナシ、實ニ本邦固
有ノ良材ニシテ針葉樹中ノ霸王ト稱スベシ、
樟ハ其材淡褐色ニシテ微紫ヲ帶ビ、香氣清芬、木質堅硬ニシテ負擔力強ク、彈力
モ亦大ナリ、且水濕ニ堪ヘ、保存期モ永キニヨリ、尤モ船艦材ニ適シ、又高堂崇社
ノ建築ニ用ヒラレ、且膨脹伸縮ニ患少ナキヲ以テ器械器具ノ製造ニモ供セラ

ル殊ニ老大ノ樹ニ往々存スル、たまもくと唱フル紋理ノ如キハ美ニシテ頗ル
愛スベシ、實ニ樟ハ潤葉樹中尤モ良質ニシテ、且尤要用ナル樹木ナリト謂フベ
シ、
樟ハ東洋特産ノ貴重樹種ニシテ、其材赤黒色ヲ帶ビ、一種ノ芳香ヲ有シ、其質堅
硬ニシテ、樟ニ彷彿タリ、且能ク水濕ニ耐ユ、尤能ク船艦材ニ適スト、雖モ、建築器
具等需用又廣シ、之ヨリ採取シタル樟腦ハ醫藥、香料、防虫劑トナリ、或ハ人造象
牙、無烟火藥等ノ原料ニ用ヒラレ、其需用今日實ニ底止スル處ヲ知ラズ、其價又
貴キニヨリ、一株ノ樹木能ク數百圓ヲ値スルヲ實ニ珍カラズ、豈良樹種ナラズ
ヤ、
杉ハ其材扁柏ニ及バザルモ、鋸斷鉋削皆力ヲ施シ易ク、邦内何レノ地ニモ繁殖
シ、且生長至テ迅速ナルニヨリ、我邦ニテ使用尤モ廣ク、百般ノ需用殆ンド此材
ヲ用ヒザルナシ、亦好樹種ナラズヤ、
榿ハ四方柱ノ柱トシテ尤美觀ニ、ねずこハ天井板トシテ世ニ賞セラル、又花柏
ノ如キハ其材ノ輕軟ナル、針葉樹中殆ンド見サル所ニシテ、之ヲ割裂シ易ク、又

能ク水濕ニ堪フルヲ以テ桶櫃材ニ重用セラル、等、各特有ノ良質ヲ備ヘサルモノナシ、

此ノ如ク我邦ハ良質ノ樹木夥シク、彼ノ歐洲ニテ重用セラル、櫻、榆、山毛櫸ノ如キハ、其價格實ニ低シ、是レ一ハ社會ノ經濟尙幼稚ニシテ利用ノ途未ダ開ケサルニ由ルトハ云ヘ、他ニ良質樹種ノ夥多ナルニ由ラズンバ非サルナリ、

我國土ノ植物ニ富ミ、良樹ニ豊ナル以上、説述スルガ如シ、實ニ本邦ハ先天的ハ植物園ト稱スルヲ得ベク、他日世界ノ大森林學校ヲ設立スルアラバ、日本ヲ措テ他ニ安ニカ求メ、ンヤ、日本人タルモノ、豈揮テ林學ヲ研究シ、又林業ニ黽勉シ、此天與ハ樹種ヲ利用シ、以テ森林國タルハ名ニ負カサラン、トチ謀ラサルベカラズ、

日本山林一斑

第五章 國民ノ天性

天然ノ人心ヲ陶冶スルヤ、夫レ大ナリ、秀麗ナル我國ノ山水ハ結ンテ國民ノ審美心トナリ、清淑タル帝國ノ風光ハ化シテ日本人ノ風雅心トナリ、自然ノ美ヲ愛シ、自然ノ妙ヲ樂ム、ト未ダ日本人ノ如キ民族アルヲ見ズ、殊ニ世界自然ノ裝飾物タル植物

第五章 國民ノ天性

ヲ絶愛ス、ト外人ノ常ニ驚嘆スル所ナリ、

「プロフェッソール、ドクトル、マイル」君其自著中ニ書シテ曰ク、日本人ハ植物ヲ愛スルノ天性ヲ有ス、彼ノ春日野村ノ晚、面色漆ノ如ク頭髮蓬ノ如キ農夫ガ、泥土ニ塗ミレタル粗大ノ手ヲ以テ、艶麗ナル一枝ノ花ヲ折り、觀賞シツ、家ニ歸ルヲ見ルニ非ズヤ、武骨不風流ナル兵士モ、偶路傍ニ美花ヲ認ムレバ馬上必ず首ヲ回スニ非ズヤ、如何ニ僻遠ノ村ト雖モ、如何ニ卑賤ノ家ト雖モ、數株ノ花木或ハ二三ノ盆栽ヲ有セサル者ナシ、其他生計ニ餘裕アル人ハ推シテ知ルベキノミ、實ニ日本人ハ如何ナル無識ノ者ト雖モ、尙ニ三十種ノ植物名ヲ知ラサル者ナキハ予等ノ驚嘆スル所ナリト、プロフェッソール、ドクトル、グラスマン君モ亦曰ク、世界上植物ヲ愛スルノ情、獨乙人ト日本人トヨリ深キモノハ非ザルナリ、斯ク謂フハ決シテ余ノ諛言ニ非ズ、試ミニ見ヨ、極貧ト雖モ二三ノ庭樹ヲ植ヘザルナク、極賤ノ人ト雖モ一二ノ盆栽ヲ有セザルモノ稀ナリ、其他城壕ノ堤ニモ風雅ナル樹ヲ植ヘ、社寺ノ如キハ悉ク古代ノ大木ヲ以テ圍マレ、到ル所トシテ樹木ナラザルナシ、亦以テ邦人が植物ヲ愛スル情切ナルヲ證スルニ足レリト、

夫レ我國民ニシテ此天性アリ而モ自ラ之ヲ覺ル能ハザルハ何ゾヤ蓋シ天性ノ然ラシムル處ナル乎
 此ノ如ク吾國人ハ植物ヲ愛スルノ天性ヲ有ス其植物ヲ栽培シ之ヲ撫育シ之ヲ保護スルニ當リ注意ノ周到ニシテ其勞ヲ厭ハサルハ又自然ノ情ナリトス然ラバ則チ國人ノ天性トシテ樹木ヲ養成シ森林ヲ經營スルニ適當セルト未ダ我國民ノ如キモノアルヲ見サルナリ

第六章 木材ノ需用

苟クモ邦トシテ木材ヲ需用セザルナク民トシテ薪炭ヲ消費セザルナシト雖モ其需用ノ程度ハ木材使用ノ習慣工業ノ發達人口ノ多少等ニヨリ一様ナラズ然我邦木材需用ノ狀況ヲ觀察セヨ家屋ハ殆ンド之ヲ以テ築造セラルニ非ラズヤ大ハ輪奐タル宮殿ヨリ小ハ矮陋ナル茅屋ニ至ルマデ概テ然ラザルナシ燃料亦悉ク之ヲ薪炭ニ仰ギタリ輒近ニ至リ稀ニ建築用トシテ鐵石材ヲ用ヒ薪炭トシテ石炭ヲ代用スルノ途稍進ミシト雖モ此等ハ官廳學校工業場等其他都民一部ノ需用ニ止マ

ルノミ此等ノ物質ハ我國ノ天然吾人ノ習慣ニ不適當ナルニヨリ造家ノ材料トシテ木材ヲ用ヒ燃料トシテ薪炭ヲ用フルコト依然タルノミナラズ其額ハ人口ノ増殖ト共ニ増加スルハ争フベカラザル事實ナリトス其他吾國ニ於テハ舟車器械ノ製作ヨリ日用什器ノ製造ニ至ルマデ木材ヲ使用セザルモノ殆ンド稀ナリトス試ミニ我邦木材使用ノ主要ナル種類及ヒ之ニ適用セラル樹種ヲ擧グレバ左ノ如シ

建築用材	すぎ、ひのき、ひば、まつ <small>(梁、檼、板、敷、居、鴨、もみ、板、つ、か、柱、長、押、)</small> けや <small>(柱、床、柱、緑、板、)</small> ねず <small>(天、井、板、)</small> さくら <small>(床、板、)</small> こう <small>(鴨、居、)</small> やま <small>(柱、長、押、)</small> き <small>(落、懸、)</small> く <small>(基、礎、)</small>
船艦用材	けや、き、ひのき、あか、かし、まつ、すぎ、いち、ひがし、船、志、ひ、臘、脂、木
鑛山用材	ひのき、ひば、かう、やま、き、まつ、く、り、すぎ
穴藏用材	ひのき、まつ、ひば
鐵道用材	く、り、ひのき、まつ、ひば、し、ほ、ち、か、ら、まつ

日 本 山 林 一 斑

築地用材	まつ、からまつ、
柱杭用材	くり、まつ、しゆる、すぎ
橋梁用材	ひのき、けやき、まつ、からまつ、
水工用材	ひのき、まつ、
桶	さわら、すぎ、ひのき、ひば、もみ、きり、
車	あらかし輻矢
建具用材	ひのき、すぎ、もみ、さわら、
箱	きり、ひのき、もみ、まつ、
家具用材	きり、けやき、さくら、赤ぼろ、くわ、くり、ほ、のき、くるがき、みね ばり、くす、いぬぐす、
曲物用材	どうひ、あらべ、
折	どうひ、もみ、すぎ、きり、あらべ、
棒	かし、けやき、きり、すぎ、

第 六 章 木 材 ノ 需 用

臼杵用材	まつ、米麥搗用臼、けやき、餅搗用臼、まつ、杵
屋根板材	くり、ひば、ひのき、すぎ、どうひ、
隣寸用材	どろやなぎ、はこやなぎ、ひのき、さわら、るみ、
器械用材	さくら、けやき、あらかし、
版木用材	つげ、いぬ、つげ、さくら、ほ、のき、かつら、
彫刻用材	ひめこまつ、びやくしん、ひのき、さわら、かつら、けやき、くす、
梯	つげ、いす、まゆみ、さくら、
下駄用材	きり、まつ、すぎ、さわら、るみ、ほ、のき、齒、けやき、齒、あか、がし、齒 ふな、齒、さくら、齒
箆	すぎ、いす、むめ、さくら、たけ、
鎌作用材	ゑんじゆ、いぬ、ゑんじゆ、ゑんじゆ、やぶ、にくけい、まつ、あら、き、か つら、さくら、
樂器用材	きり、けんぼな、し、むめ、さくら、

斑 一 林 山 本 日

手柄用材	まらかし、とねりこ、
木地用材	ひのき、ひば、かつら、けやき、まき、
基秤用材	かや、いてう、
木釘用材	うつき、
小楊子材	くろもじ、
量衡用材	まらかし、
櫛材	つげ、いぬつげ、みねばり、
截物板材	ほゝのき、いてう、かつら
銃身臺材	くるみ、
普通燃材	なら、くぬぎ、かし類、まで類、さくら、つばき、まつ、
火藥炭材	やなぎ類、やまならし、やまはんのき、
製紙用材	やまならし、もみ、とうひ、

利用ノ途此ノ如ク夫レ況シ加之維新後文明ノ發達ニ伴ヒ鐵路電線等大ニ進歩シ、

用 需 ノ 材 木 章 六 第

工業ハ駿々乎トシテ日一日ニ發達シ、益々木材ノ新用途ヲ開クニ至リ、需用ノ増加シタルコト實ニ驚カザルヲ得ズ、例ヘバ鐵道ノ如キ已設ノ延長線路ノミニテモ、今ヤ殆ンド三千哩ニ達セリ、之ニ要シタル枕木ノミニテモ一哩ニ付少クモ五百尺ニ至レリ、故ニ全線路ヲ算スレバ已ニ百五十余萬尺、巨額ニ達セリ、之ヲ六ヶ年毎ニ換フル者トセバ、已設枕木ノ修繕ノミニテモ、今後尙年々廿五萬尺、木材ヲ要ス、況ンヤ毎年三百余哩ヲ新設スルニ十五萬尺、餘ヲ要スルオヤ、又況ンヤ停車場其他ノ建築ニモ又多額ヲ要スルオヤ、今後鐵道布設法ノ第一期第二期ノ豫定線ヲ悉ク敷設シ、之ヲ年々修繕スルニハ尙幾倍ノ木材ヲ要スルヤ知ルベカラズ、又鑛業ノ如キモ著シク進歩シ、爲メニ要スル木材ハ、杭柱及ビ建築用材トシテ七八百萬尺、薪炭材トシテ一千萬尺、消費スルニ至リ、其他火熱ヲ要スル諸工業ノ燃料木材ヲ消費スル製紙、燐寸等製造業ノ原料トシテ尙夥シキ木材ヲ要シ、又吾人が朝夕ノ炊事其他自家用料トシテ費ス所ノ木材ノミニテモ、年々八千萬尺、量ナカルヘカラズ、斯ノ如ク本邦ニ於ケル總テノ需用ニ積算スルハ、少クモ毎年一億六、七千萬尺、巨額ニ達スベシ、此材積ヲ供給シテ不足ナカラシメンニハ、毎年少ク

モ五十萬町ノ森林ヲ皆伐セサルベカラズ、年々此面積ヲ皆伐シテ之ヲ無限ニ保續セシメンニハ千二三百萬町ノ森林ヲ常備セザルベカラズ、然ルモ尙自國ノ需要ヲ充スニ足ルノミ、更ニ一步ヲ進メテ木材ノ缺乏セル隣邦支那朝鮮ニ輸出シテ以テ國利ヲ謀ラントセバ、更ニ幾何ノ面積ヲ要スルヤ得テ知ルベカラズ、森林ノ養成豈勉メザルベケンヤ、

本邦ニ於ケル木材ノ需用、夫レ此ノ如ク大ナリト雖モ、幸ニ我天然物林地ノ廣キニ千萬餘町ニ達スルヲ以テ、若シ此林地ヲ悉ク利用スルニ至ラバ、敢テ其需要ヲ給充スル難カラズ、然レモ從來林政ノ不備ナリシヨリ、濫伐月ニ盛ニシテ森林日ニ減シ、今日樹木ヲ以テ蔽ハル、モノ僅ニ其百分ノ二十ニ過ギザルニ至レリ、故ニ工業製作ノ發達ニ應ジ、其材料年々缺乏ヲ告グ、材價日々ニ騰貴セリ、彼鐵道枕木ノ如キ之ニ適當ナル栗扁柏羅漢柏等ハ之ヲ得難キニヨリ、今ヤ「まほじ」かつら「からまつ」まつ「まき」等ヲ用ヒ殆ンド其樹種ヲ擇ブ能ハザルニ至レリ、樟腦ノ輸出盛ニシテ樟樹殆ンド其跡ヲ絶チ、隣寸業起リテヨリ「さわぐるみ」はこやなぎ「殆ド盡キ、今ヤ本州便利ノ地ニ之ヲ得ルコト難ク、遠ク之ヲ北海道ニ供給セリ、製紙業興リシヨリ未ダ數

年ナラザルニ、樅、唐檜等之ニ供スル原料ノ缺乏ヲ告グ、狼狽以テ造林ヲ企ツモノアルニ至レリ、又建築材ノ如キモ其供給不足ナルヨリ材價著シク騰貴シ、遂ニ外國ヨリノ輸入ヲ促スニ至レリ、近來北米ヨリ「チレゴン」「バイン」ダグラス「ブアー」等ノ木材ヲ輸入スル、一年ニ其額ヲ増シ又暹羅ヨリ「チーグ」材ノ輸入ヲ企圖スルモノアルニ至テハ國家ノタメ酷慨セザルヲ得ザルナリ、夫レ本邦ノ氣候タルヤ、樹木ニ好適シ、且天然の林地ノ豐大ナル世界ニ比類ナキニモ拘ハラズ、之ヲ遊放シ爲メニ自國ニ要スル木材ノ供給ヲ外國ニ仰クニ至テハ、國家ノ不利豈之ヨリ大ナルモノアラシヤ、宜シク此氣候ト土地トヲ利用シ、經林ノ策ヲ立テ、保護ノ道ヲ講シ、至ル所林相蔚蒼タラシメ、之ヨリ產生スル木材ヲ以テ自國ノ需用ヲ満足セシメサルベカラサルノミナラズ、更ニ一步ヲ進メ、之ヲ海外ニ輸出シ、以テ國利ヲ計ラサルベカラズ、一葦海ヲ隔テ、我國ニ隣接セル支那國ハ、實ニ我林産ノ好花主ニアラズヤ、抑支那ノ國タル邦土ノ廣漠タルヲ殆ンド本邦ノ二十五倍ニ當リ、人口ノ多キヲ全歐洲ノ總數ヨリモ多シ、然ルニ森林少クシテ已ニ荒廢シ、加之其位置一局部ニ偏在シ、運輸不便ニシテ分配宜シキヲ得ズ、殊ニ直隸山東及ヒ河南ノ北部ヲ併セテ一帯ノ平原

四十二

一千方里ノ間ニ棲息スル幾千萬人民ノ需用材ハ實ニ驚クヘキ額ニシテ皆之ヲ他ニ仰ゲリ、國外ニアツテハ遠キハ米國、近キハ朝鮮及ビ我國、國內ニアツテハ福建湖廣ニ之ヲ求メ、上海若クハ天津ヲ經テ輸入スルモノトス、然レモ福建湖廣ノ森林モ漸ク減シ、朝鮮ノ如キモ已ニ業ニ荒廢ノ評アリ、之ヲ以テ將來本邦林業ノ望油然トシテ禁ズベカラサルモアリ、今日未ダ本邦ヨリノ輸出額甚ダ僅少ナル所以ノモノ、蓋シ他ニ諸種ノ原因アリトハ云ヘ、我國木材ノ缺乏シテ自國ノ需用タモ満足セシムル能ハザルニ由ラズンバアラザルナリ、故ニ目今ニアツテハ木材ノ如キ内國ニモ需用多ク且運轉力ノ弱キモノヨリ寧ロ樟腦椎茸燐寸竹器ノ如キ加工林産物ヲ輸出スルヲ以テ尤得策ナリトス、已ニ樟腦ノ如キモ年額凡百五十萬餘圓ニ達シ、椎茸ノ如キモ五十萬圓以上ニ超過セルモ未ダ以テ彼需用ヲ満足セシムルコト難シ、故ニ尙進ンデ此等ノ輸出ヲ力メザルベカラズ、然レモ今ヤ内地其原料ニ缺乏ヲ告ゲ樟ノ如キハ其郷土タル四國九州ニ至ルモ之ヲ見出ス、難ク根株ダモ正ニ掘盡サントス、嗚呼何ンゾ夫レ遺憾ナルヤ、我林産ノ内外ニ於ケル需要此ノ如ク切ニシテ大ナリ、是レ我國民ハ營林ノ天職アル所以ナル乎、

第七章 水源ノ涵養

今試ミニ地圖ヲ披キ山川分布ノ狀體ヲ見ヨ、山峯相連ルノ間必ズ溪流アリ、溪流ノ集ル所遂ニ河川ヲナシ、河川ノ山ヲ去ル漸々遠キニ至レバ其兩岸ニ平地ヲ現ハスベシ、此平野ハ吾人ノ生活ニ必要ナル農産物ノ産地ニシテ所謂田圃是ナリ、田圃ノアル所必ズ村落アリ、村里ノ集マル所必ズ都市アリ、以テ地方生活ノ組織ヲナセリ、而シテ其間ヲ流レタル河川ハ即チ其地方ノ生民ニ幸福ヲ來ス、ハ淵源タリ、夫レ河川深ク水量多キハ舟楫往來ノ便ヲ通ジ、以テ交通貿易ノ利ヲ盛ニスベク、田圃灌溉ノ用ニ供シ、以テ農耕ヲ營ムベシ、其他無量ノ魚族ヲ生息セシメ、或ハ引ヒテ水車ヲ運轉セシムベク、又飲料トシテ用フベク、其便宜ヤ悉クスベカラズ、之ニ反シ河底淺ク給水全カラザルハ運輸ノ便ナキノミナラズ、殆ド農業ヲ營ム能ハサルニ至ルベシ、其他水車ハ運轉セズ、漁業ハ衰ヘ、飲料乏シキニ至リテハ其不利ヤ數フベカラズ、多イ哉、河ノ功ヤ大ナル哉、川ノ德ヤ、河川水量ノ充足ハ其地方住民ニ影響スル此ノ如シ、然ラバ河川ノ水量ハ常ニ之ヲ充足セシメサルベカラズ、如何ニセバ之ヲ

充足シ得ベキカ他ナシ其水源ヲ涵養スルニアルハミ水源ヲ涵養スルノ道他ナシ
森林ヲ保護シ常ニ之ヲ鬱茂タラシムルニアルハミ乞フ左ニ其理由ヲ略説セン
森林ニ降下シタル雨水ハ林内空氣ノ寒冷ニシテ常ニ濕氣ノ豐潤(第十三章參照)ナ
ルト林内ヲ通ズル風力ノ緩弱ナルト及ビ落葉苔蘚地面ヲ被覆スルトニ基キ著シ
ク之ガ蒸發ヲ妨ゲラルニヨリ林内ニアツテハ外野ニ比シ常ニ多分ノ雨水ヲ保
留スルノ作用アルモノトス林學者「ドクトル」ミユットリツヒ氏ノ研究ニ基キ「プロフ
ツソール」ドクトル「ウエーベル」氏ノ算出シタル所ニ由レバ外野ニ於テ蒸發スル水
分百ニ對シ林内ヨリ蒸發スル水分ノ割合ハ次ノ如シ

林種	蒸發量	殘留量
山毛櫸林	四〇、四	五九、六
唐檜林	四五、三	五四、七
赤松林	五八、二	五七、七
新植地	九〇、三	九、七

之ニ由テ見レバ無林地ニアツテ空シク蒸發シ去ル雨水モ林地ニアツテハ其五六

割チ殘留スルヲ知ル尙落葉苔蘚ノ存スルアラバ殘留量更ニ二割チ増加スルハ「
ロフエツ」ソールドクトル「エーベル」マイエル「氏」ノ已ニ實驗セル所タリ此ク殘留シタ
ル雨水ハ其一部ヲ樹根ヨリ吸收シ去ラルト雖モ其他ハ全ク地中ニ滲入シ岩石
ハ罅隙ニ潜伏シ集合シテ流動シ漸ク滲溜シテ再ヒ地表ニ湧出シ遂ニ所謂泉源ヲ
形成スルモノトス而シテ林内ニ於ケル雨水ノ殘留量ハ高山ニ登ルニ從ヒ愈々多キチ
加ヘ遂ニ八九割ニ至ルハ實驗ノ證明スル所ニシテ又高山ニ至ルニ從ヒ雨量モ亦
益多キモノナレバ山岳ノ森林殊ニ高山ノ森林ハ多分ノ雨水ヲ地中ニ保有シ以テ
水源ヲ涵養スルノ作用アルモノトス故ニ河川ノ水源ニ造林スルハ著シク水量
ヲ増加シ又水源ノ森林ヲ伐採スルハ急ニ水源ノ涸渴スルト是等ノ實例枚擧ニ
遑アラズ

夫レ山岳ニシテ樹木鬱鬱タラバ源泉滾々トシテ流盡キズ河川底深クシテ水多シ
地方ノ住民依テ以テ生業ヲ營ムベシト雖モ水源ノ森林荒廢スルハ水源忽ニシ
テ乾涸シ河川又水流ヲ見サルニ至リ遂ニ農業ヲ營ム能ハザルノミナラズ後章述
ブルガ如ク洪水頻發シテ遂ニ安住スル能ハザルニ至ルベシ山川ハ國ノ本ナリト

日本山林一斑

ハ熊澤蕃山ノ夙ニ唱ヘタル所ニシテ實ニ至言ト謂ツベシ、
 本邦ノ地勢タルヤ内地ハ一面ニ山嶽重疊シ、無數ノ溪流此間ヨリ發シ、相集マリテ
 六十五ノ大川及ビ數百ノ小川ヲ形成セリ、故ニ山トシテ殆ド水源ナラザルナク、岳
 トシテ河川ヲ出サハルモノハ少シ、地勢已ニ如此ナルハミナラズ、歐米民族ハ常食ハ
 肉類麥麩ナレバ、我邦民ハ常食ハ杭稷稻粳ナリ、禽獸麥必ズシモ灌漑ヲ要セズト
 雖モ、杭稷稻粳必ズ灌漑ヲ要ス、嗚呼我四千二百萬ノ同胞カ二百八十萬餘町ノ水田
 ナ耕作シテ毎年四千萬石ノ米穀ヲ獲テ生活シ得ルモノ、蓋シ山林ヨリ流出シタル
 河水アルニ由ルノミ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、水源涵養ノタメ、森林ヲ保護スルハ必要
 ナル豈他邦ノ比ナランヤ、故ニ吾國ニ於テハ、已ニ往古ヨリ水邊ノ山林ハ之ガ斫損
 ナ禁制セラレタルモノ、如シ、試ミニ類聚三代格卷十二ヲ繕ケ、

弘仁十二年四月廿一日、官符應禁制斫損水邊山林事、右得大和國解爾產業之務、非
 只堰池浸潤之本、水木相生、然則水邊山林必須鬱茂、何者大河之源、其山林然、小川之
 流、其岳童焉、爰知流之細大、隨山而生、夫山出雲雨、河潤九里、山童毛盡、澗流涸、謹案
 太政官去大同元年閏六月八日下五畿内七道諸國符爾、右大臣宣 奉勅、山川海島

第七章 水源ノ涵養

濱野林原等、一切收入、公私共之、但山岳之體、或於國爲禮事、須蕃茂、勿令伐損、又山城
 國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰堤坊淪沒、採材遠處、還失灌漑、因茲國司量便禁制
 河邊諸國若有此類者、不論公私不在收限者、然則大堰之岳、專有禁制、小川之山、不在
 禁限、因茲百姓憚遠、貪近、川上山林、任意伐採、至有旱年、漑乏苗焦、動遭損害、職此之由
 也、望請川澗泉源溝池等、縱漑田水邊山林、藪澤、不同公私、悉皆加禁制、並莫伐損、謹請
 處分者、依請

此ノ如ク其昔ニアツテハ水源涵養ノタメ嚴ニ禁伐ノ制ヲ設ケラレタルモ、其後兵
 亂已ムキナク、遂ニ森林制度ノ如キハ度外視セラレ、ニ至レリ、降テ徳川時代ニ至
 リ、林政又起リ、田山水山田林等ノ名ニ、ヨツテ伐木ヲ禁止シ、其他一般ニ保護ノ道備
 ハリシト雖モ、維新後林政又大ニ紊レ、濫伐過採至ラザルナク、爲ニ山林著シク荒廢
 シ、至ル所ノ河川悉ク其水量ヲ減シ、河幅廣キニ拘ハラズ、微々トシテ細流系ノ如キ
 モノヲ見ルニ至レリ、故ニ旱天相亘ル數日ナラザルニ忽チ水論所々ニ蜂起シ、又有
 名ノ大河利根ノ如キ淀川ノ如キ、河口ヲ昇ル數里ヲ出デズシテ、河航淺脚ノ小瀛船
 常ニ運行ニ苦メルニ至テハ、豈嘆ゼサルヲ得ンヤ、タトヒ四千六百餘ノ禁伐林アリ

テ以テ水源涵養ニ供セラレタルアルモ、未ダ其實効ナキハ何ゾヤ、蓋シ其名アツテ實ナキモノアリ、水源涵養ノ實アツテ未ダ禁伐林ニ編入セラレザルモノアルガ如ク、其選擇宜シキヲ得ザルニ非ザル乎、森林法ノ運用豈等閑ニ付スベケンヤ、尙我地形ヲ案ズルニ幅狹ク、丈長ク、而シテ巍峨タル山系ハ國ノ中央ニ連亘スレバ、到ル所ニ瀑布瀨湍騰沸シ、河水ノ流勢亦猛烈雄快ニ、全國至ル所水力ヲ利用シ得ベキ箇所ニ富メルハ、歐米各國ニ多ク其比ヲ見ザル所、實ニ將來植産興業上ノ天寶ト謂ツベキナリ、水力利用ハ地勢上、遂ニ日本立國ノ大根本タルヤ、必然、而シテ水力ノ強弱ハ其量ノ多少ニ比例スルモノナレバ、水力ヲ利用セント欲セバ、常ニ水量ノ供給ヲ充分ニ且ツ永久不變ナラシムルヲ要ス、然ラバ則チ本邦ニ於テハ、水力利用ハ點ニ於テモ、亦森林ヲ保護シ、常ニ之ヲ闊然タラシメ、以テ水源ヲ涵養セサルベカラズ、

試ミニ目下本邦ニ於テ水源涵養ノタメ保存林ト定メラレタルモノヲ擧ぐレバ次ノ如シ

區別	箇所	反別
----	----	----

官林	一、四六七	五三、三〇六
民林	二、一四六	二〇、〇三二
合計	三、六一三	七三、三三八

第八章 土砂ノ扞止

第八章 土砂ノ扞止

森林ハ畜ニ水源涵養ノ大効アルノミナラス、土砂ノ崩落ヲ扞止シ、岩石ノ崩潰ヲ防止スル作用實ニ少カラズ、乞フ左ニ其關係ヲ説明セン、

夫レ山岳ノ骨ハ何レモ岩石ナリ、岩石ハ其種類ニ依リテ風化ノ度異ナリト雖トモ、風雨、氣候、植物等ノ作用ニヨリ漸次破壊シテ所謂土壤ヲ生スヘシ、故ニ山岳ノ皮肉ヲナス土壤ハ多クハ之ヲ構成スル岩石ノ破碎ヨリ成ルモノナリ、然レ此破碎シテ生シタル土壤若シ樹木ハ其上ニ生存シ、森林ハ之ヲ被覆スルアルハ、其土壤永ク、岩石ニ付着シ、又崩落スル患ナシ、何トナレバ、雨滴ノ降下スルアルモ、一部ハ樹林枝葉ニ妨ゲラレ、且之ニ保持セラレ、地面ニ直落スルコトナシ、從來ノ經驗ニ由レバ少クモ降雨ノ四分ノ一ハ或時間中枝葉ニ保持セラレ、其一部ハ枝上ヨリ蒸散スルモ

他ハ葉ヨリ枝枝ヨリ幹ニ傳ハリ漸次流下スルニヨリ其速力緩漫ナリトス尙樹木ノ幹根ノ立存スルヲ以テ更ニ水勢ヲ弱ラシメ且落葉苔蘚ノ被覆スルアツテ海綿ノ如ク能ク多量ノ水ヲ吸收シ以テ之ヲ保持シ蓋シ一立方尺ノ苔蘚ハ能ク四斗三升ノ水ヲ保持ス一時ニ雨水ノ奔流スルヲ防クヘシ從テ壤面ヲ破碎スルヲナク又洗剝スルヲナシ加之網ノ如ク蔓延セル樹根ト根ノ如ク被覆セル苔蘚ハ能ク土壤ヲ固定スルニヨリ土砂容易ニ崩流スルノ患ナキモノトス加之樹木ヨリ年々生スル落葉ハ分解シテ朽土トナリ漸次其肥力ヲ増シ益々豐饒ノ土質ニ變スベシ是ヲ以テ斧斤未ダ入ラザル天然林ニアリテハ落葉堆積シテ土壤深ク決シテ岩石ノ露出スルヲナク樹木蒼々トシテ自ラ繁茂スヘシ然レモ一旦樹木ヲ濫伐スルハ更ニ落葉ノ堆積スルヲナク苔蘚ノ生存スルヲ難シ由テ地面ハ全ク暴露シ土地濕氣ヲ亡ヒ樹根ノ腐朽ト共ニ其固着力ヲ失フニ至ルベシ若シ降雨ノアルアラハ之ヲ妨グル樹木ナキニヨリ非常ノ活カチ以テ地面ヲ打擊シ忽チ其幾分ヲ破碎シ且之ヲ剝離スベシ加之水勢ヲ防止スルモノナク恰モ屋上ヨリ瀉下スル如ク禿地ヲ流去スルハ其猛力果シテ如何ゾヤ殊ニ急斜ノ地タランニハ多量ノ雨水非常ニ強

暴ナル動カチ以テ谷間ニ奔流スルガ故ニ疎鬆ナル土壤ハ勿論強固ナル土地ト雖モ此暴力ニ抵抗スル能ハズ漸次ニ剝離シ崩壞シ流失シテ遂ニ岩骨ヲ露ハスニ至ルベシ其一旦露出シタル岩石ハ破碎シ易キモノニアリテハ一雨一霜毎ニ風化潰碎シテ細粒トナリ流下シ殊ニ全山已ニ砂礫ヨリ成ル山岳ニ於テハ漸次崩潰シテ殆ンド底止スル所ナカルベシ所謂砂流ナルモノ是ナリ今日各地殊ニ山陰山陽及ヒ近畿地方ニ於テ見ル所ノ童峰ハ此恐ルベキ慘情ニ陥ラザルモノ殆ンド稀ナリ已ニ砂流ヲ生スルニ至レバ地面茲ニ樹木ヲ養フノ力ヲ失ヒ其地全ク不毛ニ歸スベシ吾人ハ常ニ此種ノ不毛山地ノ至ル所ニ充滿スルヲ嘆セズンバアラス嗚呼處置其法ヲ得レバ即チ森林トナシ充分ノ利益ヲ得ベキ地ニシテ長ク帝國ノ不毛地タラシメサル可ラサルヲ聞ケハ誰カ復之ヲ惜マサルモノアランヤ此ノ如キ砂流尙可ナリ更ニ一段ノ恐ルベキモノハ山岳外面ニ存在スル土壤ノ其下ニアル岩面ト其固着ヲ失フヤ雨水漸次其間ニ浸滲シテ地皮ト岩面ト離隔セシムルニ於テハ遊離ノ土壤豈永ク傾斜ノ急ナル岩石上ニ滯止スルヲ得ンヤ一朝暴風強雨ノ來ルニ際セバ轟然滿山ノ土壤一時ニ墜崩ス所謂山岳ノ崩潰是ナリ崩潰ノ起ル處遂ニ

之ヲ支フルノ術ナシ、吾人ハ美濃大和ニ於テ其害ヲ見シニ非ズヤ、當時ノ慘狀今之ヲ聞クモ、尙肌ニ粟ヲ生ズ、山岳崩潰、土砂崩流ノ恐ルベキ只ニ茲ニ止マラズ、奔流シタル土砂ハ著シク下流ニ堆積シ、益々河底ヲ高起セシム、實ニ驚クベシ、塘堤一寸ヲ築クハ河底二寸ヲ高メ、彼ノ有名ナル利根川ノ如キ河底已ニ屋上均シキ處少カラズ、又淀川ノ如キ淀舊城ノ石垣ニ依リ測算スルニ、築城後今日ニ至ル三百年ニシテ川床ノ嵩マルト十二尺五寸(工部卿ニ據ル)共ニ維新後ノ堆砂尤著シキモノ、如シ、余ガ郷國ニ於ケル加古川ノ如キ、往時沿岸ノ村落ニアツテハ川流ヲ上下スル舟ノ檣頭ダモ見ル能ハザリシモノ、今ハ則チ如何、川床嵩マリシヨリ檣柱ハ堤塘ヲ隔テ、尙其過半ヲ認メ得ルニ至レルニ非ズヤ、其太甚シキハ花岡質ノ禿山ヨリ流出シタル河川ニ於テ之ヲ見ル、是レ中國地方ニ所謂天井川ヲ生スル所以ナリ、試ミニ鐵道ニ乗ジテ阪神間ヲ旅行セヨ、三タヒ河底ヲ貫通シタル隧道ヲ通過セサルヲ得ズ、斯ク河底ノ高起シタル原因ヲ疑ハ、乞フ車窓ヲ開キテ六甲山脈ノ赭禿タル狀ヲ一望セヨ、疑團自ラ氷解セン、

河床ノ高起スルヤ、河川ノ容水量ト堤防ノ固定力ハ、共ニ減少スルニヨリ、遂ニ洪水

汎濫堤防決破ノ慘害ヲ助成スルニ至ルモノトス、豈恐レザルベケンヤ、而シテ此等ノ原因ヲ問ハ、則チ森林ノ濫伐是ナリ、

夫レ土砂扞止上森林濫伐ノ禁制セサルベカラサル此ノ如シ、況ンヤ吾國ノ如ク、雨量多ク、殊ニ急雨頻ナルノミナラズ、地勢峻嶮ナル山岳多キニ於テ、オヤ、土砂扞止上森林ヲ保護スルノ必要ナル殆ンド、他ニ其比ヲ見サル所ナリ、

故ニ吾人ハ一方ニ於テハ水源ノ荒地ニ造林ヲ行ヒ、他方ニ於テハ多クノ保安林ヲ設ケテ之ガ濫伐ヲ制止セザルベカラズ、殊ニ吾人ガ世人ノ注意ヲ乞ハント欲スルモノハ我國至ル所ニ存在スル原野ノ處置是ナリ、

村落周圍ノ山地ハ所謂秣場ニシテ、年々肥草ヲ濫採スル處タリ、假令施肥法ノ發達セザル今日、草肥ヲ以テ田圃唯一ノ肥料トスルノ已ムヲ得サル處アリトハ云ヘ、其肥草ヲ作ルニ尙法アリ、之ヲ森林ト結合シ、一旦秣場トナリタルモノモ、一時ハ森林ヲ仕立テ漸次土地肥力ヲ増進セシメ、后之ヲ伐採シテ再ビ秣場トナシ、又地力瘠弱ニ傾ケバ更ニ森林トナスガ如ク、所謂林田作業ヲ營ムニ於テハ、有用ノ眞草ヲ作り得ラルベク、又意ヲ用ヒテ造林ヲ行フルハ肥料ニ充ツル落葉ヲ別ニ林地ヲ害セズ

シテ採取シ得ザルニ非ズ、然ルヲ注意致ニ至ラズ、年々頻探シテ已マズ、雜草ハ之ヲ亂生スルニ任シ、歲々燒去リテ顧ミサルモノ、如シ、依テ地力ハ漸次ニ瘠變シ、草質ハ逐年惡化スルハ、實ニ見易キノ理ナリ、

故ニ往時一町歩ノ草ヲ採取シタル者、今ヤ二三町歩ノ草ヲ刈取ルニ非ザレバ、肥料トシテ同一ノ實効ナカルベシ、從テ秣場ハ愈廣大ナルヲ要シ、其位置漸次僻遠ニ至レリ、採取ニモ亦多クノ勞力ヲ要スルヲ以テ、試ニ之ガ價格ヲ積算セバ、決して廉價ナル肥料ニモ非サルベシ、而モ害ナケレバ猶恕スベシ、至ル所ノ草野、土漸ク崩レテ、地漸ク淺ク、砂流所々ニ起リテ、山骨乃チ露ハルノ慘狀ヲ呈スルニ至テハ、片時モ放置スベキニ非サルナリ、

試ミニ目下土砂扞止ノ爲メ保存林ト定メラレタル森林ヲ舉グレバ

區別	箇所	反別
官林	六三六、	一〇、一七五、
民林	八、九一三、	三五、三九五、
合計	九、五四九、	四五、五七〇、

第九章 洪水ノ防禦

幾十幾百ノ生靈ヲ亡ボシ、幾千幾百萬ノ財産ヲ流ス所ノ洪水ハ、其原因果シテ何レニアルカ、是レ治水ヲ論ズル者ノ先以テ研究スベキ要件ナリト信ズ、洪水ノ汎濫スルヤ、其主因素ヨリ天候ニ歸スベキモノニシテ雨量ノ劇多ナルニ因ルベシト雖モ、附加隨從シテ其暴威ヲ逞フセシムルモノ、森林濫伐ノ與ツテカアルトハ疑フベカラザル事實ナリトス、乞フ其理由ヲ概説セン、

前已ニ述ベタル如ク、森林ニ下降シタル雨量ノ全部ハ地面ニ直達セズ、大約其四分ノ一ハ枝葉ニ保持セラレ、後枝ヲ經テ幹ニ傳ハリ、遂ニ地面ニ達スルモノナレバ、一時雨水ノ流下スルコトナク、ダトヒ地面ニ下ルモ樹木ノ株根ハ之ヲ支ヘ、落葉苔蘚ハ共ニ之ヲ含ミ、以テ其流下ノ勢ヲ殺ギ、之ヲ緩弱ナラシム、故ニ森林繁茂スレバ、強雨暴カニ至ルモ其水一時ニ流出スルコトナク、漸チ以テ溪川ニ注流スルニヨリ下流暴漲ノ勢ヲ減殺シ、遂ニ横流汎濫ノ甚キニ至ラサシム、之ニ反シ森林ヲ濫伐シ、荒廢ニ陥ラシメタル所ハ、降下シタル雨量ハ全部ハ悉ク一時ニ流下シ、之ヲ支フルノ枝

葉ナク之ヲ妨グルノ根株ナク之ヲ吸フノ苔蘚ナキニヨリ水勢從テ強ク土壤砂石ヲ混シテ濁流トナリ溪口ニ向テ奔注シ下流ニ至テ運ヒ來レル土砂ヲ堆積シ爲メニ積年已ニ河床ノ高起シ堤防已ニ弱キニ乘ジ水流一時ニ高ク襲來スルヲ以テ遂ニ洪水ノ汎濫ヲ來シ堤防ヲ破リ良田ヲ埋メ家屋ヲ流シ人畜ヲ亡ボスニ至ルハ理ノ應ニ然ルベキ所ニシテ已ニ二百年前ニ於テ熊澤蕃山ノ憂ヘタル所、
 舊ハ川トイフモノハ平地ヨリモ低カリシニ今ハ平地ト齊シクナリ或ハ平地ヨリ高ク流ルモノアリ堤バカリニテ持チテアルナリ是皆山ノ荒レテ爲セル所ナリ昔ハ川深ケレバ大方ノ大雨大水ニテハ田地家屋敷ヲツコナウコトナカリキ今ハ川ハ淺シ山々ニ雨水ヲ貯フル草木ハナシ少シノ水モ中水トナリ中水ハ大水トナリ大水ナレバ堤ヲ越ヘ破リ田地家屋敷ヲ損フコト多シ其上左堤強ケレバ右ノ堤ヲ壞リ左右共ニ強ケレバ川下ヲ壞ルトイヘリ是レ皆川ノ埋モレテ深カラヌ患ナリ、

實際森林濫伐ノ結果洪水ノ害類ニ起リ政府及ビ人民ノ狼狽シテ再ビ造林ヲ企テ以テ之ヲ防ギタル實例ハ各國歴史ノ證明スル所又何レノ地方ニ至ルモ強風ニ隨

伴シテ暴風ノ來ルハ河川漲溢シ易シトハ人ノ常ニ唱フル所ニシテ事實又然リ是レ枝葉ニ保持セラレタルハ雨水ノ一部風ノ爲ニ振盪セラレ爲ニ水量ヲ增加スルニ由ル夫レ枝葉ニ保持セラレタル一部ノ雨水ヲ搖落シタルノミニテモ尙洪水ヲ來シ易キト此ノ如シ況ンヤ森林ナク樹木ナク落葉ナク苔蘚ナキニ於テオヤ洪水ノ汎濫シ易キ豈怪ムニ足ランヤ山高クシテ峻ニ河短クシテ急ナル地勢ヲ有シ雨量多クシテ殊ニ暴雨屢ナル氣候ヲ有スル本邦ニ於テハ洪水ノ繁多ナルヤ素ヨリ其所ナリト雖モ近年各地水災頻リニ起リ決河破堤ノ慘狀ヲ演出スル比年倍甚シク人畜ヲ傷ヒ財產ヲ流亡スルハ無量ナル年ヲ逐フテ増加セントスルニ至テハ豈嘆スベキノ至ナラズヤ試ニ明治八年以後明治廿七年ニ至ル迄年々洪水ヨリ生シタル損害見積代金ト全國土木費中河川ニ屬スル費額トヲ調査センカ次ノ如シ

年 號	損 害 代 金	河 川 土 木 費
明治八年	三二〇八、一五七、	一五四七、四三九、
同 九 年	二、一七四、二〇五、	一、六四九、七〇四、
同 十 年	九一、一六二、	

日本山林一斑

同十一年	三〇二、七九〇	一、八〇四、七七一
同十二年	二九一、四五〇	一九六二、一〇七
同十三年	四一八、〇〇五	三、〇四八、五〇五
同十四年	四、〇六七、一〇〇	二、五〇〇、三三二
同十五年	三、三九〇、三五二	三、六三三、七六六
同十六年	一、四四四、七九〇	三、一九九、九九四
同十七年	一九、六九二、五三八	三、二三四、七三四
同十八年	二五、六七八、八四九	四、二四九、六八二
同十九年	七、七五一、四六七	三、五三〇、六二八
同二十年	二、二〇八、〇三七	三、五二一、五三〇
同二十一年	一、四四六、六四一	三、五一九、五三五
同二十二年	八、九六五、一八二	六、二八五、一二五
同二十三年	七、三三〇、九四六	六、五一一、六八六
同二十四年	四、一五七、七四六	六、八五八、一八九
同二十五年	二〇、七五〇、八三八	六、〇二三、二二三
同二十六年	四四、一五六、八九九	七、五九四、五九九
同二十七年	一七、七二六、一一二	

五十八

其増進ノ著シキ實ニ寒心セザルヲ得ザルナリ其原因素ヨリ地勢氣候ノ然ラシム

第九章 洪水防禦

ル所アリトハ云ヘ、大政維新後、森林濫伐ノ結果モ、亦其一大原因タラズンバ、非ザルナリ、故ニ年々巨萬ノ資ヲ投シ、切ニ治水ヲ圖ルト雖モ、苟クモ其禍源タル山林ヲ修ムルニ非ズンバ、到底其害ヲ制スルヲ難シ、其本源已ニ亂ル、未流ハ修堤護岸何ノ効カ、是アラシク設クレバ、忽チ崩レ、修レバ復潰ユ、其害ノ及ブ所實ニ底止スル處ヲ知ラザルナリ、

近來水災荐リニ其數多キガ爲メ、今ハ人皆之ヲ聞クニ慣レテ敢テ驚カズト雖モ、詳ニ之ヲ思ハ、實ニ國家百年ノ大患ニアラズヤ、然ラバ則チ速カニ森林ヲ造植シ、且之ヲ保護シ、以テ此災害ヲ輕カラシメ、又之ヲ防禦スルノ策ヲ講スルハ、吾國目下ノ急務ナリトス、森林法ノ發布豈之ヲ忽諸ニ付スベケンヤ、

試ミニ目下本邦ニ於ケル防水保存林ヲ舉クレバ

官 區 別	簡 所	反 別
官 林	二四〇、	一九三、
民 林	一一七、	一五、
合 計	三五七、	二〇八、

五十九

第十章 漁業ノ保護

六十

日本山林一斑

凡ソ森林ノ繁茂スルト否トハ、其國漁業ノ盛衰ニ至大ノ關係ヲ有スルモノトス、若シ夫レ水源ノ森林翳鬱トシテ晝尙暗キハ、下流ハ魚類ノ發育ヲ容易ナラシムベク、湖塘河岸若シ幽鬱タル樹木ノ陰翳スルアラバ、河湖又水族ノ繁殖ヲ盛ナラシムベク、海岸若シ森林暢茂シ綠陰幽邃ノ趣アラシメバ、其近海ハ魚屬ノ寄集ヲ多カラシムベシ、從テ森林ノ鬱茂タルアラバ、直ニ漁利ヲ盛ナラシムベシト雖モ、一旦森林荒廢スルハ、棲息スル魚類大ニ減シ、遂ニ去テ其影ヲ止メサルニ至ルハ、之ヲ實際ニ徴シテ明ナル所、漁父ノ常ニ嘆シテ訴フル所ナリ、其理由トスル所未ダ明晰ナラズト雖モ、左ノ所説或ハ其梗概ヲ誤ラザランカ、

森林ハ之ヨリ流出スル水量ヲ適度ニシ、旱魃ノ時モ尙水ヲ供給スルノミナラズ、強雨ノ時ト雖モ河水ノ奔流ヲ遲緩ナラシメ、以テ水量ノ供給ヲシテ永久不變ナラシムルニ由リ、魚屬モ大ニ生活シ易シ、彼ノ旱魃ノ際死滅シ、洪水ノ際流盡スル等ノ患少シ、且給水ノ常ニ適順ナルハ大ニ魚類ノ疾病ヲ減スルモノニシテ、ウイ

第十章 漁業ノ保護

ルモット氏ノ如キハ、魚屬ノ疾病ヲ發スルハ、大約森林ノ濫伐ニヨリ給水ノ不同ナルニ基因スト云ヘリ、且森林ノ樹根ト苔蘚ハ能ク土壤ヲ固定スルニヨリ、大雨ノ時ト雖モ土砂流出ノ患ナク、流水常ニ頗ル純清ニシテ汚泥ヲ混スルコトナシ、是亦魚屬ノ健康ヲ保持スルニ適當ナリトス、則チ森林繁茂セバ下流ノ魚類發育シ易キ所以ナリ、

魚類ハ天性靜ナル陰翳ヲ好ムモノ、如シ、試ニ一箇ノ木片ヲ取り、之ヲ池中ニ投ズレバ、魚類ハ必ズ其下ニ集ルニ非ズヤ、然レ、凡人畜船舶ノ水底ニ映スルアラハ驚テ其影ヲ隠スモノトス、故ニ綠陰ハ實ニ魚類ノ安樂居ナリト云フベシ、幽鬱タル沼池、森林間ノ河川ハ水屬ノ尤好愛スル所、海濱若シ蒼林相亘ルアラバ、近海ハ魚類ノ聚集シ易キ所以ナリトス、

又綠陰深キハ岸堤及ビ其樹根ニ棲息スル昆蟲多ク、直ニ魚類ノ好餌トナルノミナラズ、微風ノ吹キ來ルアラバ、枝梢ニ寄生スル昆蟲モ亦水中ニ落チ來リテ以テ、魚類ノ嗜好ニ適スベシ、是レ綠陰深キ水中ニ魚類ノ生活シ易キ一因ナリトス、是ニ由テ之ヲ見レバ、森林ハ亦漁業ノ大ニ保護セサルベカラス、殊ニ吾國ノ地

六十一

形タルヤ四面海ヲ回ラシ、懸灣屈折シ、突出或ハ斗入シ、爲メニ海岸線頗ル多ク、殆ン
ド七千五百里ニ達シ、且河川池沼モ亦少カラサルニヨリ、漁業ヲ以テ生活スル者頗
ル多シ、故ニ漁業保護ノ爲メニ森林保護スルノ必要ナル殆ンド他ニ其比ヲ見サル
ナリ、

試ニ目下本邦ニ於テ漁業ノ爲メ保存林ト定メラレタル森林ヲ舉レバ

區別	箇所	反別
官林		七〇一、
民林		一、六三四、
合計		八七六、
		四八〇、
		一、五七七、
		二、一一四、

第十一章 風致ノ粧飾

我帝國山水ノ秀麗ナル風光ノ明媚ナル渾圓球上特絶スル所實ニ世界ハ一大樂土
ナリトス、此秀麗ナル山水明媚ナル風光ハ能ク斯國民ノ氣風ヲ陶冶シ、世界ニ比類
ナキ審美心ヲ養ヒ、坤輿上他ニ見サル所ノ愛國心ヲ化成ス、美ナル哉日本國、吾人ハ

此洵美ナル江山ノ間ニ生レ、眼常ニ此風光ニ接シ、心毎ニ之ヲ賞ス、何ゾ夫レ樂シキ
ヤ、是レ大陸ニ棲息スル者ノ多ク享受スル能ハサル所、故ニ一タビ此國ニ遊ブノ外
客ヲシテ不覺低徊措ク能ハサラシム、吾人何ゾ舉テ此風景ノ保護ニカメズシテ可
ナランヤ、志賀重昂氏曾テ日本風景論ヲ著シ、日本風景ノ保護ヲ論スルヤ、曰ク、
此江山ノ洵美ナル、生植ノ多種ナル、是レ日本人ノ審美心ノ過去、現在、未來ニ涵養
スル原カタリ、此原カニシテ殘賊セラレンカ、日本未來ノ人文啓發ヲ殘賊スルト
同一般、而カモ近來人情離薄、只管目前ノ小利小功ニ汲々トシ、竟ニ遙遠ノ大事宏
圖ヲ遺却シ、或ハ森林ヲ濫伐シ、或ハ名木神木ヲ斬リ、或ハ花竹ヲ薪トナシ、或ハ古
城斷礎ヲ毀テ、或ハ道祖神ノ石碣ヲ橋梁ニ用ヒ、或ハ湖水ヲ涸渴シ、或ハ鶴ヲ捕獲
シ盡クシ、以テ日本ノ風景ヲ殘賊スル若干ゾ、且ツヤ各所舊跡ノ破壞ハ歴史觀念
ノ聯合ヲ破壞シ、國ヲ舉ゲテ赤裸々タラシメントス、日本ノ社會ハ、日本未來ノ人
文ヲ愈啓發セン爲メ、益日本風景ヲ保護セザルベカラズ、
ト實ニ然リ、殊ニ森林ノ伐採樹木ノ斫損ハ、風景ヲ破損スルノ尤モ甚シキモノナレ
バ、處々ヨリ常ニ之ヲ禁制セサルベカラズ、夫レ樹木ノ景色ヲ調ヘ、韻致ヲ添フルヤ

斑 一 林 山 本 日

頗ル大ニシテ、櫻ハ春ヲ峰ニ装ヒ、楓ハ秋ヲ谷ニ飾ル、松柏ノ蒼健高聳セル、檜柏ノ緑蔭暗然タル、山光風色ヲシテ自ラ清麗タラシメ、愈韻致アラシム、若シ夫レ山ニシテ樹木生ゼズバ、巖峙チ谷幽ナルモ、風色索莫トシテ見ルニ堪ヘズ、水ニシテ樹木ノ之ニ添ハラサレバ、島浮ビ流清キモ、毫モ風韻ノ見ルベキナシ、試ミニ見ヨ、瀬戸内ノ景、松島ノ勝、大小ノ島嶼、星羅相點接スルモ、島上松樹ノ翠ナク、赤裸々タラシメバ、何ゾ其秀麗タルヲ得ンヤ、舞子ノ濱、天橋ノ岬、雪ノ如キ白砂相亘タルモ、亭々タル青松ノ之ヲ粧フナクンバ、何ゾ其明媚タルヲ得ンヤ、

此ノ如キ勝區ニ於ケル森林ノ保護セサルベカラザルハ素ヨリ然リ、我國ノ神社、佛閣ヲ装フ所ノ森林ノ如キ尙他ニ保護ヲ要スベキ事由ノアルアリ、今夫レ何レノ村落ニ至ルモ、老杉古檜鬱蒼トシテ森林天ヲ蔽ヒ、人ヲシテ思ハズ敬崇ノ心ヲ起サシムルモノハ、是レ森林、アツテ而シテ神社佛閣ヲ靈アラシム、蓋シ老杉古檜アルガ爲メニ、何トナク、神々シク、大天大地ノ物凄キ狀景、神靈ノ威アツテ高キ狀景、四境ノ清クシテ濁ラザル狀景、生々蒼潤ノ意滿チテ、枯死穢汚ノ絶無ナル狀景、ハ髣髴トシテ眼前ニ浮ビ出ツルニ、由ルニ非ズヤ、此ノ如ク、社寺ノ森林ハ、日本人ヲシテ、神佛敬信

飾 粧 ノ 致 風 章 一 十 第

ハ念ヲ起サシムルコト實ニ多大ナリトス、故ニ此點ノミニテモ、又伐採ヲ禁セサルベカラズ、況ンヤ社寺ノ靈致ヲ粧ヒ、又一村ノ風致ヲ増スチヤ、今夫レ田野渺茫十里ノ外ニ立テ彼ハ何村ノ某神社ナリ、此ハ何町ノ某寺院ナリト、指示解得セシムル目標タルモ、亦社寺ノ森林ニ非ズヤ、此ノ如ク一村ノ風致ヲ増シ、一村ヨリ一郷ニ及ボシ、遂ニ一國ノ風致ヲ粧フモノト云ハザルベカラズ、故ニ一朝社寺ノ森林ヲ伐採スルアラシ乎、只ニ社寺ノ衰頽ヲ來スノミナランヤ、其地方ノ風致殘賊スル實ニ甚カラザルナリ、然ルニ近來殿堂ノ修繕ヲ名トシ、或ハ枯損木ヲ伐除クト稱シ、此等ノ森林ヲ荒廢セシメ、怙トシテ願ミサルニ至ツテハ、豈嘆スベキ至ナラズヤ、之ニ因テ之ヲ見レバ、日本ニ於テハ風致粧飾上森林ヲ保護スルノ必要ナル未ダ他ニ其比ヲ見サルナリ、

試ミニ目下本邦ニ於テ風致粧飾舊蹟保存ノ爲メ保存林ト定メラレシ森林ヲ舉グレバ次ノ如シ

區 別	
風 致 粧 飾	舊 蹟 保 存
簡 所 反 別	簡 所 反 別

官林	一九七二四	二二、四〇七		
民林	一九七二四	二二、四〇七		
合計	一九七二四	二二、四〇七		

六十六

第十二章 砂潮ノ防備

森林ハ暴風ノ爲メ飛揚スル砂ヲ防キ、又能ク海岸ノ怒潮ヲ防禦スルノ効用實ニ少カラズ、此作用タルヤ第一落葉苔蘚ヲ生成シテ土地ヲ被覆シ、且濕氣ヲ地中ニ保タシムルト、第二暴風ノ勢ヲ減殺スルトニ基クモノトス、故ニ此ル場所ニ現存スル森林ハ、其伐木ヲ禁ズベキハ勿論、放牧及ヒ落葉採取ヲモ止メザルベカラズ、且無立木地ニハ進ンデ造林スルコトナカメ、以テ飛砂ノ擴延ヲ防禦セザルベカラズ、佛國ノ如キハ現今ノ共和國トナリシ以來、飛砂地ニ造林セシコト七八萬町ニ及ビ、爲メニ從來廣漠タル不毛ノ砂地ヲシテ、現今ハ佛國中最森林ニ富メル地方ト稱セラル、ニ至レリ、吾國ニ於テモ、日本海ニ瀕スル北岸ノ冬期烈風砂石ヲ飛バシ、内地ノ田畑ヲ埋メ且潮水襲來ノ害ヲ被ル箇所頗ル多シ、往時藩吏或ハ老農ノ千辛萬苦以テ此地ニ

造林シ、遂ニ之ガ暴威ヲ防キ、今ヤ荒野變シテ良田トナリシ箇所亦少カラズ、今左ニ其一二例ヲ示シタルハ、讀者ヲシテ扞砂上造林ノ實効ト其困難トヲ覺ラシムルニアルノミ、

羽後國山本秋田河邊三郡類海ノ村落ハ、元來沙漠地ニシテ常ニ海風砂礫ヲ飛ハシ、人家耕地ヲ埋没シ、其害實ニ甚シカリシガ、粟田定之丞ナル者、秋田藩ノ郡方吟味役中、深ク之ヲ憂ヒ、飛砂扞止ノ爲メ松樹ヲ海濱ニ栽植センコトヲ村民ニ諭スト雖モ、村民等ハ地質ノ粗惡ト海風強烈ハ到底樹木ヲ成長セシメ難シト斷念シ、敢テ之ヲ用ヒザルヨリ憤然自費ヲ以テ造林スルコトニ決シ、山本郡大内田村ヲ第一着トシ、最初ハ茶藨數萬株ヲ潮除トシテ植ヘ、而シテ松苗ヲ栽ル毎ニ壤土ヲ其根ニ付シ、藁ヲ以テ之ヲ包ミ、數十萬本ヲ栽植シ、文化年中ヨリ已ニ十八ヶ年間、致々トシテ怠ラサリシガ、松林遂ニ繁殖シ、村民遂ニ飛砂ノ害ヲ免ル、ニ至リタルノミナラズ、從前得難キ薪料ヲ得ルニ至レリ、

羽後國飽海郡藤崎村官林ハ、南ハ最上河ニ沿ヒ、西ヨリ北ニ涉リ、海ニ突出シ、吹浦川ニ至テ盡ク、南北五里廿丁餘、東西十六丁、山勢高低ナク、蒼々タル松樹、恰モ屏風

六十八

チ以テ海陸ヲ界スルガ如シ、往昔ハ多少ノ樹木アリシモ、漸々濫伐シテ一時ハ不
 毛ノ地ト變シ、冬季ハ西風砂塵ヲ卷キ、晝尙晦冥、呎尺ヲ辨セズ、毎ニ行路ヲ絶チ、近
 村ノ耕地爲メニ埋没シ、且水路モ亦壅塞シ、其害實ニ見ルニ忍ヒザリシカバ、延享
 二年舊莊内藩士服部外右衛門行郡痛ク之ヲ慨嘆シ、飛砂防禦ノ策ヲ謀ルニ當リ
 佐藤藤藏奮テ此業ニ從事シ、先ツ全家此地ニ移住セリ、然ルニ日夜砂礫ヲ亂飛シ
 其甚タシキハ炊具悉ク砂ニ埋マリ、喫飯ニ苦ミシト度々、家眷大ニ之ヲ憂懼シ、酒
 田街ニ逃遁スルト十二回ニ及ブト雖モ、藤藏益々其志ヲ變ゼズ、該地ニ雜草、茱萸、合
 歡花等ヲ植付ルト再三再四、百折撓マズ、數十年ノ久シキヲ凌キ、同郡藤塚村外二
 十ヶ村ノ人民ヲ誘導シ、千辛萬苦遂ニ其目的ヲ達シ、松林鬱乎タルニ至レリ、
 飛砂防禦ノ困難ニシテ、先人ノ苦慮セシト此ノ如シ、誰カ其遺德ヲ追慕セズシテ可
 ナランヤ、誰カ紀念ノ松林ヲ愛護セズシテ可ナランヤ、
 已ニ成立セル此等ノ森林ノ保護スベキハ勿論ナリト雖モ、今尙砂丘相連リ、逐年其
 區域ヲ擴延スル場所亦少カラザルニ由リ、此ノ如キ地ニ向テハ大ニ造林ノ舉ナカ
 ルベカラズ之ヲ彼普佛諸國ニ比スレバ、其場所ハ狭小ナル同日ノ論ニ非ズト雖モ、

造林ノ必要ナル豈一歩ヲ讓ランヤ、
 試ミニ目下風潮除トシテ保存林ニ定メラレタル森林ヲ舉グレバ

區別	箇所	反別
官林	一、六四九	八、〇四四 <small>畝</small>
民林	一、三六四	三、八八
合計	三、〇一三	八、四三二

第十三章 其他森林之必要

我日本ニ於テハ水源涵養、土砂扞止、洪水防禦、招魚、風致、及飛砂防備ノ爲メ、特ニ多ク
 ノ森林ヲ要スルノミナラズ、又氣候ヲ調和シ、衛生ヲ補助シ、積雪ヲ防止シ、及ヒ廻船
 ノ目標ヲ設クルニモ、亦多少ノ森林ナカルベカラズ、次ニ各關係ヲ畧説セン、
 氣候調和、森林ノ存否ハ其近傍一定界限内ニ於ケル氣候ニ變化ヲ與フル物ニシ
 テ、其面積大ナルニ從ヒ、其影響愈顯著ナリトス、乞フ更ニ之ヲ細説セシメヨ、森林
 ニ射入シタル太陽ノ光線ハ樹冠ノタメニ妨ケラレ、地ニ温熱ヲ與フルト少シ、從

テ地ヨリ放散スル熱量モ亦少キニヨリ、林内ノ空氣ハ常ニ外野ヨリ寒冷ナリトス、殊ニ葉面ニ於ケル蒸發作用モ盛ナルモノナレバ、樹冠附近ノ空氣ハタメニ冷却セラレ、其比重ヲ増スニヨリ枝朶ヲ通シテ下降シ、林内ノ空氣ヲシテ愈寒冷ナラシム、此作用タルヤ冬季ニ於テ著シカラザルモ、炎威赫々タル夏季ニ於テ尤モ甚シトス、普國ニ於ケル最近十一年ノ觀測ニヨレバ、最酷熱ナル七月ニ於テ、林内ハ外野ヨリ寒冷ナルヲ平均攝氏ノ三度四分ノ一乃至四度四分ノ一ナリト云フ、森林ノ内部已ニ此ノ如ク寒冷ナルルハ、風ノ作用ニヨリ其附近ノ氣候ヲシテ遂ニ寒冷ナラシムルヤ明ナリ、故ニ大面積ノ森林ヲ新設スルルハ、其地方ハ夏熱ヲ三四度節減スルノ實効アルベキノ理ナリトス、之ヲ實際ニ徵セント欲セバ、乞フ同緯度同一海面高ニアル甲乙兩地ニ於ケル左ノ比較ヲ見ヨ、

一 裏海ノ西岸森林ニ富メル地方ハ、其東岸ニ於ケル沙漠地ヨリ、七月ノ平均温度四度寒冷ナリ、

二 魯國ノ「ボチー」ハ森林地方ナルガ、森林ニ乏シキチフリス及ビ「アム、ダルヤ」地方ニ比シ、七月平均温度四度許低シ

三、アツサン「シルヘット」ナル印度ノ大森林地方ハ、四月乃至六月マデノ間、同緯度ノ他所ヨリ四度乃至六度冷カナリ、

森林ノ空氣ヲ寒冷ニスル作用タルヤ、夏日ニ於テ尤顯著ナリト雖モ、冬日ニアツテハ晝間短クシテ且陽光ヲ受クルト少ク、葉面ノ蒸發殆ンド無キニヨリ、森林内外ニ於ケル温度ノ差實ニ少ク、却テ寒風ヲ防止シ、又夜間ノ脱熱ヲ弱ムルニ因ル乎、冬季ニ於テハ外野ヨリ寧ロ温暖ナリ、普國ニ於ケル最近十一年ノ觀測ニ由レバ、冬季ニ於ケル森林ノ空氣ハ、一五メートルノ高ニ在テ外野ヨリ温暖ナルト一、度半乃至三度ニシテ、樹冠附近ハ尙甚シト之ニ由テ之ヲ見レバ、森林ハ能ク夏時ハ酷熱ヲ節シ、冬季ノ嚴寒ヲ制スルノ大效アルヤ明ナリ、

以上陳ベタル晝間ノ現象ナリト雖モ、夜分ハ全ク其趣ヲ異ニス、即チ夜間ハ晝間ニ受納シタル温熱ヲ地面ヨリ放散スルモノナルニ、森林ハ樹木ヲ以テ被覆セラレ、ニヨリ、其放散ヲ妨ケラレ、且晝間ニ温メラレタル樹體ヨリモ、亦熱ヲ傳フルニヨリ、林内ノ空氣ハ常ニ外野ヨリ温暖ナリ、然レ已ニ太陽ノ昇ルニ至レバ、陰影作用アリテ温度ヲ減少スルガ故ニ却テ外野ヨリ寒冷トナリ、其差次第ニ増加

シ、遂ニ最大トナリ、日暮ニ至ルニ從ヒ又其差ヲ減シ、遂ニ夜分ニ入レバ却テ温暖トナルニ至ル、然ラバ則チ森林ハ一日中ニ於テモ亦其温度ノ極端ヲ節スルモノト云ハサルベカラズ、
此ノ如ク森林ガ寒暑ノ極端ヲ節約スルノ作用タルヤ、植物ノ生育上及ビ人類ノ衛生上尤必要ナルハ、喋々ヲ要セサル也、
且森林ハ濕氣ヲ豊饒ニシ、雨量ヲ多カラシムルハ、大効アリ、今次ニ其理由ヲ説明セン、

凡ソ空氣中ニ含ミ得ベキ水蒸氣ノ量ハ、其温度ニヨリ一定ノ限界アリ、此限界ヲ越ユル片ハ、餘分ノ水蒸氣ハ之ヲ空中ニ含有スル能ハズ、雨露トナリ凝結スルモノトス、理學上此限界ヲ名ケテ水蒸氣ノ飽和點ト稱ス、此飽和點ハ空氣ノ温度低キニ從ヒ愈小ナルモノトス、例ヘバ攝氏十五度ノ温ニ於テ含ミ得ベキ水蒸氣ノ最少量(即チ飽和點)ハ一〇〇〇グラムニ付キ一〇、九グラムナルモ、十一度ノ温ニ下レバ一〇〇〇グラムニ付キ八、三グラムトナルガ如シ、故ニ若シ空氣ノ温度低變スル片ハ、水蒸氣ノ實量ハ變セザルモ、其空氣ハ飽和點ニ近キタルモノトス、已

ニ飽和點ニ近キタルモノナルトキハ、忽チ飽和點ニ達シ、剩餘ノ水蒸氣ハ雨トナリ又露トナルベシ、依テ空氣ノ温度低下スルニ從ヒ比較的濕潤シタルモノト云ハザルベカラズ、已ニ述べタル如ク、森林内空氣ノ温度ハ、常ニ外野ヨリ低キヲ以テ、タトヒ、水蒸氣ノ實量同一ナルモ、尙外野ヨリ濕潤ナルノ理ナリ、況ンヤ葉面ノ蒸發作用ハ、常ニ多量ノ濕分ヲ供給シテ止マサルオヤ、從來ノ經驗ニ由レバ、森林内ハ外野ヨリ對比湿度ノ多キヲ全年ノ平均ニ由ルモ、尙百分ノ三ヨリ多キハ百分ノ十二ニ至レルヲ知ル、豈亦多濕ナラズヤ、
故ニ若シ暖濕ナル空氣、森林ニ向テ吹來ル片ハ、森林内ノ寒冷ナル空氣ニ逢ヒ、忽チ其温度ヲ低減シ、飽和點ニ近カシメ、其空氣已ニ飽和點ニ近ツキタルモノナル片ハ、忽チ飽和點ニ達シ、雨滴トナリテ下降シ、是レ森林ハ雨量ヲ増加スル所以ナリ、彼ノ南印度ノ中央ニテ從來開墾シタル六万平方里ノ地ニ、千八百六十七年已來再造林シタルガ爲メ、平均一ケ年一割三分ノ雨量ヲ増加シタルガ如キ、或ハ魯國ノウエリコアナドルナル高原ニ於テ、千八百三十四年已來三千、ヘクタールノ造林ヲ施セシ爲メ、著シク夏時ノ雨量ヲ増シ、從來蒙リタル旱害ヲ全ク免ル、

ニ至リ、小麥ノ收穫ヲ増シタルガ如キ實例ハ枚擧ニ遑アラズ、
 其他森林ハ暴風ノ猛力ニ抵抗シテ其勢ヲ挫キ、又空中ニ於ケル電氣ノ蓄積ヲ易
 カラシメテ雷雨ヲ招キ易ク、林内ヨリ濕潤ナル空氣ヲ出シテ近隣ニ結露ヲ多カ
 ラシムルガ如ク其氣候上ニ及ボス功德又大ナリト云フベシ、
 衛生補助森林ハ國民衛生上更ニ一大効用ノ存スルヲ忘ルベカラズ左ニ、ドクト
 ル林學士本多靜六君ノ曾テ山林會ニ寄セラレタル森林ト衛生ノ關係ナル論文
 ナ假リテ之ヲ説明セン、

綠陰水ノ如ク風微ニ氣清キ林間、杖ヲ曳クノ快、秋高ク霜落キ、林樹衣ヲ脱スル
 ノ下、銃ヲ提ケテ麋鹿ヲ逐フノ快、固ヨリ天公貴人ノ健康ヲ保スル唯一ノ良法
 ナリト雖トモ、更ニ森林カ一般國民ノ衛生上ニ與フル一大効用ノアルヲ知ラ
 サル可ラス、彼ノ印度ノ森林ヨリ虎列刺病ノ傳染ヲ防キ、伊太利ノ地方熱病ノ
 森林栽植ノ爲メニ全ク其毒ヲ絶スルニ至リシカ如キ其一例ナリ、
 蓋シ森林ノ衛生上ニ於ケル關係ハ主トシテ林内ノ空氣カ清淨ニシテ塵埃ヲ
 混セス、衛生上有益ナル、後爾撒謨質及ヒ芳香質ノ性分ニ富ミ、吾人ノ生活ニ有

害ナル瓦斯類ヲ含有スル極テ少キニヨルナリ、

抑モ森林ハ日間空氣中ノ炭酸瓦斯ヲ分解シテ其炭素ヲ攝取シ酸素ヲ遊離ス
 而シテ一町歩ノ森林ハ其生長季間即チ凡ソ百五十日間ニ凡ソ五千五百九十
 六立方メートルノ炭酸瓦斯ヲ分解シ、殆ト之ト同容積ノ酸素ヲ遊離ス、即チ森
 林ハ一日間ニ三十七立方メートルノ酸素ヲ遊離スルノ理ナルカ故ニ、古來
 森林ハ空氣中ニ含有スル酸素ヲ多量ナラシムルノ効ヲ稱スルモノ多カリキ
 然レトモ一町歩ノ面積上ニ存スル空氣ノ量ハ、之ヲ僅ニ二十メートルノ高サ
 トスルモ、尙二十萬立方メートルノ大量ナルカ故ニ、此内僅カ三十七立方メ
 ートルノ酸素ヲ混和スルモ、其作用著キモノニアラサルヲ知ルヘシ、況ンヤ林
 内ノ空氣モ常ニ林外ノ空氣ト平均スルノ作用アルオヤ、況ンヤ林内ノ動物ハ
 樹木ニ反シテ皆酸素ヲ攝取シ炭酸瓦斯ヲ吐出スルノ作用ヲナシ、人間一人ノ
 一年間ニ呼吸スル酸素ノ量ハ宛モ三畝歩ノ森林カ産出スルモノニ等キモ、百
 頭ノ羊群ノ要スル酸素ノ量ハ一町歩ノ森林カ産出スル所ノモノヨリ更ニ多
 量ナルニ於テオヤ、森林ノ内外ニヨリテ酸素ノ量ニ多少アルコトハ未ダ容易

ニ知ル可ラサルヘシ、學者未タ林内ノ空氣ニ酸素ノ多量ナルヲ定量スル能ハサル宜ナリト云フヘシ、

此故ニ森林カ酸素ヲ多量ナラシムルカ爲メニ衛生上ニ有益ナリト云フコトハ、未タ容易ニ斷言スル能ハサル所ナルヘシ、然レ共林内ノ空氣カ常ニ新鮮清淨ニシテ、有害ナル瓦斯體并ニ不良ノ臭氣ヲ有セサルカ爲メニ衛生上ニ有益ナルコトハ、何人モ爭フ可ラサルノ事實ナリトス、即チ林内ノ空氣ハ彼ノ市内空氣ノ如ク、健康上有害ナル烟煤并ニ塵芥ヲ混スルコトナク、又傳染病ノバクテリアヲ含有スルコトナシ、此點ニ於テハ宛モ彼ノ海上ノ空氣ト同様ナルモ、林内ノ空氣ハ尙且ツ多量ノ阿巽ヲ含ム、阿巽ノ衛生上ニ於ケル効用ハ、昔時人ノ稱セシ如ク、總テノバクテリアヲ滅殺シ盡スト能ハサルモノトスルモ、其空氣ヲ清淨ニナスノ効アル固ヨリ疑フ可キニ非ラス、況ンヤ「ピンツ」(Pins)氏ノ説ニハ、阿巽ニ富メル空氣ハ人間ノ健康ニ最モ有益ナル睡眠ヲ催フシ、チセライン(Cyslein)氏ノ實驗ニヨレハ、其ヨリ遺傳的の神經病ニ大効アルオヤ、總テノ病人ハ林内ニ於テ著ク早ク快癒スルノ事實アル亦理ナキニアラスト云フヘシ

假令今阿巽ノ關係ヲ度外視スルモ、其新鮮清淨ナル空氣ガ吾人ノ健康上ニ與フルノ効極テ大ナルヤ必セリ、實ニ吾人カ二十四時間ニ呼吸スル空氣ノ量ハ大略九千「リットル」ノ大量ナルカ故ニ、空氣中ニ混スル汚物ノ割合ハ如何ニ多量ナラストスルモ、日々體中ニ堆積スル所ノモノハ非常ニ多量ノモノナルヘシ、林内ニ呼吸スル人ノ如何ニ幸福ナルヘキゾ、

又林内ノ土地ハ「バクテリア」ノ繁殖ヲ妨グルノ効アリ、林地ハ元來植物質ニ富ムト雖モ、彼ノ農地又ハ市街地ノ如ク、動物質ノ腐敗セルモノ少キヲ以テ、バクテリアノ繁殖ニ適セル蛋白質ニ缺乏シ、加里磷酸ノ量モ亦割合ニ少シ、加之林地ハ普通酸性ナルヲ以テ、中性又ハ弱キアルカリ性ヲ有スル所ノ農地ニ比スレバ、大ニ分裂黴菌(Spallpils)ノ繁殖ニ不當ナルベシ、

其他森林ヨリ流レタル水ハ汚物ヲ混スルコト少ク、清淨ニシテ養分多キ飲料タラシメ、吾人ノ衛生ヲ補助スル實ニ少カラサルナリ、山林ノ人身衛生上ニ關係スル此ノ如シ、讀者常ニ云ハズ、ヤ、人身ノ健康ハ、福利ノ基ナリト、蓋シ清潔ナル空氣ヲ呼吸シ、清淨ナル水ヲ飲ミ、健全無病タラントシテ望

マバ、植林ノ道亦一ノ良法ナラズヤ、
 額雪防止森林ハ亦額雪ヲ防クノ大効アリ、樹木ナキ高山ノ山腹ニ堆積セル雪ハ
 春季温暖ノ季ニ至リ、地面ニ接スル部分先ツ融解スルヤ、之ニ支持セラレタル全
 腹ノ堆雪ヲ一時ニ墜落シ、又他ノ機會ニヨリ墜落セル雪片又ハ雪塊ノ回轉ニヨ
 リ巨大ノ雪團ヲ成シテ轉落シ、入畜ハ勿論家屋ノ埋没セラル、ト往々見ル所ナ
 リ、然レトモ此山腹ニ森林ノアルアラバ、其雪ノ大部分ハ、枝葉根幹ニ支ヘラル、
 ガ故ニ、洪シテ額雪ノ害ヲ生スルコトナシ、依テ雪國地方ニ於テハ道路又ハ人家ニ
 近キ急峻ノ山腹ニハ、須ラク額雪防止林ヲ備ヘザルベガラス、
 廻船目標洋々タル海上ヲ廻行スル船舶ノ常ニ目標トナスモノハ陸地ノ山岳ナ
 リ、殊ニ樹林ノ其頂嶺ニ鬱茂タルアラバ、遠ク之ヲ望見スルコトヲ得ルニヨリ實ニ
 適當ナル目標ナリトス、蓋シ我國ハ環海ノ島國ナルヲ以テ、廻船ノ目標トシテ必
 要ナル森林亦少カラサルベシ、
 其他田圃家屋ノ爲メニ設クベキ防風林、堤塘ノ固定ニ備フル堤防林、行人ニ便ナル
 道路、並木、境界標木等樹木ヲ仕ツベキ場所ハ殆ンド枚擧ニ遑アラズ、

試ミニ本邦ニ於テ防風額雪止其他ノ爲メ保存林ト定メラレタル森林ヲ擧グレバ
 次ノ如シ

種類	官 林		民 林		計	
	箇所	反別	箇所	反別	箇所	反別
防風	五二四	一六四五	二〇七	九八	七三一	一七四三
額雪止	三九	二三八	五一六	六九三	五五五	九三一
航行目標	一〇九	五七三六	一一	一四〇	一二〇	五八七六
道路並木	四一	二七	五		四六	二七
境界目標	一七	四五			一七	四五
風雪暑除	二	一			二	一

第十四章 林業ノ利益

本邦ニ於ケル氣候ノ温和ニシテ樹木ノ生育ニ適スルコト、前述ノ如クソレ切ナルニ
 ヨリ、其生長ノ良好ニシテ材積ヲ生産スルコトノ饒多ナル、素ヨリ其所ナリト雖モ、吉
 野ニ於ケル杉林之ヲ四十五年ニ伐採スレバ一ヘクタール一町廿五歩ニ付六百六

十立方メートル(乃千九百七十六尺³)ノ材積ヲ得、年々平均一四、六六立方メートルヲ生長スルノ割合ナルニ至ツテハ、豈亦夥多ナラスヤ、又東京附近ニ於ケル四ツ谷丸太ヲ産スル杉林ノ之ヲ三十年乃至三十五年ニ伐採スレバ、年々一五、〇三立方メートルヲ生長スルヲ見ルニ至ツテハ、何ゾ其レ驚カザルヲ得ンヤ、此ハ如キ多量ノ生産力ハ、歐洲森林家ノ決テ夢想シ及バサル所、試ミニ獨逸ニ於ケル各樹種ニ付キ最上等ノ地位ニ於テ諸學者ノ調査シタル處ト之ヲ比較セヨ、

樹種	調査人名	平均生長ノ尤多キ時	平均生長量
杉林	望月林學士	四十五年	一四、六六
杉林	故原林學士	三十年乃至三十五年	一五、〇三
唐檜	バウルク氏	四十五年乃至四十八年	一〇、六
同	クンツエ氏	五十年	一三、二
同	ロイライ氏	六十年乃至六十五年	一二、四
松	ワイゼ氏	三十年乃至三十五年	一一、九
同	クンツエ氏	三十五年	一〇、九

我國ニ於ケル森林ノ生長頗ル速ニシテ其量多キヲ夫レ此ノ如シ、從テ林業ノ經營其宜シキヲ得バ、營業利益ノ多キヲ亦他ニ多ク見サル所ナリ、乞フ林學士諸氏ノ計算シタル結果ヲ見ヨ、

山毛櫸	バウルク氏	八十二年乃至八十三年	七、三
白 樺	ロイライ氏	百年	一〇、七

望月林學士ノ調査ニヨレバ、吉野ノ杉林ノ收益ハ、百三十年ノ伐期トシ、利率ヲ五朱トシテ計算スレバ、一町歩ニ對シ六千五百四十六圓餘ノ純益アリ、(吉野林業論) 村田林學士ノ調査ニヨレバ、吉野森林ノ利益ハ、百三十年ヲ伐期ト定メ、其資本ヲ四朱半ノ利率ニ回シタル上尙五千二百五十一圓餘ノ純益アリ、故ニ精密ニ打算セバ概年四朱九厘ニ當ルベシ(大和國吉野林業一斑)

故原林學士ノ調査ニヨレバ、四ツ谷丸太ノ杉林ハ、其資本ヲ五朱ノ營業利率ニ運轉シテ尙二十九圓ノ純利アリ、(四ツ谷丸太) 田中林學士ノ調査ニヨレバ、栃木縣下都賀郡ニ於ケル櫟林ハ、五回伐採(一初等ノ地、初回ハ、十二年ニ伐リ、二年後ニ伐リ、十二年毎ニ伐ル等ノ地)ヲ經テ更ニ新植スルモノト定メ、一等

地ハ其利六朱二厘六毛ニ同ハリ五等地ハ五朱九厘九毛ニ運轉セラル(櫟林ノ收額)

之ニ依テ見レバ本邦ノ林業ハ少クモ五六朱ノ利益アルヲ知ル若シ吉野ハ杉林ハ八九十年ニ於テ伐採センカ其利益更ニ多キハ勿論ニシテ雜木林ノ如キハ運搬ノ便ナル所ニアツテハ間々七八朱以上ノ利率ニ回ハルハ疑フベカラサル所本邦森林ノ利益豈又大ナラズヤ之ヲ彼ノ三四朱ニ運轉シテ尙得々タル歐洲ニ比スレバ其差幾何ゾヤ況ンヤ木材ハ月々缺乏シ材價年々騰貴ノ傾向アルオヤ今後本邦林業ノ望油然トシテ禁スベカラザルモノアリ然レハ我邦ニ於テハ生産工業彼ノ如ク發達セズ興スベキ事業頗ル夥シク資本ノ需要ソレ切ナルヲ以テ一般ノ利率亦高シ從テ資本ヲ五六朱ニ運轉スルガ如キハ或ハ一般ニ満足セラレサル所ナラン然レハ危險少キ安全ナル事業ニ於テハ低利ナルモ誰ガ満足セザルモノアランヤ林業ノ如キハ即其一ナリ故ニ林業ニ於テハ資本ヲ五六朱ニ運轉スルヲ得バ大ニ満足セサルベカラズ況ンヤ材價ノ騰貴ハ愈々林利ヲ増加スル見込アルオヤ試ニ我農業ヲ見ヨ其資本ヲ五六朱以上ニ運轉セラル處ソレ幾何カアル一反ニ

日本山林一斑

第四十章 林業ノ利益

付二三百圓ヲ値スル農田ヲ有シ僅々壹石五斗乃至二石ノ小作米ヲ收納セバ其利率果シ幾何ゾヤ五六朱ニタモ回ラサルハ精算ヲ要セサルナリタトヒ稀ニハ七八朱已上ノ收穫アル年ナキニ非サルモ數年毎ニ或ハ水害ヲ蒙リ又ハ旱損ヲ受ケ毫モ其收入ナキ年ヲ來スオヤ之ヲ平均セバ恐ラクハ五六朱已上ニ出デサルベシ然ルモ尙耕地ヲ有シ安ンジテ農業ヲナスモノアルハ蓋シ他ニ種々ノ原因アリトハ云ヘ財産トシテ鞏固ニ事業トシテ稍安全ナルニ由ラズシバ非サルナリ然レハ財産トシテ鞏固ナル豈田畑ニ限ランヤ事業トシテ安固ナルモノ何ゾ耕地ニ限ランヤ山林ハ更ニ一層安固ナルモノニ非ズヤ況ンヤ勞力ト監督ヲ要スルヲ少ク爲メニ事業爲シ易ク且快樂多キニ於テヤ故ニタトヒ低利ナルモ安ンジテ經營スベキ業ナリトス乞フ更ニ之ヲ細說セン、
林業ハ農業ニ比スレバ危險ノ度實ニ少シ即チ彼ノ農業ニ於テ尤モ恐ルベキ水損及ビ旱害ノ如キハ林業ニ於テハ殆ンド見サル所虫害及ビ風災ハ稍恐ルベキモ未ダ農業ノ如ク甚シカラズ而モ造林ノ方法ニヨリ之ヲ豫防シ得ベシ尤モ防キ難キハ盜伐ニノ又尤恐ルベキハ火災ナリトス然レハ森林法已ニ發布セラレ一ハ取締

日本山林一斑

ノ道既ニ付キタレバ、他ニ經林上注意スルアラバ亦恐ルニ足ラサルナリ、且此等災害ト雖モ、其面積ノ大ナルニ比スレハ、甚ダ僅少ニシテ通例種々ノ樹種ト區々ノ林相ヲ有スルニヨリ一部ニ災害アルモ、他部ニ及バザルハ必然、故ニ結局一部ニ過ザルヘシ、林業何ゾ夫レ、安全ナルヤ、故ニ獨逸ノ如キハ保險ノ事業窓硝子及ビ家具ニ及ブアルモ、山林ヲ保險スルノ少キハ、蓋シ其危險少キニ由ラズンバ非サルナリ、山林モ亦一ノ土地ナリ、故ニ賣買進退ノ稍難キハ農地ト異ナラザルモ、林業ハ更ニ一ノ特性ヲ有シ、所有主ヲシテ其所有權ヲ放ツト難カラシム、若シ夫レ一旦之ニ植林ヲ施セバ、少クモ十數年多キハ百數十年ヲ待タサ、レバ之ヲ收穫スル難シ、強テ其間ニ伐木セントセバ、伐木セラレザルニ非サルモ、其所得實ニ少シ、故ニ一旦資テ之ニ投スレハ、長年月ヲ待タサレバ之ヲ回復スル能ハズ、而モ日夜ニ殖利シテ巨萬ノ額ニ至ルハ、恰モ長期ノ定期預金ニ異ナラズ、故ニ自ラ之ヲ所有スルモ、又タトヒ子孫ニ讓與スルモ容易ニ離散スルノ患少シ、況ンヤ自ラ植付シ樹木ノ漸次ニ肥大ナルヲ目撃セバ、人情容易ニ伐木シ得ザルニ至ルオヤ、從來山林ニ富ミタル家ノ破産シタル實例ナキハ、蓋シ故ナキニ非ザルナリ、且本邦ノ如キ地狀ニアリテハ、大面

第四十章 林業ノ利益

積ノ農業ハ到底行フ能ハサル所、而モ自作ヲ行ハントセバ居所近傍ニ限り之ヲ施シ得ベキノミ、遠隔ノ地ニ於テハ到底小作ヲナサシメサルヘカラス、然ルニ世ノ進ムニ從ヒ小作人トノ關係愈煩累ニ至リ年々小作米徵收ノ困難ナルハ地主ノ常ニ苦慮スル所ナリ、然レモ林業ニアリテハ勞力ト監督ヲ要スルト少キニヨリ、遠隔ノ地ニ於テモ尙能ク自營シ得ベキノミナラズ、却テ小作ヲ不利トスルモノ、如シ、而モ面積大ナルニ從ヒ事業愈々便益ナルオヤ、是レ近來大資本家ノ山林ニ注目スルモノアルニ至リタル所以ナル乎、

其他造林ニハ一種ノ快樂アルアリ、植付ノ際僅カ尺余ニ過ギザル苗木モ、之ヲ保護シ之ヲ培養セバ、日夜ニ生長シ直ニ人肩ニ達シ、忽ニ鬱々地ヲ被ヒ、又遂ニ蓋々天ヲ衝クノ大木トナリ、伐ツテ棟梁トナシ、削シテ船艦トナルニ至ルベシ、其間時々林間ニ歩ヲ運ビ自ラ之ヲ見之ヲ測ル其愉快實ニ他人ノ知ル能ハザルモノアリ、森林ハ財産トシテ鞏固ニ事業トシテ安固ナルト前述ノ如ク、大仕掛ニナシ易クシテ且一種ノ愉快アルト此ノ如シ、利益タトヒ低キモ、豈經營セズシテ可ナランヤ、況ンヤ其利益少カラズ、而モ益々増加セントスル傾アルオヤ、

日本山林一斑

本邦ノ氣候タルヤ、温和ニシテ、濕氣ニ富ミ、雨量ニ豐ニ、樹木ノ生長ニ、恰適セルハ、ミナラズ、樹種多クシテ、殊ニ、良種ニ富ミ、山岳多クシテ、天然の林地廣キ、且國民ノ天性、樹木ヲ愛スルノ深キ等、其林業ニ好適セルヲ、地球上殆ンド見サル所實ニ天賦ノ森林國ナリト謂ッベシ。

我國民ガ習慣上、木材ヲ需用スルノ多量ナル他ニ、其比ヲ見ズ、而シテ、人口ノ増殖ト、工業ノ進歩ハ、益々其需用ヲ多カラシム、然ラバ、常ニ之ヲ供給シテ、不足ナカラシメ、シヨハ、少クモ千二三百萬町ノ森林(施業林)ヲ常備セサルベカラズ、加之我國ニ於テハ、特ニ米作ヲ資ケ水力ヲ利用センガ爲メニ、水源涵養林ヲ要シ、地勢氣候上土石崩潰シ易ク洪水頻ニ至ルニヨリ、土砂扞止林及洪水豫防林ヲ要ス、其他風致ヲ裝飾シ、漁業保護ニ砂潮ヲ防備スル等、國土保安ノ目的ニ供スベキ多ク、森林(保安林)ナルベカラズ、故ニ國民ハ森林養成ノ天職ヲ有スルモノト謂ッベシ。

吾人ハ斯國ニ生レ、斯天職ヲ有ス、何ゾ舉ツテ森林ノ養成ト保護ニカメズシテ可ナ

第十五章 結論

ランヤ、然ルニ森林教育未ダ洽カラズ、山林思想尙一般ニ起ラズ、斯國ヲ忘レ、斯職ヲ知ラサルコトハ、恰モ越人ガ秦人ノ肥瘠ヲ見ルガ如キハ、抑モ亦何タル事ゾ、今ヤ我國ニ重要ナル而モ一般ニ大關係アル森林法ノ已ニ發布セラレ本年一月ヨリ施行セラル、アルモ、其何タルヲ注意セサルモノ多キニ至ツテハ、豈浩嘆ニ堪ユヘケンヤ、故ニ予ハ終リニ臨ミ森林法ノ三大綱ヲ掲ケ置カン、三大綱トハ何ゾヤ、曰ク營林ノ監督、曰ク保安林ノ設定、曰ク森林刑罰是ナリ。

營林ノ監督 抑モ森林ノ盛衰ハ國民ノ經濟ニ關係シ、國家ノ經濟ニ影響スルコト少カラザルニヨリ、之ヲ己人ノ自由ニ放任シ施業セシムヘキモノニ非ズ、故ニ之ニ干涉シ之ヲ束縛シテ以テ森林ノ荒廢ヲ防ガザルベカラズ、是營林ノ監督ノ必要ナル所以ナリ。

保安林ノ設置 保安ノ性質ヲ具フル山林ハ、其所有ノ官民タルヲ問ハズ之ガ伐採ヲ制限シ、時ニ斫伐ヲ禁止スベキハ、國家的必要ナルヲ已ニ述ベタルガ如シ、故ニ保安林ノ資格施業制限、及び之ガ設定ノ手續ハ之ヲ森林法ニ規定セザルベカラサル所以也。

〔森林刑罰〕 森林養成ノ必要ナルヲ已ニ述ベタルガ如シ、然レモ之ヲ養成スルニ當リ素山林ハ深山僻遠ノ地ニ其位置ヲ定メ、白晝ト雖モ人ノ觸目スルナシ、故ニ盜伐火災等ノ害ニ懼リ易シ、國家豈特ニ之ガ所有權ヲ保護セズシテ可ナランヤ、故ニ一般刑法ノアルアルモ特ニ刑罰ヲ定メタル所以ナリ、尙詳細ニ森林法ヲ講究セント欲セバ、本著熟讀ノ上、更ニ之ヲ緝ケ、法意自ラ明ナラシム

附 錄 現 行 森 林 法 規

森 林 法

（明治三十年四月六日
法律第四十六號）

第一章 總 則

第一條 此ノ法律ニ於テ森林ト稱スルハ御料林、國有林、部分林、公有林、社寺林及私有林ヲ謂フ

第二條 原野、山岳、其ノ他ノ土地ニシテ第八條第一乃至第五ニ該當スルモノハ森林ニ準シテ此ノ法律ヲ適用ス

第二章 營 林 ノ 監 督

第三條 公有林及社寺林ニシテ其ノ經濟ノ保續ヲ損シ又ハ荒廢スルノ虞アルトキハ主務大臣ニ於テ營林ノ方法ヲ指定スヘシ

私有林ニシテ荒廢ノ虞アルトキハ主務大臣ニ於テ營林ノ方法ヲ指定スルコトヲ得

日 本 山 林 一 斑

第四條 前條指定ノ方法ニ背キ伐木ヲ爲シタル者ニハ主務大臣ハ其ノ伐採ヲ停止シ伐木跡地ニ造林ヲ命スルコトヲ得

第五條 前條ノ造林ヲ怠ル者アルトキハ政府ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ費用ヲ徵收シ又ハ其ノ造林ニ係ル部分ヲ部分林ト爲スコトヲ得

第六條 森林ヲ開墾セムトスル者ハ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第七條 國土保安ニ危害ノ虞アリト認ムルトキハ主務大臣ハ豫メ其ノ箇所ヲ指定シ森林ノ開墾ヲ禁止スルコトヲ得

第三章 保安林

第八條 森林ニシテ左ニ列記スル箇所ニ在ルモノハ保安林ニ編入スルコトヲ得

- 一 土砂壞崩流出ノ防備ニ必要ナル箇所
- 二 飛砂ノ防備ニ必要ナル箇所
- 三 水害、風害、潮害ノ防備ニ必要ナル箇所
- 四 積雪、墜石ノ危険ヲ防止スルニ必要ナル箇所
- 五 水源ノ涵養ニ必要ナル箇所

森

林

法

六 魚附ニ必要ナル箇所

七 航行ノ目標ニ必要ナル箇所

八 公衆ノ衛生ニ必要ナル箇所

九 社寺、名所又ハ舊跡ノ風致ニ必要ナル箇所

第九條 保安林ハ編入ノ原因消滅シ又ハ公益上特別ノ事由生シタルトキハ之ヲ解除スルコトヲ得

第十條 保安林ノ編入解除ハ府縣郡市町村其ノ他直接ノ利害ヲ有スル者ヨリ府縣知事ニ申請スルコトヲ得

第十一條 府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ必要ト認メ又ハ前條ノ申請ヲ受ケタルトキハ之ヲ地方森林會ノ會議ニ付スヘシ

第十二條 保安林ノ編入解除ヲ地方森林會ノ會議ニ付セムトスルトキハ開會三十日以前ニ府縣公報ヲ以テ告示シ其ノ森林ノ所有者並大林區署土木監督署ニ

其ノ旨ヲ通知シ且所在市町村役場ニ揭示スヘシ

日本山林一斑

第十三條 保安林ニ編入ノ爲メ地方森林會ノ會議ニ付セムトスル森林ハ前條告示ノ日ヨリ決定ノ日マテ其ノ立木ノ伐採、土石切芝ノ採取、樹根ノ採掘及開墾ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條 保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ異議アルトキハ第十二條ノ告示ノ日ヨリ二十五日以内ニ府縣知事ヲ經テ意見書ヲ地方森林會ニ提出スルコトヲ得

第十五條 府縣知事ハ地方森林會ノ答申書ニ意見ヲ付シ關係書類ヲ添ヘ之ヲ主務大臣ニ具申スヘシ

第十六條 保安林ノ編入解除ハ地方森林會ノ議決ヲ經テ主務大臣之ヲ決定ス

第十七條 保安林ノ編入解除ハ官報及府縣公報ヲ以テ告示シ且其ノ森林ノ所有者ニ通達スヘシ

第十八條 保安林ノ編入解除ニ直接ノ利害ヲ有スル者其ノ編入解除ニ關スル處分ニ不服アルトキハ前條ノ告示若ハ通達ヲ受ケタル日ヨリ九十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 保安林ニ於テハ皆伐及開墾ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 府縣知事ノ許可ヲ得ルニ非サレハ保安林ニ於テ土石切芝ノ採取、樹根ノ採掘又ハ牛馬ノ放牧ヲ爲スコトヲ得ス

第二十一條 主務大臣ハ必要アリト認ムルトキハ保安林ノ伐木ヲ禁止又ハ制限スルコトヲ得

第二十二條 主務大臣ハ保安林ニ關シ其ノ森林ノ所有者ニ營林及保護ノ方法ヲ指定シ且其ノ使用收益ヲ制限スルコトヲ得

第二十三條 主務大臣ハ保安林又ハ開墾禁止ノ森林ヲ開墾シタル者ニ對シ復舊ノ造林ヲ命スルコトヲ得

第二十四條 前條ノ造林ヲ施行セス又ハ第二十二條ニ依リ指命シタル事項ヲ實施セサルトキハ政府ニ於テ之ヲ行ヒ其ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得

第二十五條 政府ニ於テ保安林ヲ買上ケムトスルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第二十六條 保安林ニ編入セラレタル爲損害ヲ蒙リタル森林所有者ハ其ノ伐木ヲ禁止セラレタル場合ニ於ケル直接ノ損害ニ限り補償ヲ求ムルコトヲ得但シ

森林法

日 本 山 林 一 斑

御料林、國有林ニ對シテハ補償ヲ爲スノ限ニ在ラス

前項ノ損害ニシテ申請ニ係ルモノハ申請者之ヲ補償シ命令ニ係ルモノハ政府之ヲ補償ス但シ申請者ノ補償ニ係ルモノハ政府ニ於テ其ノ三分ノ一以内ヲ補助スルコトヲ得

損害ノ算定方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十七條 第二十五條ノ買上價格又ハ前條ノ補償金額ニ付協議ハ整ハサルトキハ地方森林會ヲシテ評決セシムヘシ若之ニ服セサル者ハ評決ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ九十日以内ニ裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十八條 保安林ニ編入セラレタル森林ハ地租及公課ヲ免ス

第二十九條 官地私木ノ森林ニシテ保安林ニ編入セラレタルモノハ借地料ヲ免ス

第三十條 從來ノ禁伐林、風致林又ハ伐木停止林ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ保安林トシ其ノ森林ニ對スル從來ノ制限ハ仍其ノ効力ヲ有ス

第四章 森林警察

第三十一條 代木造材又ハ木材賣買ヲ業トスル者ハ其林産物ニ使用スル記號又ハ印章ヲ所轄警察署ニ届置クヘシ

警察署ハ他人ノ記號又ハ印章ニ類似スルモノ、使用ヲ禁止スルコトヲ得

第三十二條 伐木造材ヲ業トスル者ノ手帳、帳簿器具等ニ對シ森林官吏又ハ警察官吏ノ検査アルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第三十三條 森林官吏又ハ警察官吏ノ許可ヲ得スシテ森林内ニ火入ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條 森林ニ接續スル原野ニ火入ヲ爲ストキハ森林ニ對シテ豫メ防火ノ設備ヲ爲スヘシ

第三十五條 森林ニ於テ濫ニ焚火ヲ爲シ又ハ炬火ヲ携帯スルコトヲ得ス

第三十六條 森林又ハ其ノ近傍ニ於テ火災又ハ虫害アルヲ發見シタル者及森林ニ關スル罪ヲ犯シ若ハ犯サムトスル者アルヲ覺知シタル者ハ直ニ森林官吏、警察官吏又ハ郡市町村吏員ニ申告スヘシ

第五章 罰則

第三十七條 森林ニ於テ其ノ主副産物ヲ竊取シタル者ハ森林竊盜トシ二圓以上
贓額二倍以下ノ罰金又ハ十一日以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其ノ主副産物ニ
シテ人工ヲ加ヘタルモノニ係ルトキ亦同シ但シ罰金ハ贓額以下ニ下スコトヲ
得ス

第三十八條 森林竊盜ニシテ左ニ記載シタル所爲アルトキハ二圓以上贓額二倍
以下ノ罰金及二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス但シ罰金ハ贓額以下ニ下スコ
トヲ得ス

- 一 根株ヲ毀壞若ハ隠蔽シテ罪跡ノ湮滅ヲ圖リタルトキ
- 二 贓物ヲ原料トシテ木炭、樟腦、椎茸、松根油其ノ他ノ物品ヲ製シタルトキ
- 三 贓物ヲ燃料トシテ鑛物ノ採取精製若ハ石灰、煉化石、瓦其ノ他ノ物品ノ製
造ニ使用シタルトキ
- 四 犯罪ヲ容易ナラシムル爲船舶ヲ使用シタルトキ
- 五 保安林ニ於テ盜伐ヲ爲シタルトキ
- 六 林産物採取ノ權利ヲ行使スルニ際シ其ノ罪ヲ犯シタルトキ

七 三人以上共謀シ又ハ五人以上ヲ雇使シテ其ノ罪ヲ犯シタルトキ

八 契約ニ依リ森林保護ノ義務ヲ有スル者其ノ罪ヲ犯シタルトキ

九 差押ノ贓物ヲ隠匿若ハ消費シタルトキ

第三十九條 森林竊盜ノ贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若ハ牙保
ヲ爲シタル者ハ二圓以上贓額二倍以下ノ罰金及一月以上三年以下ノ重禁錮ニ
處ス但シ罰金ハ贓額以下ニ下スコトヲ得ス

第四十條 他人ノ所有ニ屬スル森林ノ樹木ヲ傷害シタル者ハ二圓以上五十圓以
下ノ罰金ニ處ス

第四十一條 他人ノ森林ニ放火シタル者ハ輕懲役ニ處シ因テ主産物ヲ燒燬シタ
ル者ハ重懲役ニ處ス其ノ自己ノ森林ニ係ルトキハ二月以上二年以下ノ重禁錮
ニ處ス

第四十二條 濫ニ他人ノ森林内ニ於テ牛馬ヲ放牧シタル者ハ二圓以上五十圓以
下ノ罰金ニ處ス

第四十三條 森林ノ爲設ケタル標識ヲ移轉シ若ハ毀壞シタル者ハ二圓以上三十

日本山林一斑

圓以下ノ罰金ニ處ス其ノ經界ヲ表シタル物件ニ係ルトキハ刑法第四百二十條ヲ適用ス

第四十四條 立木、木材又ハ根株ニ附シタル記號印影ヲ變更若ハ消除シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十五條 第六條ノ許可ヲ得スシテ森林ヲ開墾シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス保安林又ハ開墾禁止ノ森林ニ係ルトキハ罰金ノ外仍十一日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

他人ノ森林ヲ開墾シタル者亦同シ

第四十六條 保安林ニ於テ皆伐ヲ爲シ又ハ禁止若ハ制限ノ命令ニ違背シテ伐木ヲ爲シタル者ハ其ノ伐採シタル木材代價相當ノ罰金ニ處ス

第四十七條 第十三條又ハ第二十條ニ違背シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十八條 第三十二條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十九條 第三十三條第三十四條又ハ第三十五條ニ違犯シタル者ハ二圓以上

五十圓以下ノ罰金ニ處ス因テ他人ノ森林ヲ燒燬シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十條 第三十一條ニ違背シタル者ハ五十錢以上ノ科料ニ處ス

第五十一條 此ノ法律ニ規定シタル罪ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用キス

第六章 雜則

森林法

第五十二條 此ノ法律ニ於テ開墾ト稱スルハ燒畑、切替畑及地目變換ヲ包含ス

第五十三條 森林竊盜ノ贓物ヲ原料トシテ採取又ハ製造シタル樟腦、樟腦油、桐其ノ他樹木ノ脂液及木炭ハ贓物ト見做ス

第五十四條 此ノ法律ニ依リ徵收スヘキ費用ハ國稅滯納處分法ニ依リ徵收スルコトヲ得

第五十五條 森林ニシテ此ノ法律發布以前ヨリ無立木トナリ又ハ荒廢ニ屬スルモノハ主務大臣ニ於テ期限ヲ定メ造林ヲ命スルコトヲ得其ノ造林ヲ怠ル場合ニ於テハ第五條ノ規程ヲ適用ス

第五十六條 前條ニ依リ造林ヲ命セラレタル森林ハ其ノ造林シタル部分ニ限り翌年ヨリ二十五箇年以内地租及公課ヲ免スルコトヲ得

原野山岳又ハ荒蕪地ニシテ新ニ造林シタルモノハ前項ノ例ニ依ル

第五十七條 北海道沖繩縣其ノ他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ノ森林ニ就テハ保安林ニ關スル規程ニ限り此ノ法律ヲ適用ス但シ保安林ノ編入解除ニ關スル手續ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十八條 此ノ法律ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

森林法施行細則

(明治三十年十二月十四日 農商務省令第十九號)

第一條 府縣知事ハ森林法第三條乃至第五條第七條第二十一條乃至第二十四條及第五十五條ノ執行ヲ必要ト認ムルトキハ農商務大臣ニ具申シテ指揮ヲ請フヘシ

第二條 保安林編入ノ申請書又ハ官廳ノ通知書ニハ保安林編入調書及圖面ヲ添付スヘシ

保安林編入調書ノ様式ハ府縣知事之ヲ定ム

第三條 保安林解除ノ申請書又ハ官廳ノ通知書ニハ解除ヲ要スル理由ヲ記載スヘシ

但保安林幾部ノ解除ニ係ル場合ハ保安林ノ全部及解除スヘキ部分ヲ明示シタル圖面ヲ添付シ之ニ其解除スヘキ保安林ノ面積ヲ附記スベシ

第四條 府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ必要ト認メ若クハ保安林編入解除ニ就キ申請又ハ通知ヲ受ケタルモノニシテ其編入解除ニ就キ二府縣以上ノ利

密ニ關係アルトキハ其旨ヲ關係府縣知事ニ通知スヘシ

第五條 府縣知事ニ於テ保安林ノ編入解除ニ付地方森林會ノ答申書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ具シ關係書類ヲ添付シテ三十日以内ニ農商務大臣ニ提出スヘシ

第六條 農商務大臣ニ於テ保安林ノ編入解除ヲ決定シタルトキハ其旨ヲ關係府縣知事ニ通達シ府縣知事ハ五日以内ニ府縣公報ヲ以テ其旨ヲ告示シ森林所在地ノ市町村役場ニ揭示シ且ツ其旨ヲ森林所有者ニ通達スヘシ

第七條 府縣知事ハ保安林ヲ買上クルノ必要アリト認ムルトキハ農商務大臣ノ指揮ヲ受ケ森林所有者ト協議シテ其買上價格ヲ定ムヘシ

第八條 保安林ノ買上價格又ハ補償金額ニ付協議整ハサル場合ニ於テハ森林法第二十七條ニ依リ府縣知事ハ之ヲ地方森林會ノ會議ニ附シ其評決シタル買上價格又ハ補償金額ヲ關係者ニ通達スヘシ

第九條 保安林損害ノ補償若クハ其補償ノ補助ヲ受ケントスル者ハ其金額ヲ定メ算定理由ヲ詳述シタル請求書ヲ府縣知事ヲ經由シテ農商務大臣ニ差出スヘシ

第十條 森林法第三十一條ニ依ル届書ハ其記號ノ形狀並ニ印影ヲ添付シタル書面ヲ作業地營業地ノ所轄警察署ニ差出スヘシ

前項ノ場合ニ於テ警察署ハ所管小林區署ニ通知スヘシ

第十一條 森林内ニ火入ヲ爲サントスル者ハ豫メ期日ヲ定メ森林官若クハ警察官ニ申出許可ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テ火入ヲ許可シタルトキハ別記火入許可證ヲ交付スヘシ

第十二條 森林内火入ノ當日ハ火入者ニ於テ前條ノ火入許可證ヲ現場ニ携帯スヘシ

第十三條 森林内又ハ森林ニ接續スル原野ニ火入ヲ爲サントスル者ハ火入期日前ニ火入箇所隣接地ノ所有者若クハ管理者ニ其旨ヲ通知スヘシ

第十四條 火入ノ場合ニ於テ他ニ延燒ノ虞アリト認メタルトキハ森林官又ハ警察官ハ其火入ヲ差止メ火入方法又ハ火入期日ヲ改メシメ若クハ相當ノ設備ヲ爲サシムヘシ

(別記)

表

年 月 日		年 月 日		年 月 日	
許 可	取 扱	官 吏	取 扱	官 吏	取 扱

裏

火 入 人 入 火 得 心

一 火 入 人 火 入 當 日 此 證 書 現 場 携 帶 シ 森 林 官 吏 又 ハ 警 察 官 吏 ノ 要 求 ア リ タ ル ト キ ハ 之 チ 示 ス ヘ シ

一 火 入 人 火 入 期 日 火 入 箇 所 ニ 接 續 セ ル 森 林 其 他 土 地 ノ 所 有 者 若 ク ハ 管 理 者 ニ 通 知 ス ヘ シ

一 火 入 期 日 ハ 許 可 ナ 受 ケ タ ル 後 下 雖 モ 森 林 官 吏 又 ハ 警 察 官 吏 ノ 指 揮 ア リ タ ル ト キ ハ 其 指 揮 ニ 從 ヒ テ 變 更 ス ベ シ

一 他 火 入 期 日 許 可 ナ 受 ケ タ ル 後 下 雖 モ 森 林 官 吏 又 ハ 警 察 官 吏 ノ 指 揮 ア リ タ ル ト キ ハ 其 指 揮 ニ 從 ヒ テ 變 更 ス ベ シ

一 備 用 指 揮 官 吏 又 ハ 警 察 官 吏 ニ 於 テ 指 揮 ア リ タ ル ト キ ハ 其 指 揮 ニ 從 フ ヘ シ

保安林取扱心得

(明治三十年十二月十四日 農商務省訓令第三十一號)

第一章 保安林調査

第一條 保安林ハ設定ノ目的ニ依リ左ノ十二種ニ區分調査スルモノトス

- 一 土砂扞止林
- 二 飛砂防止林
- 三 水害防備林
- 四 防風林
- 五 潮害防備林
- 六 積雪防止林
- 七 墜石防止林
- 八 水源涵養林
- 九 魚附林
- 十 目標林
- 十一 衛生林
- 十二 風致林

第二條 保安林調査ニ於ケル地形地質ノ異同地物配置ノ状態其他利害ノ關係ヲ推斷スルニ必要ナル事項ハ唯目的箇所ノ區域内ノミニ止マラス廣ク全般ノ形勢ニ注目スヘシ

第三條 保安林調査ニ於ケル目的箇所ノ區域面積其他必要ナル區界竝ニ顯著ナル物件ノ位置等ノ調査ハ可成精確ナル方法ニ依リテ測量スヘシ

第四條 保安林調査ハ利害關係ノ顯著ナルモノヨリ漸次著手スヘシ
保安林ノ編入ニ付申請アリタルトキ若クハ官廳ノ通知アリタルトキハ速ニ保

保安林調査ヲ行フベシ

第五條 保安林調査ニ於テハ主トシテ左記各項ノ事項ヲ調査シ保安林編入調書ヲ製スヘシ

- 一 目的箇所ノ所在地籍地目地番及其所有主
- 二 面積及地價
- 三 地形地質及地盤面ノ形狀
- 四 現在ノ林況
- 五 保安林編入ノ事由
- 六 保安林編入後ニ於ケル營林及保護ノ方法其他必要ナル制限事項
- 七 保安林編入後ニ於ケル造林及地盤保護工事ノ種類並ニ方法
- 八 關係區域

第六條 保安林種類ノ撰定ヲ爲スニ當リ編入ノ目的二種以上ニ涉ル場合ハ實地ノ形勢ニ依リテ效用ノ程度及必要ノ多少等ヲ比較シテ其主ナル種類ノ保安林ニ編入ノ目的ヲ以テ調査シ其旨ヲ調書ニ記入シ置クヘシ

日本山林一斑

第七條 保安林編入調書ハ別記様式ニ依リテ各調査箇所毎ニ調製シ保安林地圖ヲ添付スルモノトス

第八條 保安林地圖ハ各調査所毎ニ一圖トシ左ノ各項ヲ明示スルモノトス

- 一 調査箇所及其附近ノ地形
 - 二 調査箇所ニ於ケル林況並ニ地物ノ配置
 - 三 境界並ニ隣接地ノ種類
- 保安林地圖用紙ハ礬水引美濃紙半片一枚及二枚繼ノ三種各一葉ヲ以テ全紙トシ縮尺度ハ可成千分一二千分一及五千分一ノ三種中ニ就キ撰ムヘシ

第二章 保安林ノ施業

第九條 保安林ニ於テハ二圓地以上ノ林ヲ併合シテ斫伐作業ヲ爲スコトヲ得ス

第十條 保安林ノ斫伐法ハ擇伐又ハ群成擇伐作業ヲ用ユルモノトス

第十一條 毎年ノ擇伐區域ハ立木竹地全面積ノ二十分ノ一ヨリ小ナルコトヲ得ス

第十二條 擇伐又ハ群成擇伐面積斫伐スヘキ木竹ノ占領面積ハ立木竹地全面積

保安林採取心得

ヲ輪伐齡ヲ以テ除シ得タル商ノ三分ノ二ヲ超ユルコトヲ得ス
 群成擇伐ハ可成箇所ヲ増シ一箇所ノ面積ハ力メテ狭小ナラシムヘシ
 但手入間伐及被害木竹ノ斫伐ハ此限りニアラス

第十三條 保安林ニ於ケル輪伐齡ハ左ノ標準ニ依リ調査スヘシ

- 一 矮林二十年以上
- 一 喬林八十一年以上
- 一 中林ノ上木ハ喬林ノ輪伐齡下木ハ矮林ノ輪伐齡
- 一 竹林五年

第十四條 斫伐ヲ行フニ於テハ到底地方ヲ維持シ若クハ回復スルノ見込ナキモ
 ノ又ハ高地ノ森林ニシテ木竹ノ生長極メテ遲鈍ナル場所急斜砂岩地等ニシテ
 再ヒ森林ヲ仕立ツルコト困難ナル場所ノ如キハ斫伐ヲ禁止スヘシ

第十五條 防火及砂防ノ設備ノ必要アル箇所ハ豫テ其方法ヲ調査スヘシ

第十六條 現在ノ保安林竝ニ將來保安林ニ編入スヘキ箇所ニシテ荒廢ニ屬スル
 モノ八十箇年以内ニ造林セシムルノ目的ヲ以テ調査スヘシ

第三章 附則

第十七條 利害ノ關係ニ府縣以上ニ跨ル森林ニ在リテハ關係府縣知事協議ノ上
 便宜其主管ヲ定メテ保安林ノ調査ヲ爲スヘシ

第十八條 保安林調査ハ國有林及部分林ニ在リテハ大林區署御料林ニ在リテハ
 御料局ニ委嘱スルコトヲ得

第十九條 森林法施行以前ノ編入ニ係ル保安林調査ハ森林法施行後五箇年以内
 ニ之ヲ調査スヘシ

保安林編入調書

所在地(林ノ字)		何府縣何郡市何町村大字何字何番何山又ハ何林	
所有者住所氏名			
通知者住所氏名			
全面積	百十五町五反步	保安林編入面積	七十五町步

編 入ノ事由	現 況											
	保安林地價	傾 斜	土 性	地 表	境 界	樹 竹 種	樹 竹 齡	疎 密	慣行ノ伐期	雜 産 物	慣行 施 業	被害ノ 状 況
水源涵養土砂打止ニ必要ノ森林ト認ム	平均凡三十度	上層ハ硬質壤土(傾土)硬質壤土(砂土)ニシテ砂及礫ヲ混ス深サ六寸次ハ砂質粘土層砂層及礫層ニシテ其合計深サ二尺其若ハ礫若ニシテ所々ニ露出ス	落葉汚土少ナク稍乾燥ニシテ灌木及雜草疎生シ苔蘚ハ谿畔ニ少許ヲ見ル	東ハ某所有ノ無立木地ナル山林 南ハ何村共有秣場 西及北ハ官有原野ニ接ス	檜六分花柏四分	五十年乃至七年生ヲ主トシ間ニ十二年生ノモノヲ混ス	疎(最密密中庸疎最疎)ニシテ一町步平均三百本日光殆ント林地ニ注射ス	八九十年	蔬菜、落葉、下草等少許	需用ヲ俟チ擇伐ス平均一箇年全面積ヲ伐採量千四百尺メニシテ空隙ニハ檜苗ヲ補植ス	長樹ノ伐採過量ナルガ故ニ林相亦昔日ノ觀ナク谿水著シク減少シ小雨ニモ土砂ヲ流シテ混濁ス	水源涵養土砂打止ニ必要ノ森林ト認ム

臺帳 番 號	關 係 區 域	施 業 法 要 領								
		保安林種類	伐採法又ハ禁伐	伐 期	伐採面積	雜産物ノ採否	播 植 法	手 入 法	地盤保護工事	取 締 法
臺帳ニハ編入調書番號ヲ記ス	何村何村二箇村ノ水田灌漑ニ影響シ其段別凡何町步ナリ	水源涵養林	擇伐	百五十年	五段步	落葉ノ採收ノミヲ許ス	自然生ヲ撫育シ且ツ勉メテ檜ヲ補植シ速カニ密林トナスヲ要ス	適宜灌木ヲ刈除シテ稚樹ノ生育ヲ保護シ且今後何年間ニ若干ノ間伐ヲ許ス	砂防ノ爲メ積苗工ノ施行ヲ要ス	野火ノ延燒ヲ防グニ注意シ豫メ周圍ニ幅五間以上ノ防火線ヲ設ケシム

地方森林會規則

(明治三十年十二月九日
勅令第四百四十號)

百十二

日本山林一斑

- 第一條 地方森林會ハ農商務大臣ノ監督ニ屬シ左ノ事項ヲ審議ス
 - 一 保安林ノ編入又ハ解除
 - 二 保安林買上價格ノ評決
 - 三 保安林補償金額ノ評決
 - 第二條 地方森林會ハ會務整理ノ爲必要ナル規則ヲ議定シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ
 - 第三條 地方森林會ハ議事上實地ノ調査ヲ爲スノ必要アリト認ムルトキハ議員ヲ派遣スルコトヲ得
 - 第四條 地方森林會ノ開會及閉會ノ期日ハ府縣知事ノ稟請ニ依リ農商務大臣之ヲ定ム
- 地方森林會ノ審議事項ニシテ其ノ利害ノ關係ニ府縣以上ニ涉ルトキハ聯合地方森林會ヲ設クヘシ其ノ開會地及閉會期日ハ關係地方府縣知事ノ稟請

地方森林會規則

- ニ依リ農商務大臣之ヲ定ム
 - 第五條 農商務大臣ハ左ノ場合ニ於テ地方森林會又ハ聯合地方森林會ノ解散ヲ命シ又ハ其ノ議事ヲ停止スルコトヲ得
 - 一 第一條ニ掲グル事項ヲ審議セサルトキ
 - 二 議事其ノ權限ヲ越ヘ若ハ法律命令ニ背クト認ムルトキ聯合地方森林會解散ノ場合ニ於テハ之ニ關聯スル地方森林會ハ同時ニ解散セラレタルモノトス
 - 解散ノ場合ニ於テハ農商務大臣ハ解散ヲ命シタル日ヨリ三十日以内ニ更ニ地方森林會ノ議員ヲ選定スヘシ
 - 第六條 地方森林會ハ議長一名議員十四名以内ヲ以テ之ヲ組織ス
 - 第七條 議長ハ議事ヲ整理シ會務ヲ指揮ス
 - 第八條 議長ハ府縣知事ヲ以テ之ニ充ツ
- 議員ハ左ニ掲グル者ニ就キ農商務大臣之ヲ選定ス但シ第五ニ該ルモノハ其ノ互選ニ依ル

- 一 府縣高等官 一人
- 二 土木監督署高等官 一人
- 三 鑛山監督署高等官 一人
- 四 大林區署高等官 一人
- 五 名譽職府縣參事會員 二人
- 六 府縣制ヲ實施セサル地方ニ在リテハ府縣常置委員 二人
- 六 森林事業ニ經驗アル者 若干
- 七 治水土木及鑛山事業ニ經驗アル者 若干
- 第九條 官吏ニシテ議員タル者ノ外議員ノ任期ハ二箇年トス
- 第十條 地方森林會ニ幹事一名書記若干名ヲ置ク
- 幹事ハ府縣高等官ヲ以テ之ニ充テ議長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理セシム
- 書記ハ議長ノ選任ニ依リ府縣判任官ヲ以テ之ニ充テ幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事セシム
- 第十一條 聯合地方森林會ハ關係地方森林會議員ノ總數ヲ以テ之ヲ組織シ其ノ

- 議長幹事及書記ハ開會地ノ地方森林會議長幹事及書記ヲ以テ之ニ充ツ
- 第十二條 官吏ニシテ議長議員タル者ノ旅費ハ所屬官廳ノ經費ヲ以テ之ニ充ツ
- 前項ノ外議員ノ手當及旅費其ノ他地方森林會ノ費用ハ府縣ノ負擔トス
- 第十三條 聯合地方森林會ノ費用ハ議員ノ手當及旅費ヲ除ク外總テ開會地府縣ノ負擔トス

官林箇所面積表

廿九年三月卅一日現在

斑 一 林 山 本 日

府縣	保所存林積	供所用林積	合所面積
青森	四六二	七五〇五	七九六七
秋田	一一一五	一六七〇	二七八五
宮城	二二六	一九九〇	二一九〇
岩手	一一二	二九六〇	三〇〇一九
山形	一一一	四〇九四	四一五二
福島	四八九	三八八二	三九六三
東京	四	四七六〇	四八〇四
埼玉	一三四五	一四六七	二五九〇
千葉	二〇九〇	一〇七四	四三七六
茨城	二一〇	四八七九	五〇八九
群馬	四八二	四五五四	二五三三
栃木	七一五	二六〇四	二六九四
合計	一三二二九	九三二九三	一〇六五二二

表 積 面 所 箇 林 官

長野	富山	石川	新潟	岐阜	大坂	京都	滋賀	三重	和歌山	奈良	兵庫	福井	廣島	山口	島根
二四	二四	二四	一、二七三	八六	四九五	六八	五五四	二、四二五	五二三	二、四六	二、六五三	二、一六	三、六〇	一、〇〇	九、二〇
一〇	一〇	一〇	三、六八三	六四	五、一四	三、六四	二、六五三	八、四〇	二、五二六	二、五五	五、二一六	五、四四	一、九二六	二、九八	七、六八
二、四二二	二、四二二	二、四二二	一、七〇三	一、五七〇	二、〇一	五、七八	一、二六	四、八六	一、五五	三、〇四	一、四八五	一、七二	四、二五六	六、一六	六、四一
五、二一七、八五	九、八一九〇	四、七六八一	三、八九八二八	三、四七、二一三	一、六六三	六、二二八	九、三三〇	一、二、三八五	三、〇、三四八	四、三〇八	二、四、八四二	三、五〇七	九、一七〇五	二、五〇四一	五、二〇八二
二、四二二	二、二六	八、四三	二、九七六	一、六五六	六、九六	六、四六	六、八〇	二、九一一	六、七八	五、五〇	四、一三八	三、八八	四、六一六	七、一六	一、五六一
五、二一七、八五	九、八一〇〇	四、七、九九六	三、九三、五一	三、四七、二七七	二、一七七	六、五九二	一、一、八八三	一、三、二二五	三、二、八七四	四、五、六三	三、〇〇、五八	四、〇、五一	九、三、六三一	二、五、三三九	五、二、八五〇

官有山林原野箇所面積表

府縣	山林		原野		合計
	箇所	面積	箇所	面積	
青森	四九四	七三五二	七八三九	五四九九七	八三三三
秋田	三三三	八三六	六〇三五	一五三九〇	六三六七
宮城	七五七	七二二一	二、二五七	三、九三〇	三〇一四
岩手	二三四〇	二一〇四六	一一七九八	一五、七一二	一四、一三八
山形	六二八〇	六七三三〇	四、三三三	一一、一〇六	一〇、六〇三
福島	一三七九九	一一三〇五三	一五四、二四七	一七六、七六九	一六八、〇四六
東京	九八	二	一二六	一八	二二四
埼玉	九八	二	一二六	一八	二二四
千葉	一七七二	二九七	三、六二七	一、三八六	三、六二七
茨城	一七七二	二九七	三、六二七	一、三八六	三、六二七
群馬	二六四一	二二七〇	三、三八六	一、五八三	三、六二七
栃木	一六三三	二〇七九	一、五九九	七〇、四三九	一七、六三一
長野	三三三	一五、四四九	九、四七五	八五、九六九	九、四七五
富山	九六	四七	四一九	四〇〇一	三、六二三
石川	八一	一、四八二	一五八	八六	二、三九
合計					百十九

官有山林原野箇所面積表

廿九年三月卅一日現在

日本山林一斑

總計	宮崎	鹿兒島	熊本	大分	長崎	佐賀	福岡	徳島	香川	愛媛	高知	岡山	鳥取
二五一四四	二五〇	五六九	一五一	二九六	四八六	五二	一三八一	四八	五二九	六九六	三〇三	一八〇〇	一〇二八
一〇二、四三一	二〇〇三	三〇三六	四、〇〇〇	一六五	一一〇九二	二八四二	一三、一五四	一二〇	九〇六	一一二三	四四六	三、七四八	五〇五七
九五、八七六	三五七九	五、五八二	一九、一六五	六六三四	一〇一〇	一、六四五	四、五四〇	一四六	六〇七	六八〇	二、六四二	九四八	三、四三三
七、二七八九〇一	二〇、二七三	二一、七八〇三	一、二四五〇一	六、七一三四	一、四四六八	一九、五八六	四〇〇、一九	五〇七一	一、三七五三	一、三八六八四	一九、五九四六	三、二九三一	二、五〇七五
二、一〇二〇	三、八二九	六、一五一	一九、三一六	六、九三〇	一、四九六	一、六九七	五、九二一	一九四	一、二三六	一、三七六	二、九四五	二、七四八	一、三七一
七、三三八一、三三三	二〇、四三七六	二二〇、八三九	一、二八、五〇一	六、七、二九九	二、五、五六〇	二、二、四二八	五、三、一七三	五、一九一	一、四、六五九	一、三、九八〇七	一九、六、三九二	三、六、六七九	三〇、一、三三三

表積面所箇野原林山有民

鹿兒島	熊本	大分	長崎	佐賀	福岡	徳島	香川	愛媛	高知	岡山	鳥取	島根	山口	廣島	福井	兵庫	奈良	和歌山
三二七五三九	五四一六九九	五二二三八八	四六七五八九	二五八八二〇	三七八一八〇	三七九七八二	一七二二八三	六五七七四八	三六五七三三	八三一六五〇	一八三三九九	五〇〇九七七	六八一四八三	一一二〇一一	三九〇七七六	六五四二八六	二七〇六五七	二八四五〇七
四九七七二	四四四二六	四六三〇五	六一七二七	二九六九六	五四一七〇	一六八二二六	八四七四五	二二〇七八四	二六〇九八三	三三三九六六	六八五一	三六〇三八六	一五九九八三	四〇一一一四	一五六七九一	三九二四二五	一三三三四五	二六三二六〇
二五〇二〇七	一三一五五三	一九六〇八四	二〇九三九一	一一七三七八	六八三三三	一八一三七	四九〇八	一九四八八	三一〇四六	一一三九〇四	一三六三三七	五二四八四	三八八六三	一三〇〇七八	七一五六一	九九五三六	三二七一七	一八五七六
三五〇二五	一四一三六	五九三八六	二二七二七	二七五一八	四六〇〇八	一三五五八	三一六	六七一	一七六一	四五五六	六一六三九	一三五九	二六一〇	二八四四	二六七三	一一四八六	八九九	一三六四
五七七七四六	六七三二五二	七一八四七二	六七六九八〇	三七六一九八	四四六五二二	三九七九一九	一七七一九一	六七七二二六	三九六七七八	九四五五四	三一九七三六	五五二四六一	七二〇三四六	三三〇一八九	四六二二二	七五三八二二	三〇三三七四	三〇三〇八三
八四七九九	一〇五六九一	八四四五四	一〇〇一七八	一六九五七四	一〇〇一七八	一六九五七四	八五〇六一	二三一四五五	二六二七四四	三二八〇五二	一三〇一五〇	三六一七四五	一六二五九三	四〇三九五八	一五九四六四	四〇一九一一	一三三二四四	二六四五二四

斑 一 林 山 本 日

三重	滋賀	京都	大阪	岐阜	新潟	石川	富山	長野	栃木	群馬	茨城	千葉	埼玉	東京	福島	山形	岩手	宮城
六五三二八七	三三三九六三	三九二七七四	一五二〇七〇	六一四五七二	一七七八三八	五二二二〇〇	三五五五一一	四九七四九七	四九二〇三六	四〇六九二九	五九四六五五	七〇五八三二	三六六一一一	一五二二七七	八六九九七五	二四三二八八	二二八六二四	二六五八五九
二二二九五三	一〇〇〇四二	一三〇七四六	二四九四三	五五八八六八	二二三六二九	八四六〇四	七三六二九	二四三三三三	一七八三一二	一〇三二五一	一六一七七九	一二六二六二	七二八二二	四六〇七八	二一七三〇一	一四三二七八	四一九〇五四	一五五二九四
一〇一九一六	五〇七七七	四〇八八五	二〇五六五	二〇五六三三	二五四三九八	一一〇〇五九	一一七四三五	四四〇四七二	一一二四九六	一二九一〇〇	一九一九三三	一二三三八八	五九三三一	二七八一八	四〇三九九九	二六五八一九	一六〇五〇七	九六二二五
四五五九	一〇一五八	一三二二六	六三〇	八五四六	一四八七二	三三七六	四〇四五	一七七九二六	一八四九七	二一四一三	一七六五八	二四八三六	九四四四	七七五〇	二四六七五	一四七四四	九七七一三	一二一八一
七五五二〇三	三六四七四〇	四三三六五九	一七二六三五	八二〇二一〇	一四三二二三六	六四二二五九	四七二九四七	九三七九六九	六〇四五三二	五三六〇二九	七八六五八八	八二九二二〇	四二五四四二	一八〇一九五	一二七三四七四	五〇九六三七	三八九一三一	三六一九八四
二二七五二二	一一〇二〇〇	一三二〇七二	二五五七三	五六七四一四	二四八五〇一	八七九八〇	七七六七四	四二一六五八	一九六八〇九	一二四六六四	一七九四三七	一五一〇九八	八二二六六	五三二二八	二四一九七六	一五七九二二	五一六七六七	一六七四七五

御料林野箇所反別表

府縣	山	林	原	野	合	計
宮崎	二三〇、二〇二	四六、九二五	一六六、二九	二一、七一八	三四六、八三一	六八六、四三三
北海道	三、一三一	九、二八七	三七	七、二五	三、一六八	一〇、〇二二
神奈川	二八九、三五五	七七、四七六	一三四、五二五	二五、二五五	三三三、八八〇	一〇、二七三
愛知	四七二、七二〇	九七、五七六	九六、四〇八	六、五六六	五六九、一七八	一〇、四一四
靜岡	五四二、九七一	二八六、八六九	一四三、三七九	七四、五九六	六八六、三三〇	二、六一、四六五
山梨	二五一、五〇二	五〇、六一九	一〇二、七九四	一三、二三五	三五四、二九六	六三、八五四
總計	二〇、四三、八九五	七、三一、五三六	五五〇、八一六	一〇、五六、三四〇	二、五六、五二〇	八、三七、一七〇

府縣	山	林	原	野	合	計
群馬	三五	三九三	三三八	一七、一五七	三七三	一七、五五〇
茨城	四	九四	二、二八〇	七、六四五	二、二八四	七、七三九
栃木	二	九	一一九	一、五三	一一一	一、六二
奈豆	六六	七、四六六	一〇、五六	八、〇二五	一一、二二	一、五、四九一
靜岡	一一六	五〇	五	一一	一一一	六二
山梨	二、七三二	一八八、七七〇	四、八一	二二、二二九	七、五四三	二二〇、九九九
長野	三、五五六	四〇、九〇二	三六〇、八	二、八三八	七、一六四	四、一一、八六〇
岐阜	一、一九六	四八五、二二七	七三	四、八四五	一、二六九	四、九〇、〇七二
愛知	二、二六〇	二、一三、八四九	一〇〇、五	三〇三	三、二六五	二、二四、一五二
三重	六九〇、六	七、四八〇、四	三九八	一〇、五	七、三〇四	七、四、九〇九
滋賀	六七四	一九〇、五四	一一	三	六八五	一九〇、五七
宮城	一	一七九	一〇	三	一一	一七九
福島	二〇	一一一	一〇	三、一三四	一一	三、二四五
岩手	一一三	一一、三〇〇	一七	三、八二五	三七	三、八三、八
青森	三四	九、七六四	六八	一、八八四、五	一八一	三〇、一四五
秋田	二	三三	七〇	三、七九五、六	一〇一	四、七、七二〇
山宮	一	三三	一六九	一、二五六	二	一、一五六

日本山林一斑 終

北海道	六四〇、五五二	一〇	三八、三四〇	六四〇、五五二
總計	一九六、五九〇	一四七、五一	一六八、五六六	六四〇、五五二
面積計	二〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二
	三〇九、三〇〇	一六八、五六六	一六八、五六六	六四〇、五五二

百二十六

明治三十一年七月廿五日印刷
 明治三十一年八月廿三日發行

定價金廿五錢

著者 柴田榮吉

發行者 大橋新太郎

印刷者 松本魁

印刷所 國文社

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

東京市京橋區宗十郎町十五番地

林學士白杵永次郎君著

造林學

全二冊洋裝
正價拾五錢
郵稅六錢

我國從來木材を使用すると多し家屋器具より日用の薪炭に到るまで盡く木材に資らざるなし従つて森林樹木の伐採甚だしく加之維新後奉還士族濫伐の弊を受け到る處禿山裸谷重疊連亘するを見る今に於て救済の道を講せずんば木材供給の道絶えて國民經濟の恐慌を來たし水源涸れ土砂流出し終に農業の大本を錯亂し氣候の調和を失ひ國民の健康を破るに至らんとす曰杵林學士之に鑑み此書を出版す文簡にして意明なり森林を救済せんとする諸君希くは一讀あれ

林學士白杵永次郎君著

林產物製造法

全二冊洋裝
正價三拾錢
郵稅十二錢

我が肥沃なる土壤と、温和なる氣候とは、頗ぶる植物の繁殖に適し、殊に森林の培養に便なり、然れども世人は未だ林產物を製造し以て森林の功用を増大するを知らず、僅かに森木を採て木炭を製し、若くは松脂樟腦の類を收むるも、唯だ多年の經驗によりて之を爲すのみ、未だ學理に徴して器械を用ぬ、之を採收するを知らず、故に材を費やす多くして功を收むる少なし、況や此等木炭、松脂、樟腦等の外、化學的作用に因りて醋酸、木精ケルソート等の液體と、炭素、水素等各種の瓦斯とを得るか如きは、我造林家、未だ曾て之を知らざるなり、本書の著者此に慨するあり、多年専門として林產物製造の學科を修め、東西の學理に加ふるに古今の實驗を折衷し、以て各種林產物の製造法を詳述し、此の森林國の物産を饒かにし、以て國利民福を増進せんと欲す、事に林業に従ふの人々は勿論、苟くも意を用厚生の事に注ぐ人は、須らく一本を座右に備ふべし。

林學士鈴木審三君著

林業篇

全一冊洋裝
正價拾五錢
郵稅六錢

森林の培養は國家百年の大計なり、見るべし我國の俗、住居、器具、何れか木材によらざらん、況や人文漸やく開け、陸に鐵道を敷き、海に船舶を駛す、其用材は主として森林に頼らざるを得ず、歐洲極北の諾威瑞典の如き、其氣候寒く、土地礫礫なるも、尙ほ其國の歳入は主として林材に依て餘裕あり、森林の利大なりと云ふべし、唯だ木材に於て然るのみならず、能く氣候を調和して降雨を順にし、其効益數ふるに堪へず、然れども森林培養の方法宜きに適はずんば、十百年間年々苗を種て培養に力むるも、終に徒勞に屬すべきのみ、而して能く其の土地、氣候、樹木の性質、培養の方法等を詳論し、學理に徴し、實際に驗し、斯業の爲に誘導提撕の勞を執るの親切なるもの本書の如きは世に比類なきなり。

土木監督署技師理學士土田鐵雄君閱
土木工師龜井重磨君著

實土木便覽

全一冊洋裝
金字入新形
正價六拾錢
郵稅六錢

本書は専ら土木工事に従事する者の爲めに之に必要なる各種材料の性質、強弱試驗法、用法、構造並に建築、測量等あらゆる工事に於て注意すべき事項、諸般の公式、諸種の表等を網羅蒐集したるものなれば、苟くも是等實業に關する人々の備へざるべからざる寶典にして、前古未曾有の珍書なり

農學通論

全一冊洋裝上製
正價九拾錢
郵稅拾貳錢

農學階梯

全一冊洋裝並製
正價七拾五錢
郵稅拾貳錢

農學入門

全一冊和裝
正價八拾五錢
郵稅拾貳錢

農業讀本

全一冊洋裝並製
正價拾四錢
郵稅拾貳錢

農業大意

全一冊洋裝並製
正價六拾錢
郵稅拾貳錢

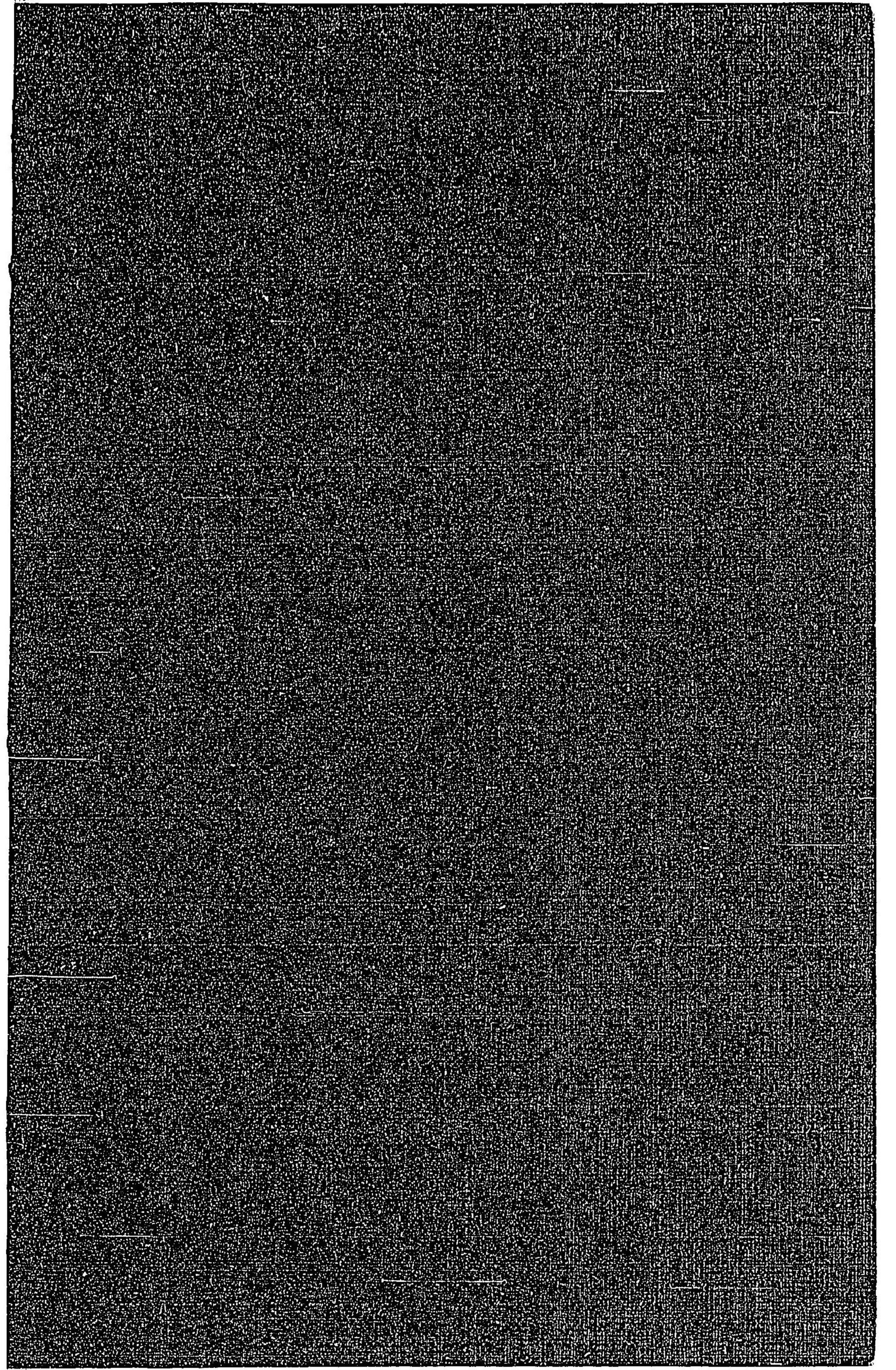
實用農業全書

全部二十卷出版完成
 正價 壹冊金十五錢 拾冊金壹圓
 貳圓六拾錢 郵稅壹冊六錢宛

全部完成目次	
第一編 農業汎論	農學士 橫井 時敬君著
第二編 農業須知	農學士 池田日升三君著
第三編 農產製造編	農學士 今剛常次郎君著
第四編 蠶業編	農學士 高田 鑑三君著
第五編 栽培編 上	農學士 堀尾 鏡作君著
第六編 栽培編 下	農學士 池田日升三君著
第七編 農業經濟編	農學士 今剛常次郎君著
第八編 養畜編	農學士 原 謙君著
第九編 作物病害編	農學士 小島 銀吉君著
第十編 作物編	農學士 高田 鑑三君著
第十一編 肥料	農學士 原 謙君著
第十二編 土壤改良編	農學士 中村 鼎君著
第十三編 造林學	農學士 白杵永次郎君著
第十四編 林產物製造法 上	農學士 白杵永次郎君著
第十五編 林產物製造法 下	農學士 白杵永次郎君著
第十六編 林業編	農學士 鈴木 憲三君著
第十七編 獸醫編 上	獸醫學士 河村 兵藏君著
第十八編 獸醫編 下	獸醫學士 安井淳之助君著
第十九編 米麥編	農學士 楠原 正三君著
第二十編 水產學大意編	農學士 關澤 明清校開 竹中 邦香君著

81

91



81
91

065341-000-1

81-91

日本山林一斑 附, 現行森林法規

柴田 栄吉/著

M31.8

CCE-0183



34.11. 9